

大 平 遺 跡

2006

財団法人岐阜県教育文化財団

おお だいり 遺 跡
大 平

2006

財団法人岐阜県教育文化財団



大平遺跡出土 土器棺

序

恵那市串原（旧恵那郡串原村）は恵那山麓に広がる三河高原の一部をなす緑豊かな地域で、美濃地方の南東部に位置します。南側は三河地方に接します。また、東側は伊那地方に近く、中馬街道など古くから各地方を結ぶ街道が通じてきた場所です。

今回実施した大平遺跡の調査は県道下明智線道路改良に伴うもので、この道路の建設により地域の生活道としての利便性が高まるものと考えられます。

大平遺跡は昭和62年（1987）に村営土地改良事業に伴う発掘調査が行われ、石囲い炉をはじめとする縄文時代の遺構や遺物が確認されました。今回の調査は前回の調査に隣接する地区で、縄文時代の墓跡と思われる土坑や弥生時代前期の土器棺墓、古墳時代前期の竅穴住居跡などが確認され、長い時代に涉って墓域や居住域として当地で人々が生活していた様子を伺うことができました。また、日々の生活に使用した鉢や壺、それらを埋葬に転用した土器棺などの土器類の他、黒曜石や下呂石、ヒスイなど他地域と交流したことが分かる石材を用いた石器などが出土し、当時の墓制や他地域との交流などを解明する上で貴重な資料となりました。

本報告書が当地の歴史研究の一助になるとともに埋蔵文化財に対する多くの方々の認識を深めるものとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、旧串原村教育委員会、地元地区の皆様深く感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人岐阜県教育文化財団

理事長 日比 治男

例 言

- 1 本書は、恵那市串原（旧恵那郡串原村）字下大平に所在する大平遺跡（岐阜県遺跡番号21210-08355）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は県道下明智線道路改良に伴うもので、岐阜県基盤整備部恵那建設事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成15年度、整理作業は平成16年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当などは、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は第2章第1節が藤岡比呂志、それ以外は古屋寿彦が行った。また、編集は古屋が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削などの業務及び空中写真測量は、(株)GIS 中部に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 炭化材の放射性炭素年代測定、赤色顔料分析、黒曜石の原産地推定は榊バレオ・ラボに委託して行った。その結果は第5章に掲載した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略・五十音順)
赤塚次郎、安藤克彦、石黒立人、泉 拓良、岩瀬彰利、川添和暁、永井宏幸、長屋幸二、
松岡千年、矢野健一、渡邊博人
旧串原村教育委員会、旧串原村産業建設課
- 10 本文中の方位は、世界測地系の座標北を示している。
- 11 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998『新版 標準土色帖』(日本色研事業株式会社)による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターで保管している。

目次

序	
例言	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と方法	2
第2章 遺跡の環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 遺構	7
第1節 基本層序	7
第2節 遺構の概要	9
第3節 主要遺構	16
第4章 遺物	31
第1節 出土遺物の概要	31
第2節 土器類	31
第3節 石器類	39
第5章 自然科学分析	50
第1節 放射性炭素年代測定	50
第2節 土器の赤色顔料の蛍光X線分析	52
第3節 黒曜石製石器の原産地推定	56
第6章 考察 まとめ	59
参考文献	64
図版	
写真図版	
報告書抄録	

図版目次

図版1 SB001実測図	図版22 土器実測図(8)遺構
図版2 SB001内遺構実測図	図版23 土器実測図(9)遺構
図版3 SH001実測図	図版24 土器実測図(10)遺構
図版4 SZ002・003実測図	図版25 土器実測図(11)遺構
図版5 SZ004・007実測図	図版26 土器実測図(12)遺構
図版6 SZ001・005・006・008・009実測図	図版27 土器実測図(13)遺構
図版7 SF001・002実測図	図版28 土器実測図(14)遺構
図版8 SK004・121・197・199・205実測図	図版29 土器実測図(15)遺構・包含層
図版9 SK207・226・466・471実測図	図版30 土器実測図(16)包含層
図版10 SK239・251・261・307・319・325実測図	図版31 土器実測図(17)包含層
図版11 SK338・345・347・379・416・758実測図	図版32 土器実測図(18)包含層
図版12 SK443・456・807・827・1083実測図	図版33 土器実測図(19)包含層
図版13 SK1001・1017・SK1084実測図	図版34 石器実測図(1)石鏃
図版14 SX001・004実測図	図版35 石器実測図(2)石錐・スクレイパー
図版15 土器実測図(1)遺構	図版36 石器実測図(3)粗製刃器・楔形石器・RF・UF
図版16 土器実測図(2)遺構	図版37 石器実測図(4)安山岩製礫器
図版17 土器実測図(3)遺構	図版38 石器実測図(5)打製石斧
図版18 土器実測図(4)遺構	図版39 石器実測図(6)磨製石斧・切目石錐・打欠石錐
図版19 土器実測図(5)遺構	図版40 石器実測図(7)磨石類・砥石・石製品
図版20 土器実測図(6)遺構	図版41 石器実測図(8)石核・垂飾・石棒・石刺
図版21 土器実測図(7)遺構	図版42 石器実測図(9)石皿

写真図版目次

写真図版 1	調査区遠景・調査区全景				
写真図版 2	S8001・SH001・SF001・SF002・SZ003				
写真図版 3	SZ004・SZ002・SZ007・SZ001・SZ005・SZ006・SZ008				
写真図版 4	SZ009・SK004・SK199・SK121・SK205・SK197・SK226				
写真図版 5	SK251・SK261・SK307・SK319・SK325・SK345・SK379・SK416				
写真図版 6	SK443・SK456・SK471・A区第3検出面・SK001・SK004				
写真図版 7	遺構出土土器 (1)	写真図版 14	遺構出土土器 (8)	写真図版 21	石器 (1)
写真図版 8	遺構出土土器 (2)	写真図版 15	遺構出土土器 (9)	写真図版 22	石器 (2)
写真図版 9	遺構出土土器 (3)	写真図版 16	遺構出土土器 (10)	写真図版 23	石器 (3)
写真図版 10	遺構出土土器 (4)	写真図版 17	包含層出土土器 (1)	写真図版 24	石器 (4)
写真図版 11	遺構出土土器 (5)	写真図版 18	包含層出土土器 (2)	写真図版 25	石器 (5)
写真図版 12	遺構出土土器 (6)	写真図版 19	包含層出土土器 (3)	写真図版 26	石器 (6)
写真図版 13	遺構出土土器 (7)	写真図版 20	包含層出土土器 (4)		

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第11図	石鐮の分類	40
第2図	地区・グリッド設定図	2	第12図	石鐮欠損状態模式図	42
第3図	調査地周辺の遺跡地図	6	第13図	赤色顔料付着土器	53
第4図	調査区土層断面図	8	第14図	土器赤色顔料の蛍光X線スペクトル図	54
第5図	A区第1検出面遺構配置図	10	第15図	試料 No.3 の元素マッピング図	55
第6図	B区第1検出面遺構配置図	11	第16図	黒曜石の産地判別図	58
第7図	A区第2検出面遺構配置図	12	第17図	大型土坑配置図	60
第8図	B区第2検出面遺構配置図	13	第18図	地区別石材割合 (石鐮)	62
第9図	A区第3検出面遺構配置図	14	第19図	層別別剥片出土量	62
第10図	B区第3検出面遺構配置図	15	第20図	地区別石材割合 (剥片)	62

表目次

第1表	遺構検出数	9	第24表	UF 観察表	48
第2表	竪穴住居跡一覧表	25	第25表	安山岩製礫器観察表	48
第3表	竪穴住居内小土坑一覧表	25	第26表	打製石斧観察表	49
第4表	土器棺蓋・埋設土器一覧表	25	第27表	磨製石斧観察表	49
第5表	石組み遺構一覧表	25	第28表	切目石鐮観察表	49
第6表	不明遺構一覧表	25	第29表	打欠石鐮観察表	49
第7表	溝状遺構一覧表	25	第30表	磨石類観察表	49
第8表	土坑一覧表 (1)	26	第31表	磁石観察表	49
第9表	土坑一覧表 (2)	27	第32表	石製品観察表	49
第10表	土坑一覧表 (3)	28	第33表	石核観察表	49
第11表	土坑一覧表 (4)	29	第34表	垂飾観察表	49
第12表	土坑一覧表 (5)	30	第35表	石棒・石刺観察表	49
第13表	石鐮分類別集計表	40	第36表	石血観察表	49
第14表	土器観察表 (1)	44	第37表	放射性炭素年代測定及び 暦年代較正の結果	51
第15表	土器観察表 (2)	45	第38表	土器赤色顔料の蛍光X線分析結果	52
第16表	土器観察表 (3)	46	第39表	黒曜石製石器の元素強度 (cps) と 計算された指標値及び原産地推定結果	56
第17表	土器観察表 (4)	47	第40表	黒曜石原産地の判別群名称	57
第18表	石鐮観察表	48	第41表	分類別土坑出土遺物点数	61
第19表	石鐮観察表	48	第42表	器種別・石材別石器一覧表	61
第20表	スクレイパー観察表	48	第43表	分類別石鐮点数	62
第21表	粗製刃器観察表	48			
第22表	楔形石器観察表	48			
第23表	RF 観察表	48			

挿入写真目次

写真 1	調査前風景 (B区北東より)	3	写真 3	口唇部刺突 (252)	59
写真 2	遺物取上状況	3	写真 4	口唇部刺突 (253)	59

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

当遺跡は、恵那市串原（旧恵那郡串原村）字下大平に所在し、明智川に合流する大平川の右岸平地地及び支流の谷の扇状地上に位置する。

岐阜県基盤整備部恵那建設事務所では、県道下明智線道路改良を計画し、工事に先立って平成14年（2002）岐阜県教育委員会に工事計画等が示された。道路改良工事区域には、昭和62年（1987）に村営土地改良事業に伴う緊急発掘調査が行われ、周知の埋蔵文化財包蔵地として『改訂版岐阜県遺跡地図a』（岐阜県教育委員会1990）に登録されている大平遺跡の所在が確認された。

昭和62年の串原村教育委員会による発掘調査では多くの遺物が出土し、縄文時代の集落跡が広がると想定されたことから、遺跡の範囲を確定するため平成14年（2002）12月、岐阜県教育委員会により工事対象区域3,500㎡についての試掘確認調査が行われた。その結果を受けて、岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会で遺構が存在すると判断された1,500㎡について本発掘調査が必要であると判断され、本発掘調査は平成15年度に実施することになった。



第1図 遺跡位置図（国土地理院発行1：25,000地形図明智・川ヶ渡を使用）

第2節 発掘調査の経過と方法

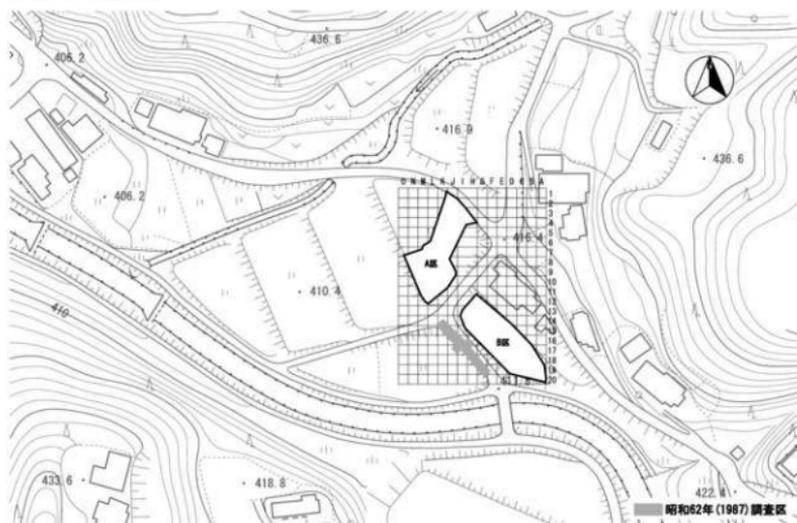
本調査の範囲は現道を境に、便宜上北西側をA区、南東側をB区とした。また、世界測地系座標を基準として4m×4mのグリッドを設定した。グリッドの名称は北東端を基準とし、北から南に向かって1-20、東から西に向かってA-Oとした。

発掘調査は平成15年5月6日より開始し平成15年12月11日まで行い、3面で遺構を検出した。

表土掘削は重機を用い、B区の掘削を終えた後、A区の掘削を行った。その後、縄文時代晩期以降の遺物包含層（以下「包含層」という。）で、多量に遺物を含むと想定されたⅢ層を人力で掘削し、Ⅳ層上面で遺構検出・掘削を行い、空中写真測量を行った。第1検出面の調査を終え、Ⅳ層を重機で掘削した後、Ⅴ層上面で第2検出面の遺構検出・掘削を行い、2回目の空中写真測量を行った。第3検出面の調査はⅤ層を重機で掘削し、一部に広がるⅥ層を人力で掘削した後、Ⅶ層上面で遺構検出・掘削を行った。第3検出面では全ての遺構について1/10若しくは1/20で手測りの実測をした後、地形測量を行った。第3検出面の遺構検出と並行して行ったトレンチ調査でⅦ層以下は遺物・遺構とも確認できなかったため、Ⅶ層上面の調査を終えた後、調査を終了した。

遺構の調査に関しては、空中写真測量によって調査区全体を1/50の縮尺で図化するとともに、全ての遺構について半割若しくは四分割し、土層を観察した上で写真撮影と実測を行い、完掘した。

遺物の取り上げは、包含層出土遺物についてはグリッド内を四分割し、その地点を記録し、遺構内出土遺物については検出面よりの深さを記録して取り上げた。また、竪穴住居跡や土坑内からまとめて出土した炭化材については、出土位置を記録した後、一部について自然科学分析（放射性炭素年代測定）を行った。



第2図 地区・グリッド設定図 (S=1/2,000)

<調査日誌抄>

- 5月6日 重機による表土掘削開始。
 5月19日 人力による包含層掘削（Ⅲ層）開始。
 5月22日 グリッド杭設置。
 6月10日 A区遺構検出作業（第1検出面）開始。
 6月19日 B区遺構検出作業（第1検出面）開始。
 7月25日 串原小学校教諭発掘体験。
 8月5日 関連指導調査員 愛知県埋蔵文化財センター
 石黒立人氏による現場指導。
 8月26日 第1回空中写真測量実施。
 9月1日 重機によるⅣ層掘削作業開始。
 9月2日 B区遺構検出作業（第2検出面）開始。
 9月8日 A区遺構検出作業（第2検出面）開始。
 10月23日 串原中学校1年生（10名）発掘体験。
 10月30日 第2回空中写真測量実施。
 11月2日 串原村文化展に出土遺物展示（3日まで）。
 11月4日 重機によるⅤ層掘削作業開始。
 11月6日 B区遺構検出作業（第3検出面）開始。
 11月11日 A区遺構検出作業（第3検出面）開始。
 12月11日 調査終了。



写真1 調査前風景（B区北東より）



写真2 遺物取上状況

整理作業は平成16年度に実施した。出土遺物と調査記録の整理作業を実施し、発掘調査報告書の編集を行った。出土遺物については、洗浄・取上番号注記・接合・復元・実測・写真撮影等を行い、調査記録については、現場で収集したデータや実測図の整合性の検討等を行った。

本発掘調査から整理作業に至る調査体制は、以下のとおりである。

	平成15年度（発掘調査）	平成16年度（整理・報告書作成）
理事長	日比 治男	日比 治男
副理事長	高橋 宏之	高橋 宏之
副理事長	平光 明彦	平光 明彦
常務理事兼センター所長	福田 安昭	福田 安昭
経営課長	川瀬 崇敏	川瀬 崇敏
調査部長	武藤 貞昭	川部 誠
担当調査課長	大熊 厚志	藤岡比呂志
担当調査員	古屋 寿彦	古屋 寿彦
整理作業従事者	長屋 和子 堀 三恵	村瀬 俊哉 藪下賀代子 山田 弘子

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

明智川とその支流大平川の合流点から約1.8km大平川沿いを上った平坦部に大平遺跡はある。当遺跡がある大平地区を境に大平川の河川勾配が異なり、大平地区の上流部に大平川、若しくは支流に伴う平坦地が存在するが、下流部には存在しない。その平坦地の中でも一番広いのが大平地区である。

大平遺跡は、東から西へ流れる大平川と北東から流れ込む支流の合流地点付近に位置する。そのため、その支流の扇状地、及び大平川に伴う平坦地上に遺跡が存在する。今回の調査地点A区、B区において、両方の堆積状況は異なる。それはA区が扇状地上にあり、B区が大平川に伴う平坦地上に存在するため、A区は主に扇状地性の堆積物が堆積し、B区は主に大平川に伴う堆積物が堆積している。

恵那市明智町、串原周辺は、基盤の岩石はほとんど花こう岩であるため、緩やかな山並みで、谷も険しくない。また、上流部が花こう岩ばかりでできているため、砂の供給は多く、また土石流堆積物も多く見られる。

大平川はかなり上流部まで護岸工事が行われており、人の手が加わっている。そのため、本来の大平川の礫種は分からないが、大平川によって供給される礫はほとんどが花こう岩で、黒色片岩、ドレライト、安山岩がわずかに見られる。

A区は前述したように扇状地上にあるため、堆積物は常に供給されており、厚くなる。調査地域に広がる堆積物（土層）の中で、扇状地性の堆積物として特徴的な層がIV層（縄文後期、遺物からすると後期の前半が中心）とV層（遺物からすると下部が縄文早期後半）の間に挟まっている。その挟まっている層は2層あり、下部が砂層であり、上部が花こう岩の角礫を多く含む礫層である。

砂層には、水の流れがあったことを示す堆積構造があった。また、一部には砂の粒子が下から上に徐々に大きくなるという逆級化構造が見られた。逆級化構造は、洪水による堆積の際に見られる特徴的なものである。下位にあるV層との境界は明確であり、短い時間でその砂層が堆積したことが分かる。

礫層の礫はすべて花こう岩の角礫で、最大50cm前後の径を持つ角礫も見られる。また礫を含む量も多く、観察する限り多いところは70～80%を占める。礫の大きさは大小様々である。礫層の厚さは15～40cmほどである。下位の砂層や砂層が見られない部分のV層との境界は明確であり、短い時間で堆積したことが分かる。

以上のことより、A区ではIV層とV層が堆積する間の時期にかなり多くの水量が扇状地上を流れ、その後上流からの土石流によって40cmほど埋められたことを示している。この現象はかなり短い時間の中で一気に起こったものと思われる。

B区はA区と比べ、それぞれの基本層位の堆積が薄い。Ⅶ、Ⅷ層（地山）の下に土石流堆積物と思われる大小の花こう岩と砂が混ざった堆積物が見られるが、礫の中には歪円礫もあり、A区の土石流堆積物とは異なる。そのため、B区は大平川に伴う堆積であると思われる。

第2節 歴史的環境

恵那市串原（旧恵那郡串原村）では、10遺跡が周知されている。そのうち7遺跡は矢作川河岸段丘上で通称「川通り」と呼ばれる地域に所在している。大平遺跡を含む3遺跡は高原上の平地や緩やかな傾斜地、通称「根（峯）側」に所在している。

「川通り」地区に所在する遺跡は関羅瀬・釜井・久木・大野・相走・大竹・福原遺跡で、そのうち釜井・久木・大野・相走の4遺跡については昭和46年（1971）矢作ダム建設により奥矢作湖に水没している。矢作ダム建設に関わって大野・相走遺跡が調査され（1968）大野遺跡では縄文時代中期を中心とした遺物、山茶碗などが出土した。また、相走遺跡においては少量ではあるが縄文時代、弥生時代の遺物や山茶碗などが出土した。両遺跡とも少量ではあるが、今回大平遺跡で多量に出土した縄文時代晩期末～弥生時代初頭の条痕文土器が出土している。関羅瀬遺跡については平成13年（2001）旧串原村教育委員会によって発掘調査が行われ、縄文時代中期前半を中心に、早期・前期の遺物が出土した。

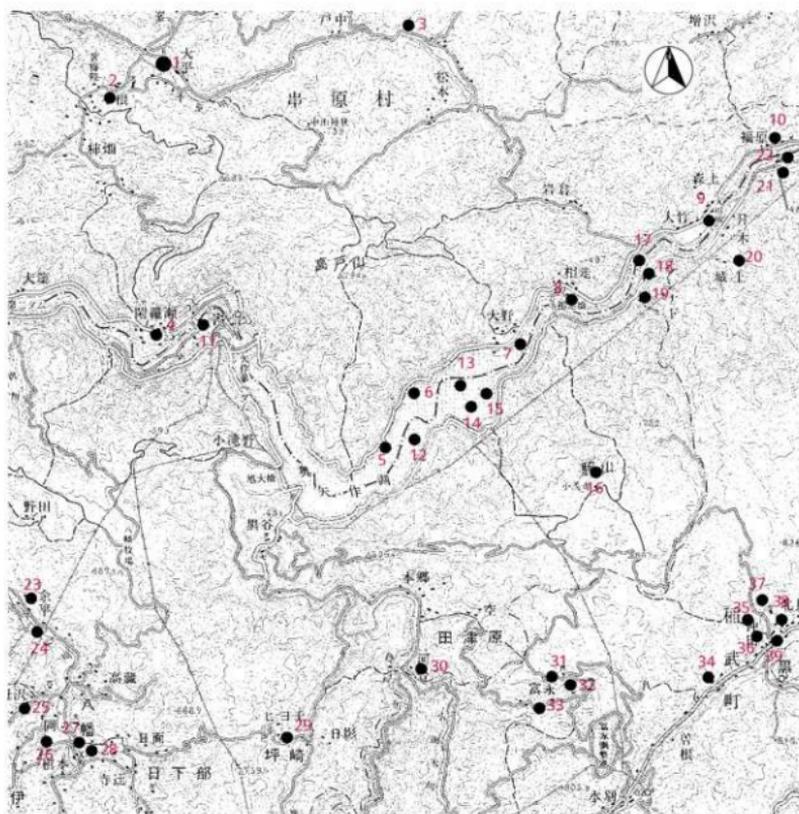
愛知県側で奥矢作湖に水没した遺跡は、前畑・万場垣内・久保田・大麦田遺跡の4遺跡である。いずれも縄文時代の遺跡である。

「根（峯）側」地区には大平遺跡・木根遺跡・かんでん場遺跡が所在する。昭和62年（1987）大平遺跡において圍場整備工事に伴う発掘調査が行われた。今回の調査区に隣接する場所で、地床炉と思われる石組みやピット群が検出されている。また、遺物では縄文時代晩期末～弥生時代初頭の条痕文土器が多量に出土したほか、縄文時代早期・中期・後期の遺物や中世陶器が出土している。

縄文時代早期・前期の遺物は「川通り」地区において出土・採集され、中期の遺物は広い範囲で出土・採集されている。後・晩期から弥生時代にかけての遺物は「川通り」地区では少ないが、「根（峯）側」の大平遺跡では出土の中心となっている。古墳時代に関しては古墳及び集落の痕跡は確認されていないが、少量の土師器片が「根側」地区で採集されている。今回の調査で住居跡が初めて確認された。古代以降についても該当する遺跡はないが、山茶碗などの陶器類は大野遺跡・相走遺跡及び前回の大平遺跡の調査でも出土している。

[引用・参考文献]

- 串原村教育委員会 1988 『大平遺跡』
串原村役場 1968 『串原村史』



第3図 調査地周辺の遺跡地図(国土地理院発行1:50,000地形図明智(昭和62年発行)を使用)

<岐阜県恵那市串原>

- 1 大平遺跡
- 2 木根遺跡
- 3 かんてん場遺跡
- 4 関藤瀬遺跡
- 5 釜井遺跡
- 6 久木遺跡
- 7 大野遺跡
- 8 相走遺跡
- 9 大竹遺跡
- 10 福原遺跡

<愛知県>

- 11 大切遺跡
- 12 前畑遺跡
- 13 万場垣内遺跡
- 14 久保田遺跡
- 15 大麦田遺跡
- 16 駒山古墓
- 17 ウル井遺跡
- 18 シシナド遺跡
- 19 シバクボ遺跡
- 20 シバクコ遺跡
- 21 シロヤマ遺跡

- 22 シタジロ遺跡
- 23 本郷遺跡
- 24 柿平遺跡(滅失)
- 25 市場遺跡(滅失)
- 26 尺治遺跡
- 27 番場垣内遺跡
- 28 落合遺跡
- 29 中屋古墓
- 30 河合遺跡
- 31 石神遺跡
- 32 貝内遺跡
- 33 所畑遺跡(滅失)

- 34 曾根遺跡
- 35 一色平遺跡
- 36 折坂遺跡(滅失)
- 37 北貝戸遺跡
- 38 仲根遺跡(滅失)
- 39 西畑遺跡

第3章 遺構

第1節 基本層序

大平遺跡は大平川とその支流が合流する地点に位置し、地区により堆積の状況が異なる。このため、遺構が構築された基盤となる土層に多少の違いが認められるが、基本的な土層堆積は類似している。A区は支流の谷筋の影響を受ける扇状地上に位置し、扇状地の厚い堆積が見られる。B区は大平川が形成した平坦地に位置し、縄文時代以降の堆積は薄い。さらにB区においては昭和62年の圃場整備により、調査区の三分の一以上が削平され、層序を確認するのが困難であった。

I層（黒色砂質）

表土層、調査前の地表を覆う表土で、圃場整備事業に伴う整地土・現代耕作土を一括する。

II層（灰褐色砂質 粘質）

圃場整備前の耕作土層であり、中世の遺物を多く包含することから中世に形成された層と判断した。

III層（黒褐色砂質）

縄文時代晩期末から古墳時代前期にかけての遺物を包含する層である。調査区全体に堆積していたと思われるが、現在はA区・B区とも南側半部にのみ残存する。厚いところでは30cm程度堆積している。風化した花こう岩が粒状となって多量に混入している。

IV層（暗褐色砂質）

縄文時代中期末から後期初頭にかけての遺物を包含する層である。A区では南側三分の二、B区では南側半分の範囲に残存している。風化した花こう岩が粒状となって混入している。

V層（にぶい黄褐色砂質）

下部で縄文時代早期末の遺物を包含する層である。大平川支流の谷から供給された扇状地性の堆積物が厚く堆積している。上部で花こう岩の角礫を多く含み、場所によっては水が流れていたことを示す砂層も見られる。主に土石流によって形成された層で、この期間に生活面があったとは考えにくい。

VI層（暗褐色砂質 粘質）

縄文時代早期末の遺物を包含する層である。A区の北側にのみ堆積する。堆積状況は非常に薄く、厚いところでも10cm程度である。

VII層（黒色砂質）

A区全体に堆積する無遺物層である。B区ではわずかに堆積するのみである。縄文時代以前に、大平川支流の谷から供給されたものだと思う。堆積は非常に厚く、1m近くまで堆積している場所もある。風化した花こう岩が粒状となって多量に混入している。

VIII層（暗褐色砂質）

縄文時代以前に堆積した無遺物層である。A区はこの層を確認して調査を終えた。

IX層（黒褐色砂質）

縄文時代以前に堆積した無遺物層である。B区でのみ確認した。壱円礫を含み、大平川の流れによって堆積したものだと思う。小段丘を形成している。

第2節 遺構の概要

今回の調査では遺構を3面で検出した。第1検出面はIV層上面（A区北側ではV層上面で第2検出面と同一）、第2検出面はV層上面、第3検出面はVII層（B区ではVIII層）上面で遺構を検出した。ただし、A・B区では堆積状況が異なることや削平を受けている箇所があるため、正確な層ごとに遺構を検出することができなかった。

また、それぞれの層でプランが明確に認識できず、下層で検出したものや、作業の工程上、検出面を1面しか設定できなかった箇所もあり、遺構を必ずしも層位的に捉えることはできなかった。B区についてはA区に比べ堆積も薄く、SZ007のように、V層上面で弥生時代初頭の土器棺墓を検出した。

各層ごとの遺構の概要は以下のとおりである。

- | | | |
|-------|--------------|---|
| 第1検出面 | IV層上面 | 古墳時代前期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡
弥生時代初頭の土器棺墓 |
| 第2検出面 | V層上面 | 縄文時代中期末～後期初頭の墓跡と思われる土坑
炉の可能性がある石組み遺構 |
| 第3検出面 | VII（VIII）層上面 | 縄文時代中期末の土坑 |

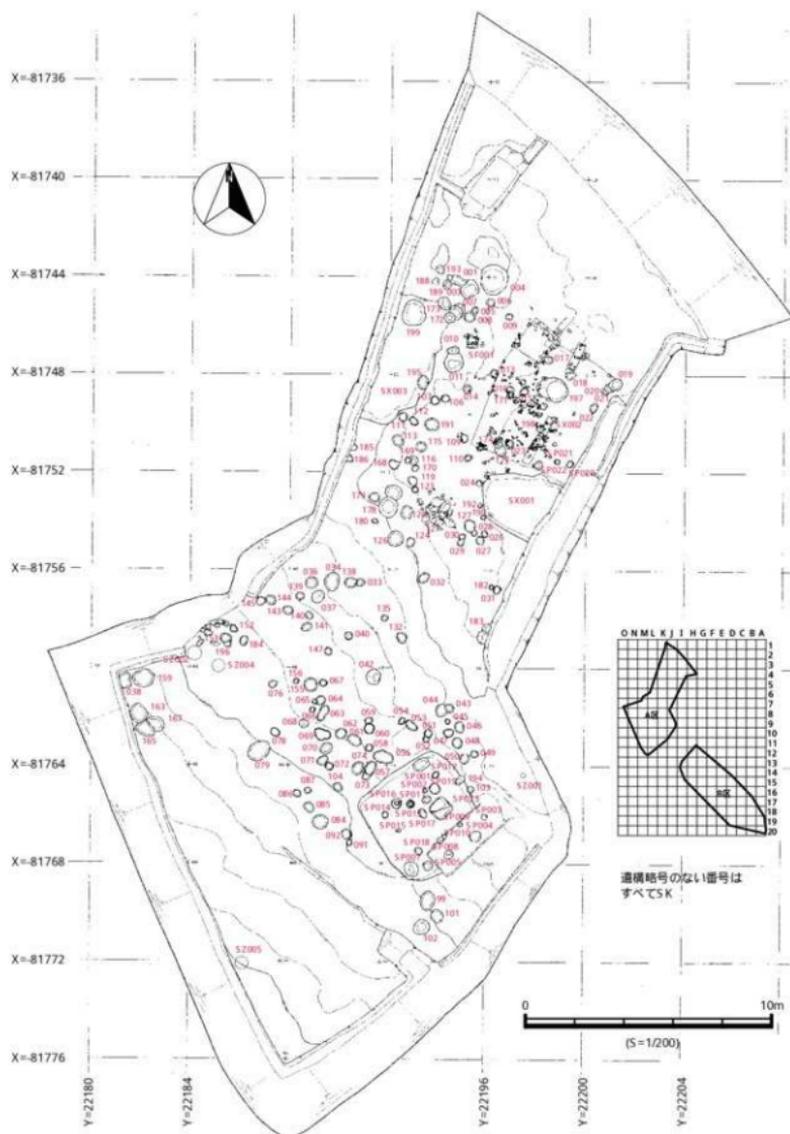
遺構番号は遺構検出時に略号を用い、通し番号を付した。なお、整理時には必要に応じて番号をつけ直した。また、第2～12表の一覧は、現場で欠番にした遺構については省略してある。

遺構略号

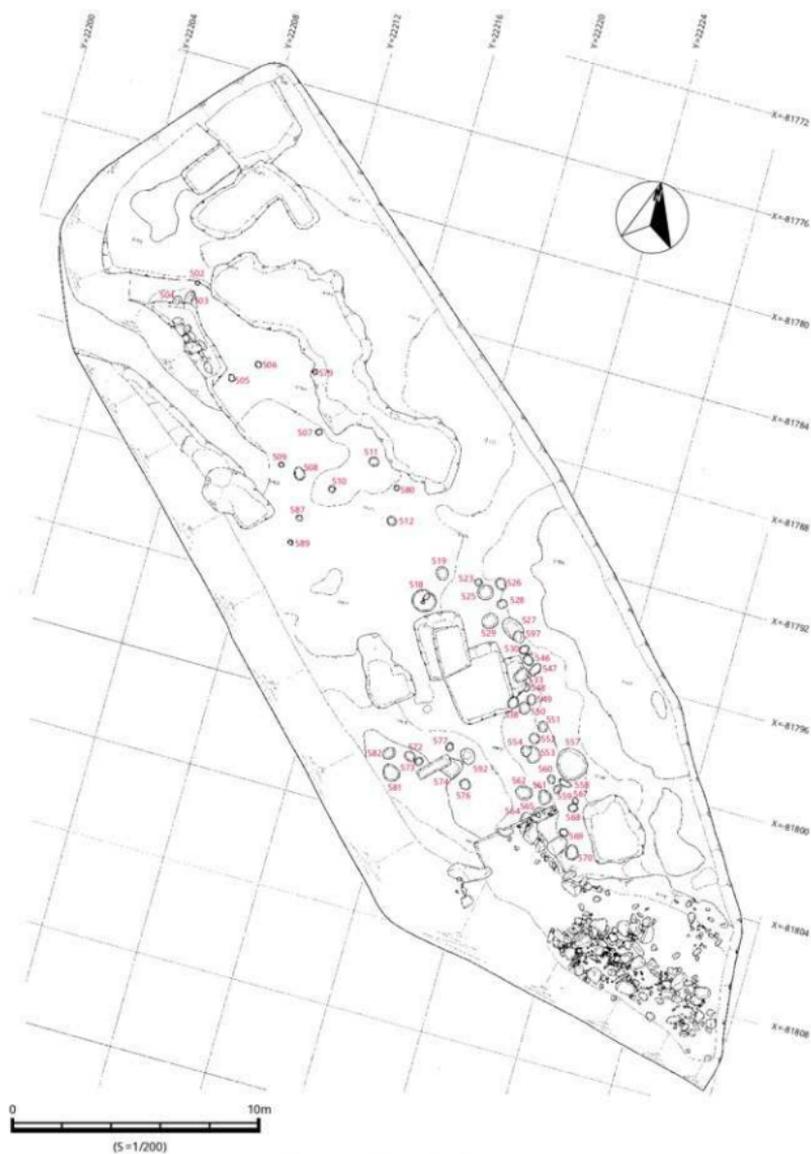
SB - 竪穴住居跡 SP - 竪穴住居跡内土坑（小穴） SH - 掘立柱建物跡 SZ - 埋設土器・土器棺墓
SF - 石組み遺構 SK - 土坑（穴：集石・配石含む） SX - 不明遺構 SD - 溝状遺構
地区ごと、検出面ごとの遺構検出数は第1表のとおりである。

第1表 遺構検出数

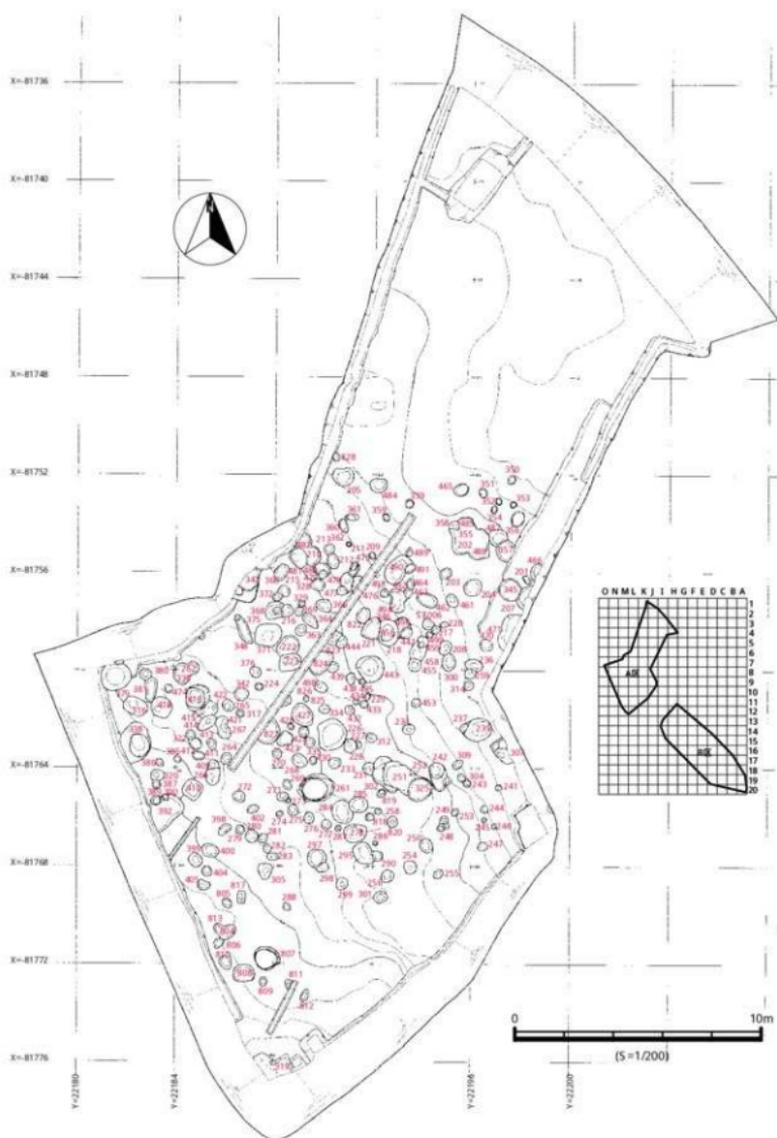
		SB	SP	SH	SZ	SF	SK	SX	SD	計
A 区	第1検出面	1	23	1	4	1	144	3	0	177
	第2検出面	0	0	0	1	0	230	0	0	231
	第3検出面	0	0	0	0	0	77	0	0	77
B 区	第1検出面	0	0	0	1	0	55	0	0	56
	第2検出面	0	0	0	3	1	157	0	1	162
	第3検出面	0	0	0	0	0	56	1	0	57
計		1	23	1	9	2	719	4	1	760



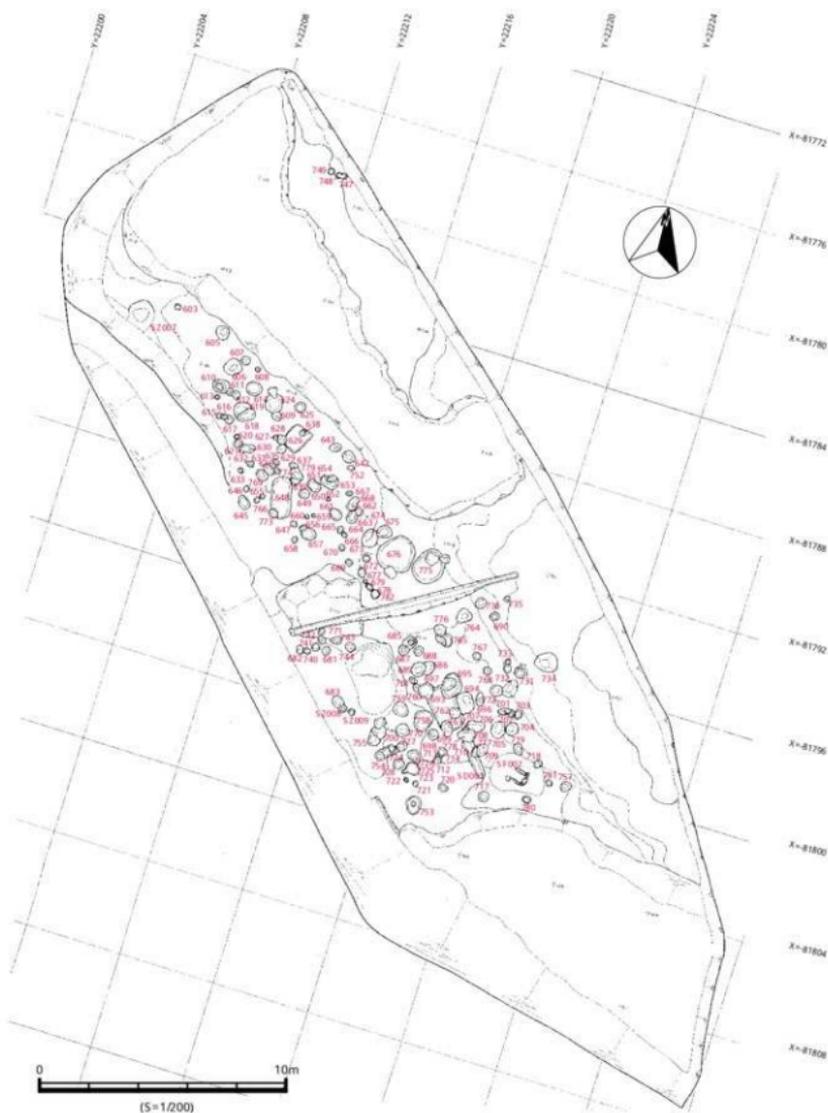
第5図 A区第1検出面遺構配置図



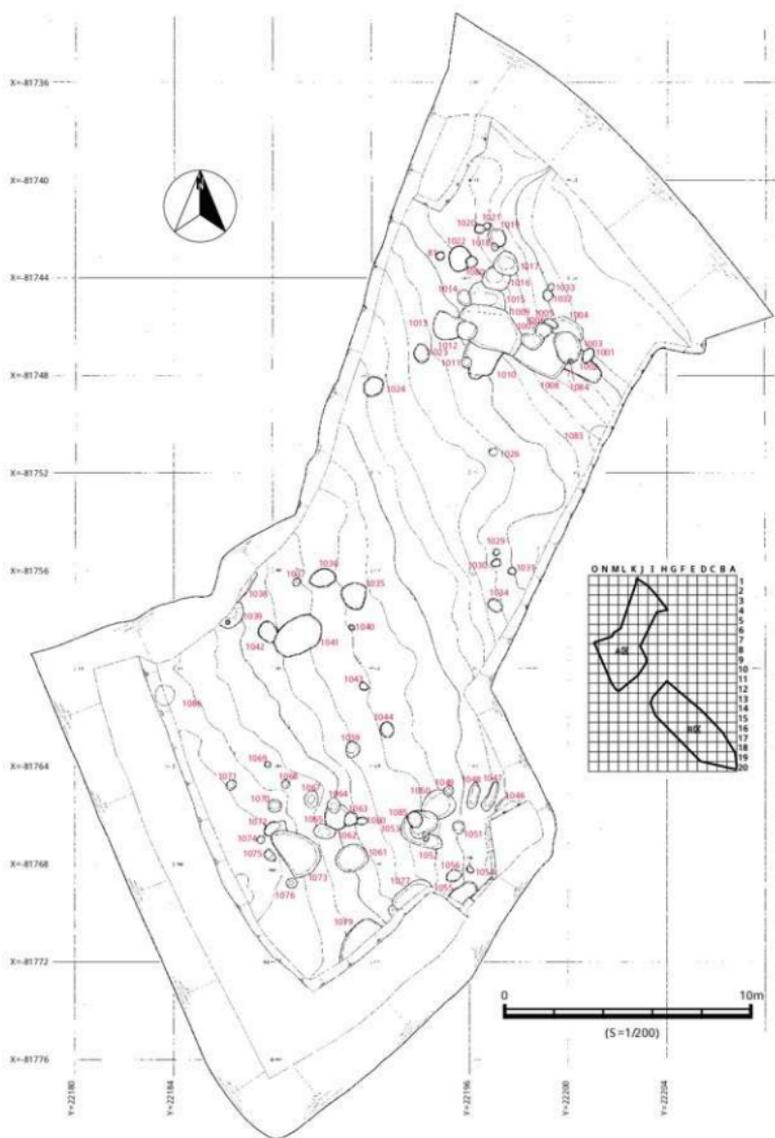
第6図 B区第1検出面遺構配置図



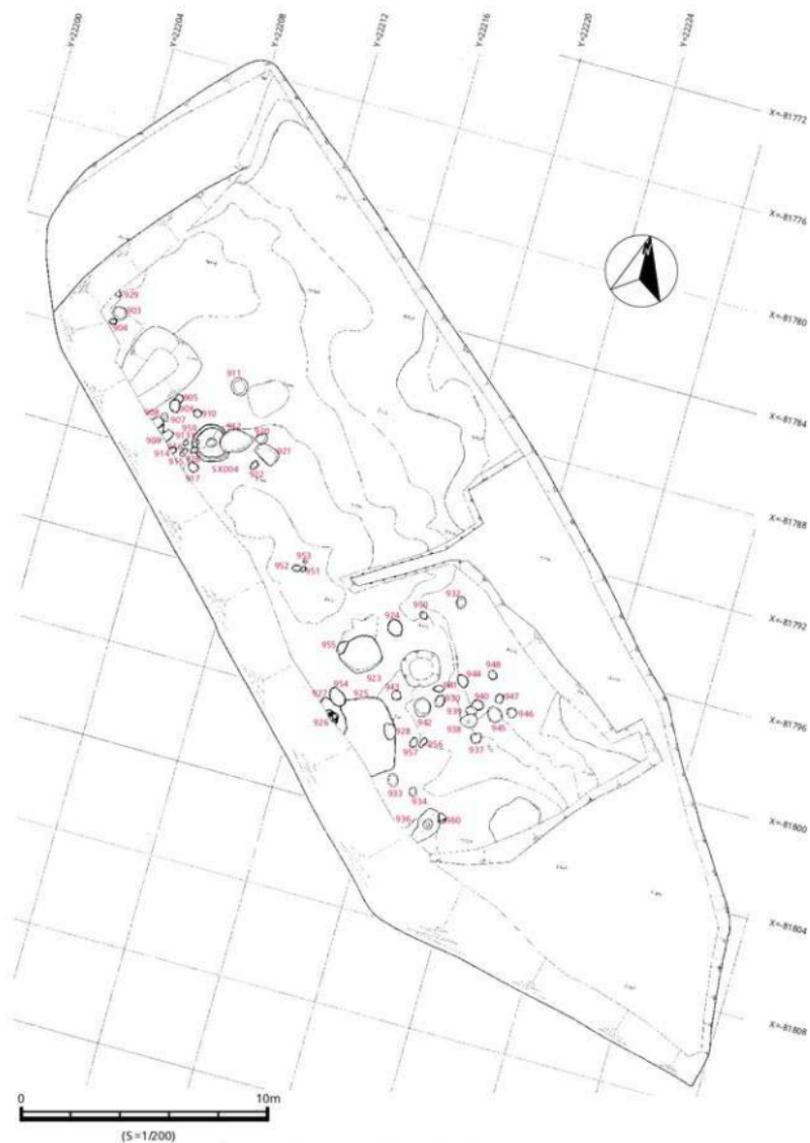
第7図 A区第2検出面遺構配置図



第8図 B区第2検出面遺構配置図



第9図 A区第3块出面遺構配置圖



第10図 B区第3検出面遺構配置図

第3節 主要遺構

検出した遺構のうち、特に遺跡の性格を示すものを抽出した。以下、遺構検出面・遺構の所属時期を示しながら種類別に述べる（溝状遺構については性格不明で特徴的な遺物の出土も無いため、省略）。なお、本文中に記載されている出土遺物点数は接合後の点数である。

1 竪穴住居跡（SB）

SB001（図版1～2）＜第1検出面 A区K-L8-10グリッド 検出層位-IV層上面＞

遺構の北東部は試掘トレンチに切られている。長軸4.52m、短軸4.32m、床面までの深さ0.16mを測り、平面形は隅丸方形である。壁面は緩く立ち上がり、床面は平坦である。遺構検出時より中央から南の部分で多くの炭化材が出土し、床面近くでもまとまって出土したことから、住居に関わる材であると認識した。炉や周溝・貯蔵穴など、住居内の施設は明確に確認できなかったが、北西隅で検出したSP001内からは台付甕のミニチュア（4）が出土した。位置的には貯蔵穴である可能性が考えられる。貼床や硬化部分などは検出できなかった。

この住居跡内で検出した遺構はSP001～SP0234で、そのうちSP012・SP014・SP018が位置的にも、形状や埋土からも柱穴である可能性が高いと判断した。遺構の西壁付近からは平底の土師器甕（5）が潰れた状態で出土した。残りがよく、炭化物が内外面に多く付着している。西壁ほぼ中央にあることから、カマドで使用されていたものの可能性が考えられる。この甕の時期（古墳時代前期）が住居の時期と考える。遺物は土師器が13点、土器類が413点、石器が85点出土した。縄文土器から土師器まで幅広く出土したが、土師器以外のものは小破片ばかりで、埋没の段階で入り込んだものと判断した。

2 掘立柱建物跡（SH）

SH001（図版3）＜第1検出面 A区K-M7-9 検出層位-IV層上面＞

SB001の西側に位置する1間×2間の側柱建物跡である。桁行4.1m、梁行3.6mで、桁間は約2mで揃っている。構成する柱穴の深さ、形態はほぼ同じで、SK037・040・042・068については柱痕跡が確認できた。この建物跡に関連性の高い遺構がSK054・072である。穴の深さ・断面形は他の柱穴と対応しないが、梁・桁間ともほぼ揃っている。屋根を支える柱穴とは考えにくい、縁側・入口等、何らかの床を支えるなどの役割を果たしていたのではないかと考える。出土遺物はSK037から7点、SK040から1点、SK042から16点、SK076から2点、SK184から2点、SK072から1点である。いずれも縄文土器の小破片で、埋没の際に入り込んだものと考えられる。SB001のすぐ西側に位置すること、主軸がSB001とほぼ同じことからSB001と関連がある、若しくは同時期の建物跡と考えられ、古墳時代前期と推定される。

3 土器棺墓（SZ）

土器棺墓は大平遺跡を特徴づける遺構の一つである。今回の調査で、A区で2基、B区で2基の合計4基を検出した。時期はすべて弥生時代初頭である。

SZ002 (図版4) <第1検出面 A区M-N7グリッド 検出層位-IV層上面>

排水溝掘削中に蓋の部分を検出したため、慎重に周りを掘り下げ、ほぼ完全な形で深鉢形の土器(6)が斜位に埋設されていることが判明した。棺身の口西方向から2個体の大きな破片を用いて蓋がしてあった。いずれも棺身に使用された土器と同じ時期、同じ器種のものであった(7・8)。(7)については棺身の上半分を取り除いた時点で出土したが、おそらく棺身が土圧で潰れた際に内部に入り込んだのであろう。墓坑の掘形は検出できなかった。基盤層と土器棺の周りの土及び棺身内の土との違いはほとんどなく、埋設された早い段階で墓坑を埋め、棺身にも入り込んだのではないかと推測する。棺身内から骨は出土しなかった。

SZ003 (図版4) <第1検出面 B区D17グリッド 検出層位-IV層上面>

棺身は深鉢形の土器(9)が完全な形で残存していた。棺身を立位で埋設した後、別の個体(10)で蓋をしている。検出時には分からなかったが、その後接合によって蓋に使用された土器もほぼ完全な形で復元できたことから、土器棺を埋設する段階で土器が割られ、蓋として使用されたことが推測できる。なお、(10)の底部が棺身の底部付近で出土したが、棺身を埋設する際に支えとして使用されたものであると考えられる。また、蓋は棺身の口縁部より数cm下で出土したが、これは土圧によって棺身の内部に落ち込んだものであると考えられる。棺身内の破片と棺身外の破片がいずれも接合していることから、蓋の埋設時には大きな破片を用いていたものとする。墓坑の掘形は明確で、棺身より一回り大きい穴がすり鉢状に掘られている。棺身内から骨は出土しなかった。

SZ004 (図版5) <第1検出面 A区M7-8グリッド 検出層位-IV層上面>

SZ002のすぐ東側に位置する。壺形土器と深鉢形土器3個体からなっている。3個体の大きな破片を被せ合わせた構成で、明確に棺身と棺蓋とは分けられない。全体の三分の一周が残存する壺形土器の胴部(13)を底の部分としておき、深鉢形土器の破片(12)をその上から被せている。さらにその上から約三分の一周が残存する深鉢形土器の破片(11)が被せられている。(12)と(13)をもって棺身とし、(11)を棺蓋と捉えることも可能であろう。墓坑の掘形は緩いすり鉢状形と認識したが、棺身に対しかなり大きめのプランで棺身の底が浮いている状態になるため、土器棺墓の掘形としてはやや不自然さを否めない。棺身内からは骨は出土しなかった。

SZ007 (図版5) <第2検出面 B区H14グリッド 検出層位-V層上面>

遺構の上面は攪乱による影響で土器自体も欠損していたが、口縁部から底部まで残存している箇所があった。土器は立位で設置されていた。すり鉢状に掘り込まれた穴に土器を埋設したものだと思われる。立位で埋設された土器にどのような状態で蓋をされていたのかは不明であるが、SZ003同様、別個体を割って蓋にしたものだと思われる。なお、棺身内からは骨は出土しなかった。

4 埋設土器(SZ)

縄文時代の埋設土器は5基検出した。

SZ001 (図版6) <第1検出面 A区J9グリッド 検出層位-IV層上面>

土器は深鉢と思われる。底部付近が残っているにすぎないが、割れ口を打ち欠いている様子が見られるので、底部のみを埋設した可能性もある。土器の周りを精査して掘形を確認したところ、基盤層に比べ花こう岩粒子の混入の少ない範囲が見られたが、土器の下まで掘り込んでいるようには見られ

なかった。埋設された土器(16)は縄文時代中期末と思われる。

SZ005 (図版6) <第1検出面 A区M10-11グリッド 検出層位-IV層上面>

底部・口縁部が意図的に打ち欠かれた様子で、胴部のみ出土した。胴部の残存は高さ約15cmで、ほぼ一周している。平面でのプランは検出できなかった。住居に伴う埋蔵ではなく、単独で埋設された可能性が高い。なお、土器の周辺にこぶし大の花こう岩角礫が出土したが、遺構に伴うものかは判断できなかった。埋設された土器(18)は縄文時代中期後葉と思われる。

SZ006 (図版6) <第2検出面 A区K7グリッド 検出層位-V層上面>

東側でSK217を切っている。土器は底部のみの残存で、詳細は分からないが深鉢と推測する。SZ001と同じく意図的に底部のみを埋設したのかも知れない。掘形は平面形がほぼ円形、断面形は底面が平らである。掘形よりかなり浮いた状態で土器が埋設されている。土器内の埋土と掘形の埋土との違いは認められなかった。土器内には焼土や骨は混入していなかった。土器の上面には住居らしき痕跡は見られなかったため、単独で埋設されたものであると思われる。埋設された土器(15)は縄文時代中期末と思われる。

SZ008 (図版6) <第2検出面 B区E17グリッド 検出層位-V層上面>

西側でSK683に切られる。土器は、すり鉢状に掘りくぼめられた穴に立位で埋設され、土器の下部は基盤層まで到達していた。土器の口縁部及び底部は欠損しているが、底部については意図的に打ち欠かれたものと思われる。土器は器形から深鉢と思われる。土器内に焼土や骨は混入していなかった。遺構の上面や周辺には住居らしき痕跡が見られなかったため、単独で埋設されたものであると思われる。埋設された土器(19)は縄文時代中期末と思われる。

SZ009 (図版6) <第2検出面 B区E17グリッド 検出層位-V層上面>

SZ008のすぐ東側に位置する。SZ001・SZ006と同じく底部のみ残存している。底面が平らな掘り込み正位で埋設されたものと思われる。土器内の埋土に焼土や骨は混入していなかった。遺構の上面や周辺には住居らしき痕跡が見られなかったため、単独で埋設されたものであると思われる。埋設された土器(17)は縄文時代中期末と思われる。

5 石組み遺構(SF)

今回の調査では意図的に石を配置したと考えられる遺構を2基確認した。いずれも竪穴住居跡に伴うものではなく、周囲に明確な柱穴を検出することもできなかったため、炉として機能していたのかは判断ができなかった。

SF001 (図版7) <第1検出面 A区K4グリッド 検出層位-IV層上面>

SX002とSX003の中間に位置する。長軸約0.5m、短軸約0.4mで、主軸をほぼ北に持つ。表土を除去した時点で石組みを検出した。屋外炉、もしくは配石遺構と考えられる。石組みは50cm前後の花こう岩角礫を使用し、ほぼ正方形に配置してある。西側に置かれた石の内側に被熱した様子が窺えたが、その他の石には被熱した様子は見られなかった。また、石組み内の埋土にも焼土等、火を使用した痕跡は明確には見られなかった。石組みを断ち割り、断面を観察したところ、石の外側に裏込めをした様子が見られた。また、石組みの底面近くではこぶし大の花こう岩角礫が多量に広がっていたが、この遺構に伴うものではなく、基盤層の一部であると判断した。検出はIV層上面であるが、石組

みの上面にIV層が層的に堆積している様子が窺えた。IV層がこの遺構が廃絶した後に堆積したものであると考えられ、この遺構の基盤となる層はV層であると言える。

SF001の周辺は黒褐色土が円形に広がり、石組みの南側では硬化した部分が確認できた。黒褐色土はIV層の一部である可能性が高いが、硬化部分があること、周辺で検出した柱穴らしき遺構から、竪穴住居に伴う炉跡である可能性も考えられる。石組み内、石組み周辺から縄文土器7点、石器では黒曜石のフレイクが3点出土したのみで、遺構の時期を判断するには至らなかった。

SF002 (図版7) <第2検出面 B区C17-18グリッド 検出層位 - V層上面>

長軸約0.7m、短軸約0.6m、主軸を北西に持つ。すべて花こう岩の角礫で構成される。石組みの内側は0.3m程度掘り込まれ、その周りを方形に囲む形で礫が置かれている。置かれた礫に被熱した様子は見られない。内部の埋土中に少量の焼土が見られたが、長い間継続して火が使用されていたとは考えにくい。石組み内の埋土からは遺物は出土していない。掘り込み底面には花こう岩の垂角礫が置かれていたが、同じく熱は受けていない。石組み周辺には、しまりのよいにぶい黄褐色のやや粘性をもつ砂質土が広がっている。住居の貼り床に相当するものなのかも知れない。石組み周辺のSK719・718・780が柱穴として成り立つのかも知れないが、石組みの南側は後世の擾乱により遺構の検出ができなかったため、明確に住居の柱穴とは言えない。縄文土器が2点出土したが、遺構の時期を判断するには至らなかった。

6 土坑 (SK)

今回の調査で検出した土坑はA・B区、3面の検出面すべてで719基である。そのうちの大多数は性格が不明のものであった。ここでは主に第2検出面で検出した縄文時代中期末～後期初頭の土坑で、掘形が1mを超える大きなもの、遺物が多く出土したもの、礫の混入(意図的であるかどうかは問わず)の多いもの、断面形に特徴のあるものについて述べることにする。また、A区第3検出面で検出した縄文時代早期末の土坑についても述べる。

SK004 (図版8) <第1検出面 A区J-K4グリッド 検出層位 - V層上面>

底面はほぼ水平で緩やかな逆台形である。土坑の東側にこぶし大～人頭大の礫を多く検出した。遺構上面で径約60cmの礫を検出したが土坑のプラン内に収まるものではなく、この遺構との関連性は不明である。縄文土器が32点、石器が2点出土した。土器は縄文時代後期を中心とする。

SK121 (図版8) <第1検出面 A区K6グリッド 検出層位 - IV層上面>

断面形は緩やかなすり鉢状である。III層掘削中に人頭大以上の垂円礫が集中している部分を検出した。礫は放射状に広がっているように見え、それぞれが内側を向いて置かれている。北側に置かれた礫のみ内面に被熱した様子が見られた。礫周辺を精査し、掘形を検出した。遺構を断ち割って断面を観察したところ、穴は深いものではなく、すり鉢状の断面形であることが確認できた。礫は掘形の範囲内に収まるものではなく、掘形の外側に向かって広がっていることから、掘形の上部若しくは上面に立っていたのではないかと考えられる。また、南東部に置かれている礫は、他の礫に比べ掘形からはみ出し方が大きいため、墓標など、何かの目印になるような形で立てて設置されていたものが倒れたのではないかと考えられる。この礫を取り除くと粗製の無文土器(35)が出土した。遺構上面の礫を取り除き、下部遺構を掘削すると、径5cm大の小礫がまとまって出土した。同じような礫は遺構の

周りにはなく、掘り込み内に集中しているため、遺構に伴うものではないかと考えられる。また、この小礫付近で結晶片岩製の石錘（391）が出土した。その他縄文土器が20点、石器が3点出土した。

SK197（図版8）＜第1検出面 A区J5グリッド 検出層位-V層上面＞

断面形は底面がほぼ水平で、壁は垂直に立ち上がる。遺構上面では非常にしまりのよい黒色土に炭化物を含み、遺物の小片が散らばっていた。半割したところ、遺構の中央部にこぶし大～人頭大の花こう岩が集中して出土した。礫を平面で検出すると、遺構の東側に径40～50cmの空間を持つように礫が取り囲んでいた。縄文土器が176点、石器が41点出土した。遺構上部で縄文のみの粗製土器（46）礫を多く含む層の直下で水銀朱による赤彩が施された中津式の双耳壺（41）が出土した。また、黒曜石製石鏃（303）、チャート製の石鏃未製品（304）も出土した。

SK199（図版8）＜第1検出面 A区K4グリッド 検出層位-V層上面＞

断面形は底面がほぼ水平で壁は垂直に立ち上がる。SK003を掘削中に検出した。遺構上面においては礫とともに縄文時代後期初頭の深鉢（25）が破片でまとまって出土した。礫は上面から底面までほぼ全体に混入しており、意図的に配置されている様子は見られなかった。縄文土器が18点、石器3点出土した。

SK205（図版8）＜第2検出面 A区K5-6グリッド 検出層位-V層上面＞

径約2mの範囲内に、こぶし大から人頭大の花こう岩礫が円形に集中しているところを検出した。V層直上の礫を多量に含む層で検出したため土流堆積物との区別が困難であったが、礫の混入が密であることと、礫の集中している範囲の中央部に掘形があることから、礫は遺構に関連するものであると判断した。中央部の穴の断面形は底面がほぼ水平で、壁面は垂直に立ち上がる。穴の中からは垂円礫が中心部にまとまって出土した。中には被熱しているものもあった。縄文土器が74点、石器が8点出土した。土器では緑帯文期の鉢（26・27）など、縄文時代後期前葉～中葉にかけての遺物が出土した。また、骨らしき細片が出土した。

SK207（図版9）＜第2検出面 A区J7グリッド 検出層位-V層上面＞

SK345を切り、SK466・471に切られている。断面形は底面がほぼ水平で逆台形である。壁が崩落したため断面図には表れていないが、底面より少し浮いた状態で径12～15cm大の垂円礫が出土した。縄文土器が76点、石器が2点出土した。縄文中期末から後期初頭の土器が中心である。なお、遺構西壁際で骨らしき細片が出土した。

SK226（図版9）＜第2検出面 A区L8グリッド 検出層位-V層上面＞

断面形は底面がほぼ水平で、壁は垂直に立ち上がる。断面中層にこぶし大～人頭大以上の角礫が集中している。堆積は下層でほぼ水平に、上層ではすり鉢状になっている。縄文土器が212点、石器が47点出土した。縄文後期初頭中津式にあたる深鉢（58・59・65）は検出面から底面にかけて小破片の状態出土したことから、破片の状態一度に投げ込まれたものであることが推測される。

SK239（図版10）＜第2検出面 A区J8グリッド 検出層位-V層上面＞

北東でSK237を切っている。断面形は底面がほぼ水平で、壁はすり鉢状に立ち上がる。土器が114点、石器が9点出土した。

SK251（図版10）＜第2検出面 A区K8-9グリッド 検出層位-V層上面＞

東側でSK252、325に切られている。断面形は底面がほぼ水平で、壁は垂直に立ち上がるが、南北

でやや挟れてフラスコ状になっている。検出面近くで礫が集中し、礫を取り除くと遺物が集中して出土した。縄文土器が130点、石器が13点出土した。土器はIV群1類に所属するものが多数を占めている。また、骨らしき細片や炭化物が出土した。

SK261 (図版10) <第2検出面 A区L9グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形はフラスコ状で、底面はほぼ水平である。検出面直下で長径50cm以上の角礫が斜めに入り込んでいた。この大礫のすぐ下でまとまって遺物が出土した。縄文土器が208点、石器が33点出土した。石器では、縄文時代後期によく見られる鋸歯縁状の石鏃(312)が出土した。

SK307 (図版10) <第2検出面 A区J8グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面が2段になり、浅い方では平らな花こう岩の垂円礫が水平に置かれたような状態で出土した。縄文土器が11点出土した。

SK319 (図版10) <第2検出面 A区L - M11-12グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面がほぼ水平で壁はすり鉢状に立ち上がる。遺構の埋土中位でこぶし大の礫と遺物が集中して出土した。縄文土器が28点、石器が6点出土した。石器では今回の調査で唯一の水晶製の石鏃(314)が出土した。

SK325 (図版10) <第2検出面 A区K9グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面がほぼ水平で、壁は垂直に立ち上がる。遺構の検出面及び埋土中位でこぶし大~人頭大の礫が出土した。検出面に見えていた礫は遺構に向かって内側が被熱していた。遺構の埋土中位では炭化物と焼土が層状に入り込み、その下からは礫や焼土などの混入物はなかった。縄文土器が43点、石器が5点出土した。

SK338 (図版11) <第2検出面 A区N8グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面が2段になり、底面はほぼ水平で壁は緩やかに立ち上がる。段が変わるところで堆積が異なるが、埋土全体にこぶし大~人頭大の花こう岩角礫が多量に混入している。縄文土器が12点、石器が2点出土した。

SK345 (図版11) <第2検出面 A区J7グリッド 検出層位 - V層上面>

東側でSK207に切られている。断面形は底面がほぼ水平で、壁は垂直に立ち上がる。検出面で人頭大の礫と焼土を確認した。遺構上部では焼土が層状に入り込んでいることが確認できた。縄文土器が2点出土した。

SK347 (図版11) <第2検出面 A区M7グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面がほぼ水平で、壁は緩やかに立ち上がる。遺構の上部に焼土が集中し、内部には入り込んでいないようであった。縄文土器が19点、石器が3点、骨らしき細片が1点出土した。石器では磨製石斧(387)が出土した。

SK379 (図版11) <第2検出面 A区N7-8グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面がほぼ水平で、壁は緩やかに立ち上がる。遺構の埋土中位から底面にかけて人頭大の礫が出土した。縄文土器が11点、石器が2点出土した。土器では搬入品と思われる中期後葉の土器(96)が出土した。

SK416 (図版11) <第2検出面 A区M8グリッド 検出層位 - V層上面>

南側をSK422に切られている。断面形は底面がほぼ水平で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構の

底面近くで長径50cm近くの礫が出土した。遺構の埋土中位では焼土が少量に混入した層があり、焼土の層を挟んで上層と下層では土質が明確に分かれている。縄文土器が47点、石器が18点出土した。また、骨らしき細片が出土した。

SK443 (図版12) <第2検出面 A区K-L7-8グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面がほぼ水平で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面より底面まで全体的に礫、遺物が多量に出土した。土層は大きく3層に分かれ、それぞれの層で礫が集中し、その下から遺物が出土した。縄文土器が386点、石器が18点、骨らしき細片が2点出土した。土器は中期末から後期初頭にかけて多量に出土した。石器では底面近くで径50cm以上の石皿(415)が出土した。

SK456 (図版12) <第2検出面 A区K7グリッド 検出層位 - V層上面>

SK218・346・442・496を切っている。断面形は底面がほぼ水平で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面近くで径50cm近くの礫を検出した。底面近くの層では焼土の混入が見られた。縄文土器が81点、石器が3点出土した。

SK466 (図版9) <第2検出面 A区J6-7グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面がほぼ水平で壁はすり鉢状に立ち上がる。遺構の埋土中位で人頭大の礫を含み、底面近くでは遺物が集中して出土した。縄文土器が83点、石器が5点出土した。石器では泥岩製の打製石斧(376)が出土した。

SK471 (図版9) <第2検出面 A区J7グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面がほぼ水平であるが、南側に向けてやや傾斜し、壁はすり鉢状に立ち上がる。遺構上部で人頭大の礫が混入している。縄文土器が27点、石器が2点出土した。

SK758 (図版11) <第2検出面 B区D17グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面が北側と南側で掘り込みが異なり、2段になっている。検出面より0.2m程度の深さで人頭大の花こう岩の角礫が面を揃えて置かれている。縄文土器が2点出土した。

SK807 (図版12) <第2検出面 A区L-M10-11グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は底面がほぼ水平で、壁は東側で抉れ、フラスコ状となっている。遺構上層でこぶし大の礫が少量混入し、遺構の埋土中位では炭化材がまとまって出土した。炭化材は遺構の埋土中位の壁際で特にまとまって出土し、それ以外の深さでは出土していない。縄文土器が26点、石器が4点出土した。

SK827 (図版12) <第2検出面 A区L-M8グリッド 検出層位 - V層上面>

断面形は緩やかなすり鉢状である。縄文土器が6点、石器が5点出土した。今回の調査で唯一の出土となるヒスイ製の垂飾(411)が遺構の埋土中位から出土した。

SK1083 (図版12) <第2検出面 A区I4グリッド 検出層位 - V層上面>

壁面のみを検出のため、遺構の掘形は不明である。断面形は底面がほぼ水平で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構の埋土中位では炭化物の混入が多い。遺物の出土はなかった。

SK1001 (図版13) <第3検出面 A区I4グリッド 検出層位 - VII層上面>

SK1002を切っている。断面形は緩やかなすり鉢状である。遺物の出土はなかった。

SK1002 (図版13) <第3検出面 A区I-J4グリッド 検出層位 - VII層上面>

SK1001・1003・1008に切られている。断面形は底部が垂直で緩やかな逆台形である。縄文土器が2点出土した。

SK1003 (図版13) <第3検出面 A区I-J4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1002・1004・1008を切っている。また、完掘後、底面よりSK1084を検出した。検出面から底面までが非常に浅いため正確には言えないが、断面形は底面がほぼ水平で緩やかな逆台形になると思われる。縄文土器が13点、石器(剥片)が3点出土した。

SK1004 (図版13) <第3検出面 A区I-J4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1003・1005に切られている。断面形は底面がほぼ水平で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。縄文土器が1点出土した。

SK1005 (図版13) <第3検出面 A区J4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1004を切り、SK1006に切られている。断面形は緩やかなすり鉢状である。遺物の出土はなかった。

SK1006 (図版13) <第3検出面 A区J4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1005・1008を切り、SK1007に切られている。断面形は緩やかなすり鉢状である。遺物の出土はなかった。

SK1007 (図版13) <第3検出面 A区J4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1006・1008・1009を切っている。断面形は底面がほぼ水平で、緩やかな逆台形である。縄文土器が1点出土した。

SK1008 (図版13) <第3検出面 A区J4-5グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1002・1004を切り、SK1003・1006・1007・1009に切られている。断面形は不明である。石器(剥片)が1点出土した。

SK1009 (図版13) <第3検出面 A区J-K4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1008・1010・1015を切り、SK1007・1012・1014に切られている。断面形は底面がほぼ水平で、緩やかな逆台形である。縄文土器が11点、石器(剥片)が2点出土した。この土坑からは早期末に特定できる土器(117・118)が出土した。

SK1010 (図版13) <第3検出面 A区J-K4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1009・1011に切られている。断面形は底面がほぼ水平で逆台形である。縄文土器が5点出土した。この土坑からは今回出土した遺物の中で最も古い時期に当たる早期中葉の土器(112)が出土した。

SK1011 (図版13) <第3検出面 A区K4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1010を切っている。断面形は緩やかな逆台形である。縄文土器が1点、石器(剥片)が1点出土した。

SK1012 (図版13) <第3検出面 A区K4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1009・1013を切っている。断面形は底面がほぼ水平で、逆台形である。縄文土器が6点出土した。

SK1013 (図版13) <第3検出面 A区K4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1009を切り、SK1012に切られている。断面形は検出面から底面までが非常に浅いため不明である。縄文土器が5点、石器(剥片)が1点出土した。

SK1014 (図版13) <第3検出面 A区K4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1015を切っている。断面形は不明である。縄文土器が2点、石器(剥片)が1点出土した。

SK1015 (図版13) <第3検出面 A区J-K4グリッド 検出層位-VII層上面>

SK1009を切り、SK1014・1016に切られている。断面形は緩やかなすり鉢状である。縄文土器が10

点、石器（剥片）が5点出土した。

SK1016（図版13）＜第3検出面 A区J3-4グリッド 検出層位-VII層上面＞

SK1015を切り、SK1017に切られている。断面形は緩やかなすり鉢状である。縄文土器が7点、石器（剥片）が1点出土した。

SK1017（図版13）＜第3検出面 A区J3グリッド 検出層位-VII層上面＞

SK1016を切っている。断面形は緩やかなすり鉢状である。石器（剥片）が1点出土した。

SK1084（図版13）＜第3検出面 A区I4グリッド 検出層位-VII層上面＞

SK1003の底面が検出した。断面形は底面がすり鉢状で壁はほぼ垂直に立ち上がる。縄文土器が1点出土した。

7 不明遺構（SX）

平面形の長軸が2mを超えるもので住居の可能性の低いもの、平面形に特徴のあるものを不明遺構とした。A区で3基、B区で1基検出した。

いずれも時期は検出層位、出土遺物等から縄文時代中期末～後期初頭に属するものと思われる。

SX001（図版14）＜第1検出面 A区J-K6グリッド 検出層位-IV層上面＞

東側を排水溝に切られているため掘形は不明であるが、短軸2.56m、深さ0.24mを測り、平面形は不定形である。断面形は底面がほぼ水平で緩やかな逆台形である。埋土にはこぶし大の花こう岩角礫が多量に混じるが面を崩えるなど意図性は感じられず、自然に堆積したものと考えられる。縄文土器が2点、石器が2点出土した。蛇紋岩製の磨製石斧（385）が検出面近くで出土した。

SX002（図版14）＜第1検出面 A区I-K4-6グリッド 検出層位-V層上面＞

SX001の北側に位置する。断面形は検出面から底面まで非常に浅いため不明である。表土を除去した段階で固くしまった褐色の砂とこぶし大～人頭大の角礫が広がる方形のプランを検出した。遺構の北西隅には人頭大の角礫が集中している部分があったので、断ち割って断面を確認したが、基盤層中に入り込んでいる礫もあり、位置的な配置は見られなかった。遺構の上面は大きく削平を受けているため、詳しく掘り込みを観察することができなかったが、にぶい黄褐色砂質の基盤層（V層）に対し、非常にしまりのよい、角礫を多く含んだ砂が入り込んでいる様子が観察できた。なんらかのくぼみに対して、谷からの土石流が堆積したものであると判断した。縄文土器が32点、石器が12点出土した。石器では安山岩製礫器（367）が出土した。

SX003（図版14）＜第1検出面 A区K-L4-5グリッド 検出層位-V層上面＞

SX002の西側に位置する。表土を掘削した時点で花こう岩の角礫（こぶし大～人頭大）が多量に入り込んだプランを検出した。遺構北側はV層がすでに露呈していたが、南側ではIV層中に礫が混じる形で検出した。おそらく掘り込みに土石流が入り込み、その上にIV層が堆積したものであると考えられる。縄文土器が92点、石器が11点出土した。縄文時代後期前葉～中葉にかけての緑帯文期の破片（120・121）が出土した。

SX004（図版14）＜第3検出面 B区G15-16グリッド 検出層位-VII層上面＞

SK919を中心に直径約3mの範囲に溝状の掘り込みが巡っている。SK918・959を切り、SK912に切られている。円形に巡っている溝の深さは0.08mで、断面形はすり鉢状である。遺物の出土はなかった。

第2表 竪穴住居跡一覧表

地区	検出グリッド	遺構名	切る >	切られる <	検出面	検出層位	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類) 石(石器類)
A	K-L 8-10	SB001	SK194 SK103		1	IV	452	432	16	土426(Ⅲ群5:Ⅳ群7:Ⅴ群36:土師器13)石85

第3表 竪穴住居内小土坑一覧表

地区	検出グリッド	遺構名	切る >	切られる <	検出面	検出層位	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類) 石(石器類)
A	K8	SP001			1	IV	69	45	15	SB001内 土5(Ⅴ群1:土師器1)石1
A	K8	SP002			1	IV	22	7	8	SB001内 土3石1
A	J9	SP003			1	IV	26	22	12	SB001内 土1(Ⅴ群1)
A	K9	SP004			1	IV	50	43	7	SB001内 土1
A	K9	SP005			1	IV	38	35	23	SB001内 土3(Ⅳ群1)
A	K10	SP006			1	IV	39	38	21	SB001内 土5石1
A	K10	SP007			1	IV	68	60	14	SB001内 土6(Ⅴ群2)石1
A	K9	SP008		SP010	1	IV	28	25	20	SB001内
A	K9	SP009			1	IV	24	20	37	SB001内
A	K9	SP010	SP008		1	IV	22	20	20	SB001内
A	K9	SP011			1	IV	37	29	13	SB001内
A	K9	SP012			1	IV	32	24	4	SB001内
A	K9	SP013			1	IV	36	34	57	SB001内 土5
A	K9	SP014			1	IV	30	25	6	SB001内 土3石1
A	K9	SP015			1	IV	19	13	11	SB001内
A	K9	SP016			1	IV	45	40	62	SB001内 土3(Ⅴ群1)
A	K9	SP017			1	IV	40	30	11	SB001内 土4(土師器1)
A	K10	SP018			1	IV	22	20	8	SB001内
A	K9	SP019			1	IV	45	42	7	SB001内 土10(Ⅴ群1)石1
A	J5	SP020			1	V	30	27	8	SX002内
A	J5	SP021			1	V	22	22	10	SX002内
A	J5	SP022			1	V	32	28	12	SX002内
A	K9	SP023			1	IV	80	76	20	SB001内 土4石2

第4表 土器棺墓・埋設土器一覧表

地区	検出グリッド	遺構名	切る >	切られる <	検出面	検出層位	埋設状況	種別	備考・出土遺物 石(石器類)
A	J9	SZ001			1	IV	立位	埋設土器	底部のみ
A	M-N7	SZ002			1	IV	斜位	土器棺墓	
B	D17	SZ003			1	IV	立位	土器棺墓	
A	M7-8	SZ004			1	IV	斜位	土器棺墓	石2
A	M10-11	SZ005			1	IV	立位	埋設土器	胴部のみ
A	K7	SZ006	SK217		2	V	立位	埋設土器	底部のみ 石1
B	H14	SZ007			2	V	立位	土器棺墓	石6
B	E17	SZ008		SK683	2	V	立位	埋設土器	胴部のみ
B	E17	SZ009			2	V	立位	埋設土器	底部のみ

第5表 石組み遺構一覧表

地区	検出グリッド	遺構名	切る >	切られる <	検出面	検出層位	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類) 石(石器類)
A	K4	SF001			1	IV	57	45	20	土7(Ⅳ群1)石3
B	C17-18	SF002			2	V	67	59	27	土2

第6表 不明遺構一覧表

地区	検出グリッド	遺構名	切る >	切られる <	検出面	検出層位	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類) 石(石器類)
A	J-K6	SX001			1	IV	(288)	256	24	土2石2
A	I-K4-6	SX002			1	V	500	(448)	5	土32(Ⅰ群1:Ⅲ群2:Ⅳ群5)石12
A	K-L4-5	SX003			1	V	-	(224)	23	土92(Ⅰ群1:Ⅲ群2:Ⅳ群7:Ⅴ群1)石11
B	G15-16	SX004	SK918 SK959	SK912	3	V	304	304	8	

第7表 溝状遺構一覧表

地区	検出グリッド	遺構名	切る >	切られる <	検出面	検出層位	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類) 石(石器類)
B	D17-18	SD001	SK777 SK778	SK708	2	V	160	41	6	土2

出土遺物点数はすべて接合後：Ⅵ・Ⅶ群土器の点数は省略

第9表 土坑一覧表(2)

編年 グロブ	遺構名	切石 >	石目 <	縦 cm	横 cm	幅 cm	深 cm	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)	編年 グロブ	遺構名	切石 >	石目 <	縦 cm	横 cm	幅 cm	深 cm	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)	
L6	SK210	SK481 SK482 SK480	V	81	81	12	±4(IV群1)	石1	K9	SK304	SK243	V	37	30	9	±1		
L6	SK211		V	22	20	18	±1		L-M10	SK305		V	67	54	11			
L6	SK212	SK213	V	85	46	12	±7		J8	SK307		V	110	(60)	36	±11(IV群1:V群1)		
L6	SK213	SK212	V	46	42	12			K8	SK309		V	48	31	12	±1		
L-M6-7	SK215	V	70	50	61	±8			K-K8	SK312		V	42	41	19			
L7	SK216	SK368	V	55	48	14			J-K8	SK314		V	41	37	22	±2石1		
K7	SK217	SK206	V	35	33	15	±2(IV群1)		N8	SK316		V	101	72	41			
K7	SK218	SK456	V	-	-	-	±8(IV群3:IV群2)石1		M8	SK317		V	33	31	20			
K7	SK220		V	38	21	25	±3		L-M11-12	SK319		V	-	-	-	±8(IV群10:IV群1)石6		
L7	SK221	SK346	V	43	40	24	±3		N9	SK320	SK387	V	39	35	15			
L7	SK222	SK223	V	102	80	9	±2		M8	SK322	SK482	V	40	39	10	±1		
L7	SK223	SK222	V	98	71	17	±7		K9	SK325	SK251	V	105	91	60	±40(IV群3:IV群2)石5		
M8	SK224		V	32	31	5			L7	SK328		V	59	50	15	±1		
L8	SK226	SK228 SK424	V	134	125	80	±20(IV群2:IV群15:IV群14)石4		L7	SK329		V	30	27	6			
L8	SK227	SK228	V	37	39	68	±6(IV群2:IV群1)石2		L8	SK334		V	45	37	15			
L8	SK228	SK226 SK227	V	53	53	28			L8	SK335		V	47	42	25	±4(IV群2)		
L8	SK229		V	29	24	9			M-N7-8	SK336	SK262	V	90	71	4	±4(IV群1)		
K-L8-9	SK231	SK302	V	59	47	17	±5(IV群1)石1		N8	SK338		V	164	(124)	31	±12(IV群4:IV群1)石2		
L8	SK233		V	50	43	19			K6	SK339		V	38	37	32			
K8	SK234		V	55	41	17			M7	SK340		V	26	19	38			
J-K7	SK236	SK259	V	75	(43)	21			M8	SK342		V	58	57	28	±1石1		
J8	SK237	SK239	V	39	36	13	±3		J7	SK345	SK207	V	96	86	26	±2		
J8	SK239	SK237	V	117	92	42	±114(IV群3)石9		K-L7	SK346	SK221	V	65	55	21	±13(IV群1:IV群3)石2		
J9	SK241		V	26	25	8			M7	SK347		V	148	(78)	69	±9(IV群3:IV群4:IV群1)石3		
K8-9	SK242		V	118	67	58	±4		M7	SK348	SK375	V	113	42	9	±4(IV群1)石1		
K9	SK243	SK304	V	33	31	7			J6	SK350		V	38	32	16			
J9	SK244		V	32	31	8			J6	SK351		V	41	31	8			
J9	SK245		V	22	19	8			J6	SK352		V	29	24	11			
J9	SK246		V	24	19	10			J6	SK353		V	28	23	9			
K9	SK247		V	41	35	30	±1		J-K6	SK359	SK202 SK488	SK358	V	102	70	9	±7(IV群2)石1	
K9	SK248	SK249	V	39	31	16			J6	SK356		V	69	52	8			
K9	SK249	SK248	V	(29)	29				J6	SK357	SK487	V	96	(76)	13			
K9	SK250		V	60	50	10	±1(IV群1)		K6	SK358	SK355	V	42	36	39	±5(IV群1)		
K8-9	SK251	SK302	SK252	V	(30)	100	60	±130(IV群1:IV群9)石13	K6	SK359		V	33	26	12			
K9	SK252	SK251	V	-	-	26	±9(IV群1)		L6	SK360	SK362	V	35	30	13	±1		
K9	SK253		V	35	26	5			L6	SK361		V	55	27	15	±1		
K10	SK254		V	59	54	28			L6	SK362	SK360	V	(25)	23	11	±1		
K10	SK255		V	44	31	12	±2		L7	SK363		V	47	43	11			
K10	SK256		V	57	49	9			L7	SK364		V	79	43	1			
K9	SK258		V	47	39	45			L7	SK365		V	65	51	11			
J-K7-8	SK259	SK236	V	47	42	30			L7	SK366	SK372	V	50	48	8	±1(IV群1)		
L9	SK261		V	141	112	94	±208(IV群3:IV群16)石23		L-M7	SK368	SK216	V	(62)	68	15	±4(IV群1)石2		
M7-8	SK262	SK336	V	54	50	6			L7	SK369		V	40	32	7			
M8	SK264		V	51	38	15			L-M7	SK371		V	119	100	13	±9(IV群1)石2		
M8	SK265		V	51	46	24			L-M7	SK372	SK366	V	40	35	16	±3		
M9	SK266	SK409	V	73	62	29	±11(IV群1:IV群2)		M7	SK375	SK368	V	27	13	13			
M8	SK267	SK421	V	(45)	50	17	±2(IV群1)		N7-8	SK379		V	127	117	40	±11(IV群1)石2		
L8	SK268		V	63	53	12	±2(IV群1)		N8	SK380	SK381	V	49	47	11			
L9	SK269		V	45	32	8			N8	SK381	SK380	V	105	43	3			
L-M8	SK270		V	41	37	12			M-N8	SK385		V	30	29	23			
L9	SK271	SK273	V	46	35	11			N8	SK386		V	37	27	12			
M9	SK272		V	51	45	18			N9	SK387	SK320	V	(30)	34	17			
L9	SK273	SK271	V	22	20	12			N9	SK389		V	44	37	24			
L9	SK274		V	30	24	23	±5		N9	SK390		V	30	26	24			
L9	SK275		V	48	44	29	±2(IV群1)		M-N9	SK392	SK389	V	(140)	117	18			
L9	SK276		V	47	39	20			M9	SK398		V	60	34	8			
L9	SK277		V	42	39	20	±2石3		M9	SK399		V	61	53	19			
L9	SK278		V	93	75	14			M9	SK400		V	70	53	15			
M9	SK279		V	40	36	6			M9	SK402		V	50	31	6			
M9	SK281	SK280	V	41	35	22			M10	SK404		V	43	41	13			
M9	SK282		V	48	31	13			M10	SK405		V	50	45	12	±3		
L-M9	SK283		V	45	29	15			M8-9	SK409	SK266	V	(35)	46	21	±1		
L9	SK284	SK285	V	96	80	12	±1		M9	SK410		V	89	85	10			
L9	SK285	SK284	V	77	64	13	±1石1		M8	SK411		V	49	35	14			
K9	SK286		V	20	19	8	±1(IV群1)		M8	SK412	SK322	V	59	48	3			
L9	SK287		V	24	12	12			M8	SK413		V	50	35	19			
L10	SK288		V	35	29	15	±2		M8	SK414	SK415	V	90	47	38			
K9	SK290	SK295	V	50	41	9	±2		SK414			V	38	35	13	±2(IV群1)		
K-L9	SK295	SK290	V	101	81	6			M8	SK415	SK416 SK422	V	95	83	28	±4(IV群4)石18		
L9	SK297	SK298	V	78	77	18			M8	SK416	SK415 SK422	V	115	(93)	82	±4(IV群4)石18		
L9	SK298	SK297	V	57	43	21	±7(IV群2)		N8	SK418		V	90	83	28			
L10	SK299		V	45	40	20	±1(IV群1)石1		M8	SK421	SK267	V	55	46	15			
K7	SK300	SK208	V	73	54	20	±1(IV群1)石1		M8	SK422	SK416 SK415	V	58	(34)	9			
K10	SK301		V	56	40				L8	SK423		V	70	64	15			
K8-9	SK302	SK231 SK251	V	123	(48)	10	±7石1											

出土遺物点数はすべて接合後：VI・VII群土器の点数は省略

第10表 土坑一覧表(3)

編年 グループ	遺構名	切石 >	切石 <	切石 なし	幅長 cm	幅短 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)	
L8	SK424	SK226	-	-	-	-	土2(Ⅱ群1:Ⅰ群1)		
L8	SK425	-	V	44	41	35	土4		
L8	SK426	-	V	29	26	3			
L8	SK427	-	V	101	79	9	土1		
L8-9	SK430	-	V	34	30	14			
L8	SK432	-	V	41	37	18	土2		
L8	SK433	-	V	34	33	9			
L8	SK434	-	V	26	25	15			
L8	SK435	SK443	V	25	25	18	石1		
L8	SK438	-	V	50	38	24	土3石1		
L8	SK439	SK824	V	46	46	16			
K7	SK442	SK496	SK456	V	56	44	13	土3石(Ⅰ群7:Ⅱ群4:Ⅲ群8)石1	
K-L7-8	SK443	SK435	V	110	110	76	土38(Ⅰ群7:Ⅱ群4:Ⅲ群4)石1		
L7	SK444	SK823	V	55	46	14	土5(Ⅱ群1:Ⅲ群1)石2		
K8	SK451	-	V	39	35	13			
K7	SK453	SK458	V	55	51	15	土7石1		
K7	SK456	SK346 SK496 SK442 SK218	V	110	85	73	土81(Ⅰ群1:Ⅱ群10:Ⅲ群10)石3		
K7	SK458	SK455 SK459	V	(49)	65	19	土8石3		
K7	SK459	SK458	V	50	46	41	土5		
K7	SK461	-	V	57	44	18	土1		
K7	SK462	-	V	87	53	14	土2		
K7	SK463	SK464 SK462	V	40	40	14			
K7	SK464	SK463	V	(43)	35	11			
K6	SK465	-	V	42	50	16			
J6-7	SK466	-	V	75	(32)	29	土83(Ⅱ群3:Ⅲ群12)石5		
J7	SK468	SK471	V	55	50	11	土2		
J7	SK471	SK468	V	162	(54)	26	土27(Ⅲ群4)石2		
N8	SK474	-	V	35	33	13			
L6	SK475	SK478	V	50	25	23	土3		
L7	SK476	SK478	V	69	(32)	20	土2		
L7	SK477	SK478	V	(28)	39	16	土3石1		
L6-7	SK478	SK476	K3	(46)	31	土3石1			
L6-7	SK479	SK480	V	37	35	18			
L6	SK480	SK210 SK428 SK210	V	72	52	8	土3		
L6	SK481	-	V	85	69	38	土5(Ⅲ群1)		
L6	SK482	SK481	SK210	V	(70)	64	9	土2	
K-L6	SK484	-	V	70	62	23	土6		
K6	SK485	-	V	-	-	-			
J6	SK487	SK488	SK352 SK262 SK355 SK487	V	(65)	72	27	土8	
J-K6	SK488	-	V	131	(70)	42	土8石1		
K6	SK489	-	V	39	28	10			
K6-7	SK490	SK491	V	131	81	31	土6(Ⅱ群1:Ⅲ群2)石1		
K6	SK491	SK490	V	50	33	10			
K7	SK492	SK463	V	75	(23)	21	土1石1		
K7	SK493	-	V	37	31	11	石1		
K7	SK494	SK492	-	V	71	55	14	土1石1	
K7	SK496	SK440 SK456	V	(52)	(48)	9	土2(Ⅱ群2)		
L8	SK498	-	V	50	32	16	土2(Ⅱ群1:Ⅲ群1)		
K7	SK499	-	V	29	23	5	土1		
M10	SK804	SK813 SK806	V	76	56	8	土1(Ⅱ群1)石1		
M10	SK805	-	V	46	35	32			
M10	SK806	SK804	V	45	36	10			
(M10)I	SK807	-	V	106	95	68	土26(Ⅰ群1:Ⅱ群1)石4		
M11	SK808	-	V	86	80	14	土1(Ⅲ群1)		
M11	SK809	-	V	40	29	11	土1		
M10	SK810	-	V	61	50	30	土1(Ⅱ群1)		
L11	SK811	-	V	(28)	33	16			
L11	SK812	-	V	54	29	19			
M10	SK813	SK804	V	(28)	39	10			
M10	SK817	-	V	55	35	15			
L7	SK818	-	V	35	32	7			
K9	SK820	-	V	48	40	19	土1		
L7	SK822	-	V	69	51	21	土5(Ⅲ群1)石1		
L7	SK823	SK444	V	62	(23)	16			
L7-8	SK824	SK439	V	112	(63)	40	土2		
L8	SK825	-	V	27	21	16			
L8	SK826	-	V	54	(21)	11			
L-M8	SK827	-	V	105	(63)	40	土6石5		
K5	SK828	-	V	32	30	27	土3(Ⅲ群1)		

出土遺物点数はすべて接合後：VI・VII群土器の点数は省略

A区第3検出面

編年 グループ	遺構名	切石 >	切石 <	切石 なし	幅長 cm	幅短 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)
J4	SK1001	SK1002	-	-	-	-	-	
J-4	SK1002	SK1001 SK1003 SK1008	V	(124)	108	4	土2(Ⅰ群2)	
J-4	SK1003	SK1004 SK1008	V	136	104	3	土13(Ⅰ群1:Ⅱ群1)石3	
J-4	SK1004	SK1005 SK1002	V	140	(86)	17	土1	
J4	SK1005	SK1004 SK1006	V	58	29	5		
J4	SK1006	SK1005 SK1007	V	(52)	70	6		
J4	SK1007	SK1006 SK1001	V	96	66	5	土1(Ⅰ群1)	
J4-5	SK1008	SK1003 SK1002 SK1004 SK1007 SK1009	V	(20)	176	3	石1	
J-K4	SK1009	SK1010 SK1012 SK1015	V	274	177	7	土11(Ⅰ群6)石2	
J-K4	SK1010	SK1011 SK1009	V	(132)	153	7	土5(Ⅰ群5)	
K4	SK1011	SK1030	V	48	42	7	土1(Ⅰ群1)石1	
K4	SK1012	SK1013 SK1009	V	84	78	9	土4(Ⅰ群6)	
K4	SK1013	SK1009 SK1012	V	(98)	118	4	土5(Ⅰ群5)石1	
J-K4	SK1014	SK1015	V	68	54	10	土2(Ⅰ群2)石1	
K4	SK1015	SK1009 SK1014 SK1016	V	(72)	160	14	土10(Ⅰ群9)石5	
J3-4	SK1016	SK1015 SK1017	V	108	(75)	10	土7(Ⅰ群7)石1	
J3	SK1017	SK1016	V	102	94	5	石1	
J3	SK1018	SK1019	V	30	28	10		
J3	SK1019	SK1018	V	78	66	15		
J3	SK1020	-	V	40	40	2		
J3	SK1021	-	V	30	30	10		
K3	SK1022	SK1001	V	108	85	3	土5(Ⅰ群5)	
K4	SK1023	-	V	80	62	7		
K-L5	SK1024	-	V	90	73	8	土2(Ⅰ群2)石1	
J5	SK1026	-	V	36	34	26		
J5	SK1029	-	V	30	27	15		
J5	SK1030	-	V	40	31	11		
J5	SK1031	-	V	36	30	11		
J4	SK1032	SK1033	V	48	42	6		
J4	SK1033	SK1032	V	32	28	20		
J7	SK1034	-	V	64	48	18		
L7	SK1035	-	V	110	104	4		
L7	SK1036	-	V	110	76	4	石1	
L7	SK1037	-	V	36	30	50		
M7	SK1038	SK1039	V	-	-	-	土5(Ⅰ群5)石1	
M7	SK1039	SK1038	V	(52)	120	34	土3(Ⅰ群3)石1	
L7	SK1040	-	V	26	24	15		
L7	SK1041	SK1042	V	208	140	12	土6(Ⅰ群1:Ⅲ群1)	
M7	SK1042	SK1041	V	90	76	5	土1(Ⅰ群1)	
L8	SK1043	-	V	38	31	11		
K8	SK1044	-	V	64	58	44		
J9	SK1046	-	V	-	-	-		
J9	SK1047	-	V	128	42	22		
J9	SK1048	-	V	110	40	40	石1	
K9	SK1049	SK1050	V	38	38	11		
K9	SK1050	SK1049 SK1053	V	120	134	22		
K9	SK1051	-	V	54	47	19		
K9	SK1052	SK1053	V	-	-	-	土6	
K9	SK1053	SK1052 SK1050	V	68	57	30	土1(Ⅰ群1)	
J10	SK1054	-	V	32	26	5		
J-K10	SK1055	-	V	(99)	(65)	10		
K10	SK1056	-	V	64	48	16		
L8	SK1059	-	V	67	56	33		
L9	SK1060	SK1062	V	46	34	8		
L10	SK1061	-	V	113	130	16	土1(Ⅰ群1)	
L9	SK1062	SK1063 SK1060	V	62	55	10		
L9	SK1063	SK1065 SK1064	V	108	106	12		
L9	SK1064	SK1063	V	62	50	31	石1	
L9	SK1065	SK1063	V	88	58	7		
L9	SK1067	-	V	71	56	31	石1	
L9	SK1068	-	V	36	34	18		
M8	SK1069	-	V	28	24	14		
L9	SK1070	-	V	55	51	20		

第11表 土坑一覽表(4)

層位	遺構名	切る >	切られる <	軸長 cm	軸幅 cm	短軸 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)
M9	SK1071			46	36	26	±1(Ⅰ群1)	
L-M9	SK1072	SK1079		88	(47)	9		
L-M9-10	SK1079/SK1072			220	147	19		
M9	SK1074			34	33	12		
L-M9	SK1075			54	38	4		
L10	SK1076			42	41	25	±1(Ⅰ群1)石1	
K10	SK1077/SK1078			207	(56)	8		
K10	SK1079			-	-	11		
K3	SK1080/SK1022			50	48	8	±2(Ⅰ群2)	
K3	SK1081			38	33	11	±1	
J4	SK1083			-	-	-		
K4	SK1084	SK1008		116	22	18	±1(Ⅰ群1)	
J9	SK1085/SK1052/SK1053			160	-	100	±1(Ⅰ群1)	
N8	SK1086			-	-	-		

B区第1横出面								
層位	遺構名	切る >	切られる <	軸長 cm	軸幅 cm	短軸 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)
H14	SK502			22	18	18	±1	
H14	SK503			52	32	15	±1	
H14	SK504			34	32	18	±5	
G15	SK505			32	22	27	±2(Ⅰ群1)	
G14	SK506			28	26	23	±1	
F16	SK507			29	27	17	±1	
F16	SK508			54	41	16		
F16	SK509			22	20	10		
F16	SK510			29	27	26		
F16	SK511			41	39	10		
E16	SK512			42	36	19	±1	
E16	SK518			88	67	13	±2(Ⅰ群2)石1	
E16	SK519			55	48	13	±3	
D16	SK523			31	29	5	±1	
D16	SK525			63	63	19	±1	
D16	SK526			52	42	36	±1	
D16	SK527	SK507		66	67	50	±2(Ⅰ群4)石6	
D16	SK528			42	34	15	±1	
D16	SK529			65	58	18	±4	
D16	SK530			42	37	7		
D17	SK533			69	40	40	±3(Ⅰ群1)	
D17	SK538			52	42	47	±2石1	
C17	SK546			44	38	19	±5	
C17	SK547			60	36	26	±1	
C17	SK548			119	32	8		
C17	SK549			43	38	14	±1	
C17	SK550			52	46	10		
C17	SK551			44	39	17	±1	
C17	SK552			44	40	16	±1	
C17	SK553	SK554		68	56	20	±9(Ⅰ群2)石1	
C17	SK554/SK553			42	42	22	±2	
C17	SK555			130	120	63	石1	
C18	SK558			58	27	7		
C18	SK559			36	29	8		
C18	SK560			38	31	13		
C18	SK561			61	49	21	±1石1	
C18	SK562			69	58	23	±5	
C18	SK564			24	50	11		
C18	SK565			119	50	37	±1(Ⅰ群1)	
C18	SK567			28	22	23	±1	
C18	SK568			40	36	14	±1	
C18	SK569			37	31	17		
C18	SK570			62	50	18	±2	
D18	SK572			44	40	16	±4石3	
D18	SK573			37	32	9	±1	
D18	SK574			94	78	11	±2石1	
D18	SK576			44	40	24	±1	
D18	SK577			36	30	15		
E15	SK580			24	22	10		
E15	SK581			77	67	24	±6石1	
E18	SK582			56	46	9	±3	
F16	SK587			28	23	36		
F16	SK589			22	19	19		
D18	SK592			67	54	39	±2(Ⅰ群1)	
D16	SK597/SK527			50	44	46	±14(Ⅰ群2)石3	

B区第2横出面								
層位	遺構名	切る >	切られる <	軸長 cm	軸幅 cm	短軸 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)
H14	SK603			28	23	22		
G14	SK605			5	52	35		
G14	SK606			70	64	23		

層位	遺構名	切る >	切られる <	軸長 cm	軸幅 cm	短軸 cm	深さ cm	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)
G14	SK607			7	37	17		±3
G14	SK608			27	27	13		
G15	SK609/SK624			7	43	38	9	
G15	SK610/SK611			7	70	55	30	
G15	SK611	SK610/SK612		7	30	(20)	12	
G15	SK612/SK611			7	35	33	25	
G15	SK613			7	22	19	21	
G15	SK614			7	63	57	6	±2(Ⅰ群1)石1
G15	SK615	SK616		7	28	20	21	
G15	SK616	SK615/SK617		7	(16)	22	27	
G15	SK617/SK616			7	38	36	13	
G15	SK618/SK619			7	79	45	39	
G15	SK619	SK618		7	75	(41)	15	
G15	SK620			7	23	21	26	
G15	SK621			7	29	29	32	±1
G15	SK622			7	-	-	-	
G15	SK624	SK609		7	79	70	18	
F15	SK625			7	46	43	16	
F15	SK626/SK638/SK628			7	105	83	3	
F15	SK627/SK628			7	30	23	6	
F-G15	SK628	SK627		7	37	25	38	
F15	SK629			7	39	25	18	
G15	SK630			7	(34)	32	26	
G15	SK631			7	33	25	7	
G15	SK632			7	39	27	36	
G15	SK633			7	25	20	8	
F15	SK635			7	30	21	16	
F15	SK636			7	55	34	28	
F15	SK637	SK779		7	(28)	25	30	
F15	SK638	SK626		7	26	25	12	
F15	SK639/SK779			7	46	42	-	
F15	SK640			7	-	-	-	
F15	SK642			7	53	46	19	±1
F15	SK643			7	48	43	7	
F16	SK645			7	60	40	33	±2
G16	SK646			7	27	25	29	
F16	SK647			7	30	26	14	
F15-16	SK648/SK773			7	171	81	10	
F15	SK649			7	45	39	11	
F15	SK650	SK651		7	(17)	47	7	
F15	SK651	SK650		7	43	41	8	
F15	SK652			7	18	16	-	
F15	SK653	SK654		7	59	51	15	
F15	SK654/SK653			7	(23)	45	8	
F15-16	SK655			7	21	21	11	
F16	SK656/SK657			7	33	21	13	
F16	SK657	SK656		7	63	49	3	
F16	SK658			7	29	21	10	
F16	SK659			7	17	15	9	
F16	SK660			7	19	17	22	
F16	SK661			7	57	43	17	
F15	SK662/SK668			7	45	35	8	±1石1
F15	SK663	SK664		7	(27)	30	8	
F16	SK664/SK663			7	51	43	6	
F16	SK665			7	30	24	14	
F16	SK666			7	25	21	12	
F15	SK667			7	28	21	10	
F16	SK668	SK662		7	22	33	10	
E16	SK669			7	30	30	43	
F16	SK670			7	27	23	23	
E16	SK672			7	33	30	7	
E16	SK673/SK674			7	30	29	15	
E16	SK674	SK673		7	(17)	25	13	
E16	SK675			7	61	49	8	
E16	SK676			7	157	143	25	
E16	SK677			7	42	31	11	±1
E16	SK678			7	33	22	8	
E16	SK679			7	18	17	20	
E17	SK681			7	36	32	21	±2
F17	SK682/SK740			7	36	26	13	
E17	SK683/S2008			7	57	42	24	±3
E17	SK685/SK687			7	58	50	33	
D17	SK686	SK689		7	(43)	54	21	±2(Ⅰ群1)石1
E17	SK687	SK685		7	(29)	41	34	
D-E17	SK688			7	41	35	29	±2(Ⅰ群1)
D-E17	SK689/SK686			7	64	52	32	±1(Ⅰ群1)石1
D16	SK690			7	38	34	19	

出土遺物点数はすべて接合後：Ⅵ・Ⅶ群土器の点数は省略

第12表 土坑一覧表(5)

遺構 グロット	遺構名	切る >	掘られ <	総 延長	掘輪 幅	掘 幅	掘 深	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)
D17	SK693	SK697 SK762 SK763 SK699 SK695	V	189	111	8	±5	
D17	SK694		V	86	63	31	±1	
D17	SK695	SK693	V	107	80	34	±19(掘輪4V群5)石1	
D17	SK696		V	59	29	8		
D17	SK697	SK760	SK693	V	65	51	17	±6(V群1)石2
D17	SK698		V	47	40	15		
D17	SK699	SK693	V	38	27	10		
E18	SK700	SK755	V	65	58	10	±1	
C-D17	SK701	SK702	V	52	25	11		
C17	SK702	SK703	SK701	V	33	(20)	8	
C17	SK703	SK702	V	40	30	16	±1	
C17	SK704		V	56	50	24		
C-D17	SK705		V	71	56	46		
D17	SK706	SK707	V	79	45	39		
D17	SK707	SK708	SK706	V	-	-	-	±7(Ⅱ群2)石1
D17	SK708	SD001	SK707	V	-	-	-	±6
D17	SK709	SK777	V	56	40	28		
D17	SK710		V	-	-	-	±2(Ⅰ群1)	
D18	SK712	SK713	V	31	31	23	±1	
D18	SK713	SK712 SK714	V	(9)	25	7		
D18	SK714	SK713	V	39	31	36	±1	
C18	SK717		V	46	42	16	±1	
C17	SK718		V	33	27	19		
C17	SK719		V	49	35	14		
D18	SK720		V	41	29	12		
D18	SK721		V	25	24	30		
D18	SK722		V	22	15	9		
D18	SK723		V	71	60	5	±2	
D18	SK724		V	47	39	14		
D18	SK725	SK726	V	31	29	16	±1石1	
D18	SK726	SK725	V	(29)	37	9		
D18	SK727	SK728	V	44	35	24	石1	
D18	SK728	SK727 SK754	V	(56)	41	13	±4(V群1)	
C-D17	SK731		V	45	41	37	±4(V群1)	
D17	SK732	SK733	V	33	31	16		
D16-17	SK733	SK732	V	26	22	12		
C16	SK734		V	91	80	36	±2石1	
D16	SK735		V	27	23	8		
D16	SK736		V	46	42	17		
F17	SK740	SK682	V	28	27	17		
E-F17	SK741		V	33	33	12		
E-F17	SK742		V	38	29	21		
E17	SK743		V	45	31	20	±1	
E17	SK744		V	40	36	12		
G12	SK747	SK748	V	(21)	24	10		
G12	SK748	SK747	V	24	22	8		
G12	SK749		V	27	27	9		
F15	SK752		V	31	20	6		
D18	SK753		V	73	65	14	±1	
D-E18	SK754	SK728	V	40	35	17	±3(V群1)	
E18	SK755	SK700	V	(23)	50	18	±2(Ⅱ群1:V群1)	
C17-18	SK757		V	45	39	33	±1	
D17	SK758		V	89	79	44	±2	
D-E17	SK759		V	67	53	28	±3石1	
D17	SK760	SK697	V	(23)	29	12		
D-E17	SK761		V	33	24	13		
D17	SK762	SK693	V	49	45	7		
D17	SK763	SK693 SK699	V	(35)	43	37	±1	
D16	SK764		V	63	55	22		
D16	SK765	SK776	V	70	53	29	±1	
G16	SK766		V	25	21	23	±8	
D17	SK767		V	34	32	21		
D17	SK768		V	33	31	19		
G15	SK769		V	52	39	34	±1	
D13-18	SK770		V	57	57	29		
E-F17	SK771		V	30	25	36	±2	
D17	SK772		V	51	48	20		
F16	SK773	SK648	V	39	36	20		
F15	SK774		V	33	23	15		
D-E16	SK775		V	151	127	35		
D16	SK776	SK765	V	(35)	47	25		
D17	SK777	SK709 SD001	V	47	(17)	33		
D17	SK778	SD001	V	72	51	44	±5(Ⅱ群1:V群1)	

出土遺物点数はすべて接合後：VI・VII群土器の点数は省略

遺構 グロット	遺構名	切る >	掘られ <	総 延長	掘輪 幅	掘 幅	掘 深	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)
F15	SK779	SK637	SK639	V	(24)	37	23	
C18	SK780		V	34	31	22		
C18	SK781		V	29	25	9		
E16	SK782		V	39	35	3		

B区第3検出面

遺構 グロット	遺構名	切る >	掘られ <	総 延長	掘輪 幅	掘 幅	掘 深	備考・出土遺物 土(土器類)石(石器)
H14	SK903		V	54	59	11	±2(V群2)	
H14	SK904		V	30	24	19		
H15	SK905		V	(26)	32	20		
H15	SK906	SK905	V	54	42	31	±1	
H15	SK907	SK905	V	34	26	17	±3(V群1)	
H15	SK908	SK909	V	(36)	45	25	±2	
H15	SK909	SK908	V	(42)	38	31	±5(Ⅱ群1)	
G15	SK910		V	32	30	5		
G15	SK911		V	70	67	6		
G15	SK912	SK958	V	115	97	5		
G15	SK913	SK958	V	27	21	13		
G15	SK914		V	(26)	23	16		
G15	SK915		V	(11)	19	12		
G15	SK916		V	28	21	18		
G16	SK917		V	44	38	17	±1	
G15	SK918	SK958	V	30	25	10		
G15	SK919	SK913 SK918	V	40	47	27		
G15	SK920		V	48	42	7		
G15	SK921		V	99	65	45		
G15	SK922		V	42	27	8		
E17	SK923		V	156	142	15	±8(Ⅱ群1)	
E17	SK924		V	71	59	8		
E17-18	SK925		V	332	(20)	4		
E17	SK926	SK927	V	68	(36)	41	±1(V群1)	
E17	SK927	SK925	SK926	V	168	(64)	10	
E17	SK928	SK925	V	66	46	5	±2(Ⅱ群2)	
H14	SK929		V	(23)	23	28		
D18	SK930		V	52	37	20		
D16	SK932		V	50	40	16		
D18	SK933		V	56	42	4		
D18	SK934		V	40	29	9		
D18	SK935		V	-	-	-	±5(V群2)石1	
D18-9	SK936		V	148	89	52	±1	
E17	SK937		V	49	45	7	±1(Ⅱ群1)	
E17	SK938	SK939	V	58	63	20	±2(Ⅱ群1:V群1)	
E17	SK939	SK940	SK938	V	42	38	5	
E17	SK940	SK939	V	52	42	5	±2(Ⅱ群2)	
D17	SK941		V	46	28	18		
D17	SK942		V	75	63	16		
E17	SK943		V	42	40	21		
D17	SK944		V	55	40	8		
D17	SK945		V	67	55	7		
C17	SK946		V	43	39	8		
C17	SK947		V	38	33	15		
D17	SK948		V	38	34	13		
E16	SK949		V	36	30	10		
F16	SK951		V	25	20	4		
F16	SK952		V	32	30	7		
F16	SK953		V	18	18	31		
E17	SK954	SK925	V	82	55	26		
E17	SK955	SK923	V	59	34	14	±20	
D17	SK956		V	46	22	19		
D17	SK957		V	44	19	8		
G15-16	SK958	SK913 SK918	V	-	-	-		
G16	SK959	SK958	V	(13)	21	12		
D18	SK960	SK936	V	42	32	14		

第4章 遺物

第1節 出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器・弥生土器合わせて17,343点、土師器262点、須恵器1点、灰釉陶器24点、中近世陶磁器（山茶碗・天目茶碗・白磁碗など）412点、石器類2,544点（剥片1,919点含む）、金属製品、炭化物など78点（すべて破片数）である。土器は縄文時代中期末から後期前葉にかけてのものと縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけての条痕文系土器が多く出土している。古墳時代以降の遺物は、包含層からの出土が大半を占める。山茶碗については尾張産のものが大半を占める。なお、縄文土器を分類する際に、小林達雄編『縄文土器大観』を参照し、弥生土器を分類する際には『弥生土器の様式と編年- 東海編- 』を参照した。また、それぞれの個体についての記述では、既存の土器型式を随時用いることとした。石器についてはほとんどが縄文時代に属し、石鏃、打製石斧、安山岩製礫器の出土が大半を占める。石鏃の石材のうち約9割を黒曜石と下呂石で占めているところが特徴的である。

土器・石器とも図化・掲載について遺構出土遺物を優先した。さらに遺構出土遺物は遺構掲載順に掲載した。包含層遺物については分類を優先して掲載した¹⁾。なお、金属製品や炭化物については遺構の時期を表すものが少なく、器種等不明な点が多いため、本書では図示・記述を省略した。

第2節 土器類

本遺跡では縄文時代から近世まで幅広い時代に渉る遺物が出土している。その中でも縄文時代から弥生時代にかけての土器が中心であるため、今回の報告に当たり、現在用いられている型式設定を適用しつつ、文様要素や構成等を考慮し、次の第Ⅰ～Ⅶ群に分類した。なお、縄文時代晩期末～弥生時代初頭にかけての条痕文系土器については同じ群とし、その中で時期ごとに分類をした。また、条痕の原体及び使用面（外側・内側）については、条痕の断面形（やや丸みを帯びるのがハイガイ、角張るものがサルボウ）や調整の始点を観察することで判断した（写真図版9参照）。

第Ⅰ群 縄文時代早期の土器

- 1類 押型文系土器様式（細久保式・穂谷式）に該当するもの
- 2類 条痕文系土器様式（茅山下層式・粕畑式）に該当若しくは併行するもの
- 3類 その他の土器

第Ⅱ群 縄文時代前期の土器

北白川下層式に該当するもの

第Ⅲ群 縄文時代中期の土器

- 1類 前～中葉の土器
- 2類 中期後葉の土器
 - a 口縁部文様帯の存在するもの

- b 口縁部文様帯が消滅したもの
- c 口縁部文様帯の存在が確認できないもの

3類 その他の土器

第IV群 縄文時代後期の土器

1類 前～中葉の土器

- a 中津・福田KⅡ式土器様式の第1・第2様式（中津式）に該当するもの
- b 中津・福田KⅡ式土器様式の第3・第4様式（福田KⅡ・四ツ池式）に該当・併行するもの
- c 縁帯文土器様式（北白川上層式1～3期・一乗寺K式・元住吉山I式）に該当・併行するもの
- d 堀之内・加曾利B式土器様式に該当若しくは併行するもの
- e その他の土器

2類 後葉の土器

3類 その他の土器

第V群 縄文時代晩期から弥生時代の土器

1類 縄文時代晩期前～中葉の土器

2類 縄文時代晩期末葉の土器

3類 縄文時代晩期末から弥生初頭の器面全体を条痕調整した土器

- a 口縁部に明瞭な面取りを施さないもの
- b 口縁部に明瞭な面取りが施されているもの・・・三河Ⅰ-2様式に該当するもの
- c 体部に羽状条痕が施されているもの・・・三河Ⅱ-1様式に該当するもの

4類 その他の土器

第VI群 時期・型式不明の土器

第VII群 縄文時代から弥生時代の土器で、底部のみ残存するもの

- 1類 底部に網代痕や木葉痕の認められるもの
- 2類 条痕文系土器で平底のもの・・・在地の可能性の高いもの
- 3類 条痕文系土器で丸底のもの・・・沿岸部からの搬入品の可能性のあるもの
- 4類 圧痕等の認められないもの

以下、特徴的な遺物について述べる。個別の分類等については観察表を参照されたい。

SB001 竪穴住居跡埋土、住居内小土坑出土のうち5点を図示した（図版15：1～5）。1は第IV群1類eに分類した。口縁端部を肥厚させ、2条の平行する沈線間に押し沈線が施されている。2は住居内小土坑（SP005）から出土したもので、第IV群1類aに分類した。口縁部は波状を呈し、肥厚させない。中津Ⅰ式に該当する。3・4はミニチュア土器である。3は鉢のミニチュアで、口縁の下に段を持つのが特徴的である。胎土は混入物が少なく、矢作川中下流域の土であると考えられる。内外面に炭化物が付着している。4は台付甕のミニチュアである。住居内小土坑（SP001）から出土した。口縁部はやや外反し、ハケ目が残る。脚部はやや内彎する。内面は指頭圧痕と輪積痕が顕著である。該当する型式は不明であるが、東三河に見られる台付甕の要素を持った土器である。5は平底の甕である。底部は高台部分が貼り付けてあり、突出している。口縁部は長く外反し、胴部最大径をやや上

に持つ。胎土、器形から在地のものである可能性が高いが、古墳時代初頭（2世紀末～3世紀初め）遡間Ⅰ（新）～Ⅱに併行すると思われる。また、前述した3・4もこの時期に所属すると考えられる。内・外面ともに炭化物の付着が認められるが、外面胴部最大径付近への付着が著しい。

SZ001（図版20：16）16は第Ⅶ群1類に分類した。底部付近のみの残存で、割れ口付近にわずかに条線が見られる。底部付近は内外面ともに撫で調整が施されている。割れ口付近及び断面に炭化物が付着していることから、割れた後に付着したものであると考えられる。底面には木炭痕が見られる。

SZ002 土器棺蓋を構成する3点（いずれも第Ⅴ群3類b）を図示した（図版15・16：6～8）。6は棺身として用いられた深鉢である。胴部は砲弾形で、屈曲しない底部を持つ。口縁部は緩やかに内彎し、端部は面取りが施されている。外面は二枚貝（ハイガイ）腹縁外側による粗い条痕調整で、上胴部は横方向、下胴部は単斜方向である。内面は撫で調整が施されている。底部内面は器壁が大変薄く、最終的に削り取った痕跡が確認できる。7は棺蓋に用いられた深鉢である。約四分の一の残存で、底部を欠くが、胴部は砲弾形を呈する。口縁部は緩やかに内彎し、端部は強く面取りが施されている。外面は二枚貝（ハイガイ）腹縁外側による条痕調整で、胴部をほぼ横方向に調整する。内面は撫で調整が施されている。内外面ともに炭化物の付着が認められる。8は7とともに棺蓋として用いられた深鉢である。約六分の一の残存であり、底部を欠くが、胴部は緩やかな砲弾形を呈する。口縁部はほぼ直立し、端部は面取りが施されている。外面は二枚貝（ハイガイ）腹縁外側による条痕調整で、口縁付近は横方向、胴部ほとんどが単斜方向である。内面は撫で調整が施されている。

SZ003 土器棺蓋を構成する2点（いずれも第Ⅴ群3類b）を図示した（図版17：9・10）。9は棺身として用いられた深鉢である。胴部は緩やかな砲弾形で屈曲する底部を持つ。口縁部は緩やかに内彎し、端部は弱く面取りが施されている。外面は二枚貝（サルボウ）腹縁内側による条痕調整で、全体に斜方向と横方向の調整を組み合わせ、羽状にも見える。内面は撫で調整が施されている。底部内面は器壁が他の土器棺に比べやや厚みを持つ。口縁部付近では輪積み痕が明確である。10は棺蓋に用いられた深鉢である。胴部は緩やかな砲弾形で、屈曲する底部を持つ。口縁部はほぼ直立し、端部は弱く面取りが施されている。外面は二又状工具（半截竹管か）による条痕調整で、胴部をほぼ横方向に調整する。内面は撫で調整が施されている。

SZ004 土器棺蓋を構成する3点（いずれも第Ⅴ群3類b）を図示した（図版18・19：11～13）。11・12は棺蓋に用いられた深鉢である。11は約四分の一の残存であり、底部を欠くが、胴部は砲弾形を呈する。口縁部は内彎し、端部は強く面取りが施されている。外面は二枚貝（ハイガイ）腹縁外側による条痕調整で、胴部をほぼ横方向に調整する。内面は撫で調整が施されている。12は約六分の一の残存であり、底部を欠くが、胴部は緩やかな砲弾形を呈する。口縁部は緩やかに内彎し、端部は面取りが施されている。外面は二枚貝（ハイガイ）腹縁外側による条痕調整で、口縁付近は横方向、胴部ほとんどが単斜方向である。内面は撫で調整が施されている。13は棺身として用いられた壺である。胴部のみ残存で全体の器形は不明だが、頸部には突帯を施さないものと思われる。外面は二枚貝（ハイガイ）腹縁外側による条痕調整で、横方向である。内面は撫で調整が施されている。

SZ005（図版21：18）18は第Ⅲ群2類bに分類した。島崎Ⅲ式に該当し、加曾利E3又は曾利Ⅳ式に併行する。胴部は3本を1単位とした縦方向の沈線（口縁部付近で鈎の手状になるとも考えられる）で4区画に分けられている。区画内は櫛状の工具で施されたと思われる矢羽根状の条線が施され

ている。縦方向の沈線が糸線に切られている部分も一部見られる。

SZ006 (図版20:15) 15は第Ⅶ群1類に分類した。割れ口付近でかすかに沈線が見られるが、垂下沈線とも考えられる。底部付近は内外面ともに撫で調整が施されている。底面中央部には網代痕が見られる。

SZ007 土器棺墓の棺身と思われる1点(第Ⅴ群3類b)を図示した(図版20:14)。14は深鉢である。胴部は緩やかな砲弾形で屈曲しない底部を持つ。口縁部は緩やかに内彎し、端部は面取りが施されている。外面は二枚貝(サルボウ)腹縁内側による糸痕調整で、全体に単斜方向である。内面は撫で調整が施されている。

SZ008 (図版21:19) 19は第Ⅲ群3類に分類した。口縁部・底部ともに打ち欠かれているため詳細は不明である。胴部は無文で、内外面ともに撫で調整が施されている。器形から中期末であると考えられる。

SZ009 (図版20:17) 17は第Ⅶ群1類に分類した。底部のみで詳細は不明である。残存部分は無文で、外面は粗い撫で調整、内面も撫で調整が施されている。底面は木葉痕が見られる。底部から胴部へやや外反しながら立ち上がり、器形より中期の深鉢と考えられる。

SK004 (図版21:20-23) 20は内外面に二枚貝による糸痕文を施し、胎土に繊維を含む土器で粕畑式に該当する。波頂部は指頭圧痕が残り、口唇部に連続刻みが施されている。21は口縁端部が内側へやや肥厚する。沈線のみで、縄文帯は確認できない。22は粗製の注口土器であると思われる。23は壺である。口縁部直下に突帯文を持ち、口唇部及び突帯文には連続して棒状工具による押圧が施されている。頸部に糸痕文は施されない。

SK121 (図版21:35) 35は外面の粗い撫で調整に対して内面は丁寧に撫で調整が施されている。

SK197 (図版22:41-46) 41は中津Ⅰ式に該当する双耳壺である。縄文帯と無文帯は竹管状工具による連続した刺突と沈線で区画され、器面全体に水銀朱による赤彩が施されている(第5章参照)。把手部は垂直方向に穿孔されている。46は口縁部から胴部にかけて縄文のみが施されている。42は深鉢の頸部である。縦方向に櫛状工具による糸線が施されるのみで詳細は不明である。43・45は底部片で、ともに網代痕が見られる。44は中津式に該当する深鉢の口縁部である。沈線で区画された中には縄文を施さない。

SK199 (図版21:25) 25は中津Ⅰ式に該当する。器壁は薄く、磨消部と縄文帯の幅が均等である。

SK205 (図版21:26-27) 26は口縁端部を内面に折り返し、口唇部に縄文が施されている。27は口縁端部を内面に折り返す。口縁部無文帯とほぼ均等の幅で細く磨消縄文帯が施されている。

SK207 (図版21:28-29) 28は縦方向に二又状の工具による糸線が施されている。29は中津Ⅰ式に該当し、口縁部にやや幅広の無文帯を持つ。

SK226 (図版23:24:58-65) 58・59は同一個体である。口縁部直下に横方向の押し沈線と縄文帯と無文帯を区画し、その下では沈線と押し沈線で区画した文様帯が施されている。文様帯は縦方向に大きく展開する。文様帯を構成する押し沈線、沈線は内面ではポジティブな線となっているところが特徴的である。60は口縁部直下に細い隆帯を横方向に貼り付けている。口唇部は薄く、縄文が施されている。61・62は中津式に該当する深鉢で、いずれも口縁部に広い無文帯を持つ。63は深鉢胴部片である。長い間水に浸かっていたのか、底部付近は表面が粗くなっている。64は底面中央部に浅い凹み

部を持つ。65は胎土・文様帯のモチーフが58・59と似ているが、押引沈線が施されていない。いずれも中津Ⅰ式に該当するが、古い段階であると考えられる。

SK239（図版21：36～40）36は口縁部の無文帯に対し、やや幅広い縄文帯を持つ。37は口縁部付近に横方向と波状の沈線が施されているが、縄文帯は持たない。38・39は底面に網代痕、40は木葉痕が見られる。また、縄目状の痕跡も一部見られる。

SK251（図版25：69～79）69は加曾利Ⅴ式に該当する。口縁部直下に窓枠状の文様帯を持ち、胴部には縦区画の縄文帯を持つ。70は咲畑式に該当する深鉢と思われる。71は精製無文土器である。72～79は中津Ⅰ式に該当する。73は縄文帯と無文帯の区別が曖昧で、古い段階のものであると考えられる。75・79は中津Ⅰ式の新段階に該当する。75はJ字、79はスベード形をモチーフとしている。

SK261（図版22：47～54）47は2本の沈線で縦方向に区画された中に結節縄文が施されている。48は唐草文系の深鉢である。胴部片のみで口縁部文様帯については不明である。49は取組式と思われる深鉢である。沈線の中に棒状工具による連続した刺突が施されている。50は口縁部直下に縦方向と横方向の沈線で構成された文様帯が施されているが、窓枠状であるかどうかは不明である。51は波頂部が円形を呈する。口唇部は面取りされ、内面にやや肥厚する。52は垂下するJ字文が見られるが、さらに下部で文様帯が展開するかは不明である。53は無文精製土器である。口唇部に工具による撫での痕が見られる。54は頸部から胴部にかけて横方向の沈線が施されているが、他の施文はなく、粗い撫で調整のみである。

SK307（図版21：24）24は口縁部付近で無節の羽状縄文が施されている。

SK319（図版26：87～93）87・93は曾利Ⅳ又はⅤ式に該当する。87は縦方向に3本1単位の沈線を引き、その間に矢羽根状の沈線が施されている。93は口縁部付近で横方向に、胴部では縦方向に沈線と条線を引く。88は後期の無文精製土器である。89は沈線で縦に区画した中に、棒状工具で刺突・沈線が施されている。胎土から搬入品である可能性がある。90は北白川Ⅲ式の深鉢B類に該当する。91は加曾利Ⅴ式に該当する深鉢である。92は粗製無文深鉢である。

SK325（図版21：30～34）30～32はいずれも口縁部直下から横方向の沈線（若しくは区画）を引き、斜め方向に条線が施されている。33は口縁部直下に2本の沈線を引く。34は櫛状の工具による3本を1単位とした矢羽根状の条線が施されている。

SK347（図版22：55～56）55は粕畑式に該当する。口縁部は波状を呈し、口唇部に連続刻み、口縁部付近に2段の連続した爪形文が施されている。56は口縁部付近に矢羽根状の沈線が施されている。口縁部文様帯が独立するか不明である。

SK379（図版26：96）96は唐草文系の深鉢である。伊那谷からの搬入品と考えられる。縦区画に結節縄文が施されている。

SK443（図版27：97～111）97～102は第Ⅲ群、103～107・109～111は第Ⅳ群、108は第Ⅶ群Ⅰ類である。97は縦区画内に結節縄文が施されている。98・99・101は口縁部直下に横方向の沈線を引き、胴部は斜め方向の条線が施されている。100・102は同一個体と思われる。斜め方向の条線のみ施される。103～105は中津Ⅰ式に該当する。109・110は粗製深鉢で、同一個体と思われる。口縁部直下に横方向の沈線を引き、胴部は不均等な横方向の沈線を引いている。111も粗製深鉢である。内面は丁寧な撫で調整が施される。

SK456 (図版25: 80~86) 80は内外面ともに二枚貝による条痕調整が施されている。81・82は中津式に該当する。81は口縁部付近に磨消縄文帯を持たず、斜方向の条線のみ施される。83は口縁部を細くすぼめ、全面に縦方向の細い条線が施されている。84は第VII群4類に分類した。85・86は同一個体の可能性もある。ともに綾杉状の樺描文が施されている。

SK466 (図版24: 66~68) 66は口縁部に窓枠状の文様帯を持つが、口縁部と胴部とが明確に分かれない深鉢である。67は底面にかすかに網代痕が見られる。68は口縁部直下から縦方向に樺状工具による条線が施されるが、区画を意識したものではないと思われる。

SK471 (図版26: 94・95) 94・95は同一個体の可能性が高い。縄文時代後期の深鉢と思われるが、縄文のみで、詳しい時期の判断は難しい。口縁部はやや内彎し、胴部が張る深鉢である。

SK807 (図版22: 57) 57は縦方向に細い樺状工具で沈線が施されている。沈線の単位は不規則で、区画を意識したものではないと思われる。輪積み部分で剥離している。

SK1002 (図版28: 116) 116は胎土に繊維を多く含む。口縁端部が内外面に開き、口唇部は断面が凹状になる。

SK1009 (図版28: 117・118) 117・118は同一個体で茅山下層式に併行する。口唇部は平坦で縄文が施される。口縁部付近は樺状工具による押引沈線と縄文帯が交互に施されている。口縁部と胴部が樺状工具による押圧のある突帯文によって分けられ、胴部は縄文のみ施される。

SK1010 (図版28: 112~114) 112・114は第I群1類である。112は細久保式の後半に該当する。不規則な楕円押形文が施されている。113は第I群2類で、口唇部に連続刻みが施されている。

SK1015 (図版28: 115) 115は口唇部に矢羽根状の連続刻みが施されている。

SX002 (図版28: 119) 119は第IV群1類で、中津I式の古段階である。

SX003 (図版28: 120・121) 120は縁帯文期に該当し、口縁部が逆くの字状に内彎する。121は一乗寺K式前後に該当し、口縁部が逆くの字状にやや内彎し、口唇部には細い沈線が引かれる。口縁端部には縄文を施した後、括弧状の沈線が引かれる。

その他の遺構出土遺物 (図版28: 29: 122~153) 122はやや放射状に広がる3本の浮線文が施されている。浮線上は軽く面取りを施し、浮線間は磨き調整が施されている。123は加曾利B2式に該当する。沈線の間にはベンガラと思われる顔料が付着している。124は縦方向の沈線の中に細い樺状工具による連続した刺突が見られるが、胴部片のみで時期等詳細は不明である。125は幅広の隆帯上に同一の工具を使用して沈線と連続した刺突が施されている。126は中津II式に該当する。口縁部は内彎し、やや肥厚する。127は底面に網代痕がわずかに見える底部片である。128は無文の精製土器で、口縁内部に縄文が施されている。129は無文精製浅鉢と思われる。130は氷I式に該当する壺である。頸部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口縁部付近に2条の浮線文が施されている。口縁部直下に2箇所穿孔が見られる。131は後期縁帯文期終末に位置づけられる深鉢である。口縁部は逆くの字を呈し、口縁端部には縄文を施した上に括弧状の沈線を引く。132は晩期末の浮線網状文浅鉢で、補修孔が2箇所に見られる。133・135は中津式に該当する深鉢である。134は無文精製土器である。器壁が非常に薄いのが特徴的である。136は底面に木葉痕の残る底部片である。137は粗製無文深鉢である。口縁内部のやや下ったところに段を持つ。口縁部のみで時期等詳細は不明である。138は外面に条痕若しくは樺状工具で調整が施されている。口縁端部は逆くの字状にわずかに屈曲している。

139は加曾利B2式に該当する。口縁部付近のみであるが、残存部には全面ベンガラによる赤彩が施されている。140は山田平Ⅱ式に該当する土器で、口縁端部を外側に折り返している。141は第Ⅲ群2類aに分類した。棒状工具による沈線と刺突で口縁部文様帯を構成していると思われる。142は底面近くでわずかに条痕が見える深鉢底部片である。143は口縁部付近から斜め方向に楕円形のネガティブな押形文が施されている。144・145は粕畑式に該当する。144は口縁部内外面に二枚貝による連続した爪形文が波状に施されている。145は口唇部に連続刻みが施されている。146は突帯文期に伴う黒色磨研土器の浅鉢である。147・151は北白川下層Ⅱ式に該当する。胴部に羽状縄文が施されている。148は口唇部に沈線を施し、外面は細かい条痕状の調整が施されている。149はハマグリを使用したと思われる磨き調整が施されている浅鉢底部片である。150は滋賀里Ⅲb式に該当する。外面は粗い削り調整が施されている。152は口縁部直下に沈線を施し、幅の狭い無文帯を持つ。153は中期末の深鉢である。口縁部直下に横長楕円形の連続した刺突を施し、胴部にかけて棒状工具による縦方向の沈線を引く。口縁部付近のみの残存で詳細は不明である。

包含層出土遺物

第Ⅰ群土器（図版29：154～167）154～160・162は粕畑式に該当する。155・156・159・162は外面に連続した爪形文が施されている。また、159・162は口唇部に連続刻みが施されている。157は波頂部が台形を呈し、突起部には棒状工具による押圧が見られる。161は茅山下層式に併行する。口縁部直下を縄文と沈線・横方向へ不均等に連続した刺突により文様帯が構成されている。また、口唇部には縄文が施されている。163は山形の押形文が施されている土器で、穂谷式に該当する。164～167は早期後半に位置づけられる。164・165は外面に二枚貝による条痕を施し、166は口縁部付近にかすかに楕円形の押形文が施されている。

第Ⅱ群土器（図版29：168）168は横方向の羽状縄文が施される深鉢で、北白川下層Ⅱ式に該当する。第Ⅲ群土器（図版29：30：169～199）169は1類に分類した。北裏C式に該当する土器の口縁部突起部分である。170～184は2類aに分類した。174～176は口縁部がキャリバー形を呈する土器で、174・175については咲畑式に該当する。178・179は押し文と太い沈線及び楕円形の刺突によって口縁部文様帯が構成されている。182は口縁部突起部分である。184は口縁部付近に一条の隆帯を貼り付け、その中に刺突が施されている。隆帯の直下には波紋状の沈線を施し、胴部は沈線によって縦に区画がなされている。141と同一個体の可能性がある。185～190は2類bに分類した。185は北白川C式に該当する深鉢の口縁部片で、器壁は薄く、沈線が裏面でポジティブな線として現れている。187は2本の縦方向条線によって縄文帯と綾杉状の条線とに区画されている。190は口縁部付近にわずかに羽状の条線が見られる。191・192・196は2類cに分類した。192は2条の隆帯を縦方向に貼り付け、その間に楕円形の刺突を八の字状に配置している。隆帯の外側には結節縄文が縦に施されている。196は渦巻き状（若しくは波紋状）に隆帯を貼り付け、その上に縄文が施されている。193～195・197～199は3類に分類した。いずれも壺である。194・195・198・199は頸部に一条の隆帯を貼り付け、その上に棒状工具で刺突を加えている。その下を195は連続した鉤状、199は横・斜め方向の沈線が施されている。

第Ⅳ群土器（図版30：31：200～239）200～207は1類aに分類した。200・202は沈線、204は均等に連続した刺突が口唇部に施されている。205は沈線及び無文部分に赤色顔料が付着している。207

は波頂部が台形を呈し、突起部分は円形に面取りがされていると思われる。208～210は1類bに分類した。208・209は磨消縄文帯幅が狭く、変曲点で沈線が完結する部分がある。いずれも福田KⅡ式に該当する。210は口縁端部を肥厚させ、口唇部に連続した刺突及び沈線が施されている。四ッ池式に該当する。211～222は1類cに分類した。211～213・215は一乗寺K式に該当する注口土器である。211・212は同一個体で、211は頸部から胴部にかけて、垂下する6の字文が横に並んでいる。212の磨消縄文帯にはベンガラが付着が見られる(第5章参照)。213は凹の字状の縄文帯部分に水銀朱の付着が見られる(第5章参照)。217・218は北白川上層式1期、214・216は北白川上層式2期、219・220・222は北白川上層式3期に該当する。214は頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部に粘土紐を円形に貼り付けている。219は内彎した口縁部に沈線と刺突で文様帯を構成している。沈線で分けられた区画内に縄文は施さない。221は北白川上層式3期～元住吉山式まで考えられる深鉢である。223～229は1類dに分類した。223は堀之内系の土器で、縦方向の隆帯上に刻み目を施し、隆帯付近に斜め方向の沈線が施されている。224～229は加曾利B式に該当する。224は胴部に弧状の沈線を交互に施し、225は縦方向に波形の沈線が施されている。226は口縁部内面に3本の沈線を施し、薄い口唇部には縄文が施されている。227は鉢で、底部付近に括弧状の刻みが施されていると思われる。228は粗製の注口土器である。229は口縁部の突起部分で、穿孔が施されている。230～234は縄文時代後期ではあるが、型式不明で4類eに分類した。235～237は2類に分類した。235・236は元住吉山Ⅱ式に該当する。いずれも口縁部内面に沈線が施されている。236は口縁部直下に横方向の隆帯を貼り付け、その上を棒状工具で横方向に引いている。237は粗製深鉢で、口縁部が緩やかな波状を呈している。また、波頂部には小さな瘤状の突起物が2つ見られる。238・239は3類に分類した。238は注口土器と思われる。胴部には赤色顔料が付着している。

第V群土器(図版32:240～264) 240～243は2類に分類した。240は壺である。口縁部付近に横方向の沈線と長楕円形の刺突が施されている。器面は丁寧な磨かれ、弧状に引かれた沈線内には赤色顔料が付着している。242は口縁端部を内面に折り返している。外面には素文突帯が施されている。243は櫛状工具による細密条痕が縦方向に施されている。244～248は3類aに分類した。いずれも口唇部は丸みを帯びている。244～247は二枚貝、248は櫛状の工具で条痕が施されている。247は口縁部直下に無文帯を持つのが特徴的である。244・245は馬見塚式に該当する。249～258は3類bに分類した。249～253は深鉢である。いずれも二枚貝による条痕が施されている。250は口唇部の面取りが顕著で、指撫で痕が残る。252・253は口唇部に殻頂部付近の外面による刺突が施されている。原体はハイガイであると思われる。254～258は壺である。258を除いて口縁部直下に突帯文が施されているが、頸部については不明である。258は口縁部が外反し、口唇部には面取りが施されている。口縁部直下から主に横方向の条痕が施されている。突帯文は施されないが、時期的には他の壺と同じであると思われる。259～263は3類cに分類した。259は口縁端部が外反する甕で、口唇部は面取りされ、内外面に肥厚する。260は口縁部がほぼ直立し、口唇部には二枚貝腹縁部外側による刺突が連続して施されると思われる。261・262は横方向と斜方向の条痕を施し、やや変則的な羽状条痕を構成している。262は口唇部に一部、わずかに腹縁部外側による刺突が見られる。264は4類に分類した。口縁端部が大きく外反し、内面には列点文が施されるが、原体については特定できない。高蓋式に該当する。

第VI群土器(図版32:265～271) 265は外面が粗い撫で調整を施されるのみの粗製土器である。口縁

部のみが残存で器種は不明である。266は口縁部が波状を呈し、口縁部付近に沈線による渦巻き文が見られるが詳細は不明である。267は口唇部に板状と思われる工具で刺突が施されている。269は無文であるが、赤色顔料が一部付着している。270・271は土製円盤である。

第Ⅶ群土器（図版33：272～282）276～279・282は1類に分類した。276～278・282は網代痕、279は木葉痕が残る。280・281は2類に分類した。280は植物の茎とも思われる痕跡が見られる。281は中央部に若干凹みが見られる。いずれも弥生初頭と思われる。272～275は3類に分類した。272～275は底面近くまで条痕が施され、弥生初頭のものと考えられる。274はハマグリ背面による磨きが施され、他のものより若干時期は古いと思われる。

古墳時代以降の土器（図版33：283～296）283は土師器高坏脚部である。均質の良質な土を使っていることから攪入品の可能性がある。脚部は直線上に広がっていく。時期は5の襖と対応する。284は土師器脚付きの小型壺の脚部である。胴部内面を磨いている。285は須恵器の盤である。美濃須衛産で時期は7世紀後半～8世紀前半と思われる。これまで東濃では岩崎25号窯式併行（8世紀中頃）に美濃須衛産が最初に入っていたとされていた（正家廃寺跡）が、それよりも少し古いと思われる²⁾。286・287は灰釉陶器の碗である。288～290は山茶碗の碗、291・292は皿である。いずれも荒肌手で尾張第5型式に該当する。290は胎土が他のものとは異なることから在地の可能性がある。293～295は近世陶器である。293は天目茶碗で連房第1段階に該当する。294は片口鉢である。295は染付皿である。内面に船頭が船を漕いでいる様子を表した「海浜風景」が施されている。また、内外面ともに二次的に被熱したと思われる釉薬のただれが見られる。296は中世の白磁碗である。

第3節 石器類

石器は器種ごとに分類し、器種によっては形態・折損等で細分類をした。分類の内容等については項目ごとに述べる。

石畿（図版34：297～331）

191点出土した（未製品含む）、石材は黒曜石が94点、下呂石が56点、チャートが27点、安山岩が9点、その他が5点である。尖頭部と基部に着目して以下のように分類した（第11図）。

折損等で形態が分からないものを除いた各種の点数を第13表に示した。

尖頭部の分類

- 1類 先端部を小さく突き出したもの
- 2類 鋭角な尖頭部を持つもの
- 3類 意図的に鋸歯状の側縁部を作出したもの
- 4類 先端が小さく尖り、側縁部の肩が張った形状を持つもの

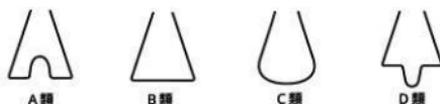
基部の分類

- A類 凹状の挟りが入るもの（いわゆる凹基畿）
- B類 基部が直線上になるもの（いわゆる平基畿）
- C類 基部が丸みを帯びるもの（いわゆる円基畿）
- D類 基部に茎を持つもの（いわゆる有茎畿）

尖頭部の分類



基部の分類



第11図 石鏃の分類

第13表 石鏃分類別集計表

	A	B	C	D	不明	計
1	11	0	0	0	1	12
2	55	6	5	6	9	81
3	10	0	0	0	2	12
4	0	0	0	10	0	10
不明	45	4	1	6	20	76
計	121	10	6	22	32	191

遺構出土遺物を優先しつつ、各分類を網羅すべく未製品を含む35点を図示した。300は、両面中央部まで厚みを減じるための調整が深く施されている。301はチャート製で、縦長剥片を使用し、表面中央部に自然面を残している。302・303は基部の挟りが深い凹基鏃である。302は下呂石製で、脚の端部に丸みを持たせる調整が施されているのに対し、303は黒曜石製で、細くすぼめる調整が施されている。304は未製品である。横長剥片を使用し、縁辺をやや外彎させている。306は安山岩製の石鏃である。表面はほぼ自然面で基部を調整するにとどまっている。307は基部の挟りの深い凹基鏃である。両側辺から中央部にかけて厚みを減じるために深く調整が施されている。308は両側縁が鋸歯状に見えるが、表裏の打点は一致しない。311は非常に小型ではあるが、脚部を意識する深い挟りが見られる。312は折損により基部は不明である。表裏同じ箇所には打点を持ち、意図的に側縁を鋸歯状に調整している。314・325は石英製である。325が脚部先端部を尖らせているのに対し、314は丸みを帯びている。318・323は4類に分類し、縄文時代早期のものであると判断した。319は円基鏃で表面中央部に瘤を残しているが、縁辺部の調整は完成していることから製品と見なした。324は凹基鏃であるが、挟りの部分に角をつけてあり、いわゆる鋸形鏃の形態となっている。326～328は表裏同じ箇所には打点を持ち、側縁を鋸歯状に調整している。329～331は有茎鏃で、330については肩の張りが顕著な五角形になっている。石鏃（図版35：332～338）

18点出土した。石材は黒曜石が3点、下呂石が10点、チャートが4点、安山岩が1点である。形態により以下のように分類し、7点図示した。

- 1類 剥片の一端を尖らせて錐部を作り出したもの（4点）
- 2類 剥片の全体を整形して錐部を作り出したもの
 - a種 基部と錐部の区分が明瞭なもの（3点）
 - b種 基部と錐部の区分が不明瞭なもの（5点）
- 3類 長い棒状の形態を呈し、基部と錐部の区分が不明瞭なもの。
 - a種 錐部が一端のみのもの（2点）
 - b種 錐部が両端にあるもの（4点）

スクレイパー（図版35：339～347）

41点出土した。石材は黒曜石が8点、下呂石が13点、チャートが13点、安山岩が3点、その他が4点である。9点図示した。

340・345は下呂石の円礫を利用したものである。表面はほぼ全体に自然面を残し、側縁にわずかに刃部調整が施されているのみにとどまっている。346は安山岩製である。右側辺部に両面から刃部調整が施されている刃部のみ風化の度合いが違う部分が見られる。刃部再生を行った可能性もある。347は両側縁に刃部調整が施されている。上端を欠き、石匙のように握み部を持つかどうかは不明である。

粗製刃器（図版36：348・349）

4点出土した。石材はホルンフェルスが2点、ドレライトが1点、砂岩が1点である。2点図示した。348はドレライト製である。表面はほぼ全面に自然面を残している。横長剥片を素材とし、打面に刃部を作り出している。刃部調整は片面である。349はホルンフェルス製である。左側辺に刃部を持つ。上端部に一部抉り状の剥離が見られるが、意図的なものかどうかは不明である。

楔形石器（図版36：350～354）

42点出土した。石材は黒曜石が25点、下呂石が12点、チャートが4点、安山岩が1点である。5点図示した。354は安山岩の円礫を素材とし、やや大型で一見打欠石錘と同様の形態を呈するが、凹み部の形成が不十分で、両端に潰れ状の痕跡が形成されていることから楔形石器であると判断した。

RF（図版36：355～357）

剥片の側縁に連続的な剥離痕を有するものを2次加工のある剥片（RF）とした。46点出土した。石材は黒曜石が28点、下呂石が6点、チャートが7点、その他が5点である。3点図示した。

UF（図版36：358～361）

剥片の側縁に微細な剥離痕を有するものを使用痕のある剥片（UF）とした。42点出土した。石材は黒曜石が22点、下呂石が8点、チャートが10点、その他が2点である。4点図示した。

359は黒曜石製である。左側辺に連続した微細な剥離痕を有する。全体に赤みを帯びた鉄分が斑状に混入している。このような混入が明確に確認できるのは409の石核とともに2点のみである。

安山岩製礫器（図版37：362～371）

安山岩の円礫を素材とし、自然面を多く残しながら縁辺部を刃部として利用したものを安山岩製礫器とした。石材の安山岩はすべて表面の風化が著しい。刃部調整を施さないものもあるが、石材と形態から本器種に分類したものもある。用途は不明であるが、スクレイパーのような形態を呈するものと打製石斧のような形態を呈するものに分かれる。65点出土した。刃部調整に着目し、以下のように分類した上で、10点図示した。

- 1類 両面調整が施されているもの（18点）
- 2類 片面のみ調整が施されているもの（27点）
- 3類 刃部調整を施さないもの（20点）

366は刃部調整が施されないが、下端部に使用によるものと思われる剥離痕が観察できる。367・368は薄い剥片を素材としたもので、刃部調整が明確である。371は円礫をそのまま素材としたもので、下端部に大きな刃部調整が施されている。

打製石斧（図版38：372～383）

81点出土した。石材は安山岩が52点、ホルンフェルスが16点、結晶片岩が6点、花こう岩が3点、その他が4点である。形態により、以下のように分類し、12点図示した。なお、折損により形態分類が不可能なものは2点あった。

1類 胴部がほぼ平行なもの（いわゆる短冊形）（57点）

2類 形状が基部に向かって収束するもの（いわゆるバチ形）（21点）

375・379・382は表面に円礫の自然面をほぼ全体に残している。377は自然面を多く残しつつ、両側辺に調整が施されている。376はごく一部に自然面を残すのみで、全体を調整して形態を整えている。刃部には階段状の潰れが見られるが、使用による潰れではなく、刃部調整によるものと思われる。刃部に擦痕はなく、未使用であるか、刃部を再生している可能性もある。

磨製石斧（図版39：384～389）

7点出土した。石材は蛇紋岩が3点、凝灰岩が2点、ドレライトが2点である。打製石斧と同じく形態により分類し、6点図示した。

1類 胴部がほぼ平行なもの（いわゆる短冊形）（1点）

2類 形状が基部に向かって収束するもの（いわゆるバチ形）（6点）

切目石錘（図版39：390～395）

16点出土した。石材は結晶片岩が9点、ホルンフェルスが2点、安山岩・凝灰岩・砂岩・花こう岩・泥岩がそれぞれ1点ずつである。16点中7点が欠損しており、その部位により分類した（第12図）。

それぞれの点数は次のとおりである。

a 3点、b 2点、c 1点、d 1点

6点図示した。391は結晶片岩製である。細長い棒状の形態を呈し、下端は打欠状の調整を施したのち、切目状の調整が施されている。上端については摩滅により調整が確認できない。393は結晶片岩製である。上端は切目状調整が施されているが、下端は打欠状の調整が施されている。395は凝灰岩製の有溝石錘である。

打欠石錘（図版39：396～400）

22点出土した。石材は結晶片岩が13点、安山岩が6点、花こう岩が2点、ホルンフェルスが1点である。22点中10点が欠損しており、その部位により切目石錘と同じく（第12図）分類した。それぞれの点数は次のとおりである。

a 4点、b 4点、c 1点、d 1点

本報告書では5点図示した。



a 一部欠損



b 横割



c 縦割



d 表裏剥離

第12図 石錘欠損状態模式図（切目石錘を模式図として使用）

磨石類 (図版40: 401~406)

主に円礫及び亜円礫を素材とし、それぞれの面に磨面や凹み部などを持つものを磨石類とした。14点出土した。石材は花こう岩が11点、砂岩が2点、安山岩が1点である。6点図示した。401は花こう岩製である。表裏面及び側面に凹み部を持つ。403は砂岩製である。表裏両面に磨面を持ち、表面中央部に敲打痕が残る。405は砂岩製で、表裏両面がほぼ磨面となっている。平坦面と側面の分かれ目に稜を持ち、側面は敲打痕が一周している。406は花こう岩製である。上下両端に敲打痕が観察できる。石の形態と細かい敲打痕から石器製作の際に使用されたものであると考えられる。なお、磨面についてはスクリーントーンで図示した。

砥石 (図版40: 407)

1点出土した。石材は砂岩製である。欠損のため、全体の形態は不明である。一番広い平坦面を磨面として使用している。

石製品 (図版40: 408)

1点出土した。石材は砂岩製である。用途は不明であるが、一部擦痕が観察できる。

石核 (図版41: 409・410)

18点出土した。石材は黒曜石が8点、下呂石が3点、チャートが6点、凝灰岩が1点である。2点図示した。409・410はともに黒曜石製である。409は359のUFと同様、鉄分が斑状に混入している。産地推定の結果、諏訪星ヶ台群であることが推定される。

垂飾 (図版41: 411)

1点出土した。石材はヒスイ製である。中央よりやや上に水平方向に穿孔がある。孔の径は約6mmで、孔の断面は径を変えずほぼ筒状に貫通している。擦痕はかすかながら全体に観察できる。

石棒・石剣 (図版41: 412~414)

石棒が5点、石剣が1点、合計6点出土した。石材は結晶片岩が3点、安山岩が3点である。石棒2点、石剣1点を図示した。413は結晶片岩製である。折損のため全体の形態は不明である。全体を研磨で整形し、表面については意図的に平坦面を作り出している。414は結晶片岩製である。折損のため、全体の形態は不明である。左側には平坦面を持たないが、右側には意図的に平坦面を作り出しているため、石剣であると判断した。全体を研磨によって整形している。

石皿 (図版42: 415・416)

9点出土した。石材はすべて花こう岩である。2点図示した。415は表面全体に磨面を持ち、特に中央部には敲打による凹み部を持つ。また、中央部付近は被熱している。416は表面に4箇所の凹み部を持つ。いずれも敲打によるものと考えられる。

注1) 土器の時期・型式と現物との対応は観察者の判断によるが、早期の遺物については個別に立命館大学教授 矢野健一氏の御指導を頂き、縄文土器全体については京都大学教授 泉拓良氏に御指導を頂いた。縄文時代晩期末～弥生時代初頭の条痕文系土器については(財)愛知県埋蔵文化財センター 石黒立人氏、土師器に関しては(財)愛知県埋蔵文化財センター 赤塚次郎氏、岐阜県立多治見工業高等学校教諭 松岡千年氏に御指導を頂いた。なお、石器分類については岐阜県博物館 長屋幸二氏に御指導を頂いた。

注2) 各務原市教育委員会木曽川学研究所 渡邊博人氏御教示による。

第14表 土器観察表(1)

種別	フリ	遺物	部位	分類	種類	柄部 (外ド)	文様	胎土	色調(外/内/断面)	備考	図番
1	A	K9	S8001	口縁	IV/e	不明	横で/横で	沈積・押し沈積	赤良/橙/に灰黄/橙		15
2	A	K10	S9005	口縁	IV/a	不明	横で/横で	磨滑縄文 RL	赤良/橙/に灰黄/橙	中津1式	15
3	A	L9	S8001	口縁・底部		土師器 付付	横で/横で	無	赤良	胡赤褐/に灰黄/橙/橙	15
4	A	K9	S9001	口縁・底部		土師器 付付	横で/横で	無	赤良	橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	15
5	A	K9	S8001	口縁・底部		土師器 付付	横で/横で	無	赤良	に灰黄/橙/橙/橙	15
6	A	M7	S2002	口縁・底部	V/3b	深鉢	横で/横で	無	粗良	胡赤褐/胡赤褐/橙	15
7	A	M7	S2002	口縁・底部	V/3b	深鉢	横で/横で	無	赤良	橙/橙/赤灰	16
8	A	M7	S2002	口縁・底部	V/3b	深鉢	横で/横で	無	粗良	橙/に灰黄/赤褐/橙	16
9	B	D17	S2003	口縁・底部	V/3b	深鉢	横で/横で	無	赤良	橙/橙/褐灰	17
10	B	D17	S2003	口縁・底部	V/3b	深鉢	横で/横で	無	赤良	に灰黄/橙・黒/に灰黄/橙/に灰黄/橙	17
11	A	M7	S2004	口縁・底部	V/3b	深鉢	横で/横で	無	粗良	にぶい橙・にぶい黄/橙/胡赤褐/に灰黄/橙/に灰黄/橙	18
12	A	M7	S2004	口縁・底部	V/3b	深鉢	横で/横で	無	粗良	橙/橙/に灰黄/橙	18
13	A	M7	S2004	口縁・底部	V/3b	深鉢	横で/横で	無	粗良	に灰黄/橙/赤良	19
14	B	H14	S2007	口縁・底部	V/3b	深鉢	横で/横で	無	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/灰黄/橙	20
15	A	K7	S2006	底部	VB1	深鉢	横で/横で	不明	赤良	橙/橙/に灰黄	20
16	A	J9	S2001	底部	VB1	深鉢	横で/横で	不明	粗良	橙/橙/橙	20
17	B	E17	S2009	口縁・底部	VB1	深鉢	横で/横で	不明	赤良	橙/に灰黄/橙/に灰黄	20
18	A	M10	S2005	口縁	VB2b	深鉢	横で/横で	沈積・条線	粗良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
19	B	E17	S2009	口縁	VB3	深鉢	横で/横で	沈積	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
20	A	J-K4	SK004	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	刺突	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
21	A	J-K4	SK004	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	沈積	赤良	橙/橙/橙	21
22	A	J-K4	SK004	口縁部	IV/e	注口	横で/横で	不明	赤良	に灰黄/橙/灰黄/橙/灰黄/橙	21
23	A	J-K4	SK004	口縁部	V/3a	甕	横で/横で	突帯	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
24	A	K9	SK307	口縁部	IV/d	不明	不明/横で	縄文 RL	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
25	A	K4	SK199	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文 RL	粗良	黄/橙/橙	21
26	A	L5	SK205	口縁部	IV/e	深鉢	横で/横で	縄文 RL	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
27	A	L8	SK205	口縁部	IV/e	深鉢	横で/横で	沈積・縄文 LR	粗良	に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
28	A	J6-7	SK207	口縁部	VB2b	深鉢	横で/横で	条線	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
29	A	J6-7	SK207	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	沈積・縄文 RL	赤良	に灰黄/橙/橙/に灰黄/橙	21
30	A	K9	SK325	口縁部	VB2a	深鉢	横で/横で	沈積・条線	赤良	胡黄褐/胡黄褐/橙灰黄	21
31	A	K9	SK325	口縁部	VB2a	深鉢	横で/横で	沈積・条線	赤良	胡黄褐/胡黄褐/橙灰黄	21
32	A	K9	SK325	口縁部	VB2a	深鉢	横で/横で	沈積	粗良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/灰黄/橙	21
33	A	K9	SK325	口縁部	VB2c	深鉢	横で/横で	沈積	赤良	橙/橙/に灰黄/橙	21
34	A	K9	SK325	口縁部	VB2c	深鉢	横で/横で	沈積	赤良	に灰黄/橙/黄/橙/に灰黄/橙	21
35	A	K6	SK129	口縁部	IV/e	深鉢	横で/横で	不明	赤良	褐灰/に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
36	A	J-K8	SK239	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文 RL	赤良	橙/に灰黄/橙/橙	21
37	A	J-K8	SK239	口縁部	IV/e	深鉢	横で/横で	沈積	赤良	橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
38	A	J8	SK239	底部	VB1	深鉢	横で/横で	不明	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
39	A	J-K8	SK239	底部	VB1	深鉢	横で/横で	不明	粗良	に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
40	A	J-K8	SK239	底部	VB1	深鉢	横で/横で	不明	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	21
41	A	J5	SK197	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	刺突	粗良	橙/橙/褐灰	22
42	A	J5	SK197	口縁部	VB3	深鉢	横で/横で	条線	粗良	に灰黄/橙/橙/橙	22
43	A	J5	SK197	底部	VB1	深鉢	横で/横で	不明	粗良	に灰黄/橙/橙/に灰黄/橙	22
44	A	J5	SK197	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	不明	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	22
45	A	J5	SK197	底部	VB1	深鉢	横で/横で	不明	粗良	褐灰/に灰黄/橙/に灰黄/橙	22
46	A	J5	SK197	口縁部	VB3	深鉢	横で/横で	縄文 LR	粗良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	22
47	A	L9	SK261	口縁部	VB2c	深鉢	横で/横で	沈積・磨滑縄文	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	22
48	A	L9	SK261	口縁部	VB2c	深鉢	横で/横で	沈積	赤良	胡赤褐/黒/褐灰	22
49	A	L9	SK261	口縁部	VB2a	深鉢	横で/横で	沈積	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	22
50	A	L9	SK261	口縁部	VB2a	深鉢	横で/横で	沈積	粗良	黒褐/に灰黄/橙/黒	22
51	A	L9	SK261	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文 LR	赤良	に灰黄/橙/灰黄/に灰黄/赤褐	22
52	A	L9	SK261	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文 RL	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	22
53	A	L9	SK261	口縁部	IV/e	不明	横で/横で	不明	赤良	に灰黄/橙/灰黄/橙/に灰黄/橙	22
54	A	L9	SK261	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	沈積	粗良	灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	22
55	A	M7	SK466	底部	VB1	深鉢	横で/横で	不明	粗良	橙/橙/赤灰	24
56	A	M7	SK466	口縁部	VB3	深鉢	横で/横で	刺突	赤良	灰黄/橙/褐灰/灰黄/橙	22
57	A	L-M	10-11	口縁部	VB2b	深鉢	横で/横で	沈積	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	22
58	A	L8	SK226	口縁	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文	赤良	橙/橙/に灰黄/橙	23
59	A	L8	SK226	口縁・底部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文	赤良	橙/橙/に灰黄/橙	23
60	A	L8	SK226	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	沈積・条線	赤良	灰黄/橙/赤灰	24
61	A	L8	SK226	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文	赤良	灰黄/橙/に灰黄/橙/橙	24
62	A	L8	SK226	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文 RL	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	24
63	A	L8	SK226	口縁部	VB3	深鉢	横で/横で	不明	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	24
64	A	L8	SK226	底部	VB4	深鉢	横で/横で	条線	赤良	橙/に灰黄/橙/橙	24
65	A	L8	SK226	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文 RL	赤良	橙/橙/橙	24
66	A	J6	SK466	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文 RL	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/褐灰/橙	24
67	A	J6-7	SK466	口縁部	VB1	深鉢	横で/横で	不明	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/に灰黄/橙	24
68	A	J7	SK466	口縁部	VB2b	深鉢	横で/横で	条線	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/黒褐	24
69	A	K8-K9	SK251	口縁部	VB2a	深鉢	横で/横で	沈積・縄文 LR・条線	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/灰黄/橙	25
70	A	K9	SK251	口縁部	VB2a	深鉢	横で/横で	押し沈積・条線	赤良	に灰黄/橙/に灰黄/橙/灰黄/橙	25
71	A	K8-K9	SK251	口縁部	IV/3	不明	横で/横で	不明	赤良	に灰黄/橙・に灰黄/橙/橙	25
72	A	K8-K9	SK251	口縁部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文 RL	粗良	橙/橙/灰黄/橙・に灰黄/橙	25
73	A	K8-K9	SK251	口縁・底部	IV/a	深鉢	横で/横で	磨滑縄文 RL	粗良	黒褐/に灰黄/橙/に灰黄/橙	25

第15表 土器観察表(2)

種別	地層	層位	部位	分類	器種	断面(外/内)	文様	胎土	色調(外/内/断面)	備考	図番
74	A	K8-9	SK251	胴部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消織文 LR	褐色/灰黄褐色/に灰黄褐色	中津1式 灰化物付着(内面)	25 13
75	A	K9	SK251	口縁部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消織文 LR	褐色/灰黄褐色/に灰黄褐色	中津1式(新)	25 13
76	A	K8-9	SK251	口縁部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消織文 RL	褐色/灰黄褐色/に灰黄褐色	中津式	25 13
77	A	K8-9	SK251	口縁部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	沈線	褐色/灰黄褐色	中津2式	25 13
78	A	K8-9	SK251	胴部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消織文 RL	褐色/灰黄褐色/に灰黄褐色	中津1式	25 13
79	A	K8-9	SK251	口縁部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消織文 RL	褐色/灰黄褐色/に灰黄褐色	中津1式(新) 灰化物付着(外面)	25 13
80	A	K7	SK456	胴部	IV3	深鉢	腹で/腹で	磨消/灰黄褐色	褐色/に灰黄褐色/黄褐色		25 15
81	A	K7	SK456	口縁部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	中津式	25 15
82	A	K7	SK456	口縁部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消織文 RL	褐色/灰黄褐色/灰褐色	中津式	25 15
83	A	K7	SK456	口縁部	IV1e	深鉢	腹で/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		25 15
84	A	K7	SK456	底部	V8a	深鉢	腹で/腹で	不明	褐色/灰黄褐色/黄褐色/に灰黄褐色	灰化物付着(外面)	25 15
85	A	K7	SK456	口縁部	IV3	深鉢	腹で/腹で	磨消文	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色	灰化物付着(外面)	25 15
86	A	K7	SK456	口縁部	IV3	深鉢	腹で/腹で	磨消文	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色	灰化物付着(外面)	25 15
87	A	M12	SK319	胴部	IV2b	深鉢	腹で/腹で	沈線・糸線	褐色/黄褐色	新式	26 15
88	A	M12	SK319	口縁部	IV3	深鉢	腹で/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色		26 15
89	A	L11	SK319	胴部	IV2b	深鉢	腹で/腹で	沈線・刺突	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色		26 15
90	A	L11	SK319	口縁部	IV2a	深鉢	腹で/腹で	刺突・隆帯	褐色/黄褐色/黄褐色	北白川1式	26 15
91	A	M12	SK319	口縁部	IV2b	深鉢	腹で/腹で	縄文 RL・沈線	褐色/灰黄褐色/黄褐色/黄褐色	加賀朝式	26 15
92	A	L11	SK319	口縁部	IV2b	深鉢	腹で/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		26 15
93	A	L11	SK319	口縁部	IV3	深鉢	腹で/腹で	沈線・糸線	褐色/に灰黄褐色/黄褐色/黄褐色	新式 灰化物付着(内面)	26 15
94	A	J7	SK471	口縁部	IV3	深鉢	不明/腹で	縄文 LR	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色	灰化物付着(外面)	26 14
95	A	J6-7	SK471	胴部	IV3	深鉢	不明/腹で	縄文 LR	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色		26 14
96	A	K7-8	SK379	胴部・口縁部	IV2c	深鉢	腹で/腹で	沈線・結節縄文	褐色/黄褐色/黄褐色	鹿野文系	26 14
97	A	L7	SK443	胴部	IV2c	深鉢	腹で/腹で	沈線・節縄文・隆帯	褐色/明赤褐色/に灰黄褐色/灰褐色	鹿野文系	27 15
98	A	L7-8	SK443	口縁部	IV2b	深鉢	腹で/腹で	糸線	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色		27 15
99	A	L7-8	SK443	胴部	IV2b	深鉢	腹で/腹で	沈線・糸線	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色		27 15
100	A	L7-8	SK443	口縁部	IV2b	深鉢	不明/腹で	糸線	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色		27 15
101	A	L7-8	SK443	口縁部	IV2b	深鉢	腹で/腹で	沈線・糸線	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色		27 15
102	A	L7-8	SK443	口縁部	IV2b	深鉢	不明/腹で	糸線	褐色/黄褐色/黄褐色		27 15
103	A	L7-8	SK443	胴部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消織文 LR	褐色/灰黄褐色/に灰黄褐色/灰褐色	中津式	27 15
104	A	L7	SK443	口縁部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消織文 RL	褐色/灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	中津1式	27 15
105	A	L7-8	SK443	口縁部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消織文 RL	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	中津2式 灰化物付着(外面)	27 15
106	A	L7-8	SK443	口縁部	IV3	深鉢	腹で/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		27 15
107	A	L7-8	SK443	口縁部	IV3	深鉢	不明/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		27 15
108	A	L7-8	SK443	底部	V81	深鉢	腹で/腹で	不明	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	断面に縞代焼	27 15
109	A	L7	SK443	口縁部	IV3	深鉢	腹で/腹で	沈線	褐色/に灰黄褐色/灰黄褐色/黄褐色	灰化物付着(外面)	27 15
110	A	L8	SK443	口縁部	IV3	深鉢	腹で/腹で	沈線	褐色/に灰黄褐色/灰黄褐色/黄褐色		27 15
111	A	L7-8	SK443	口縁部	IV3	深鉢	腹で/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		27 14
112	A	J5	SK100	口縁部	I1	深鉢	不明/腹で	押型文	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	継久保式	28 16
113	A	J4	SK100	口縁部	I3	深鉢	磨消/磨消	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/灰黄褐色		28 16
114	A	J4	SK100	胴部	I1	深鉢	磨消/磨消	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/灰黄褐色		28 16
115	A	J4	SK105	口縁部	I3	深鉢	磨消/磨消	磨消	褐色/黄褐色/に灰黄褐色/灰褐色		28 16
116	A	J4	SK100	胴部	I2	深鉢	腹で/腹で	磨消	褐色/黄褐色/黄褐色	新式	28 16
117	A	J4	SK109	口縁部	I2	深鉢	不明/腹で	縄文 LR・沈線・刺突・突帯	褐色/に灰黄褐色/黄褐色	茶山1式併行	28 16
118	A	J4	SK109	胴部	I2	深鉢	不明/磨消	突帯・縄文 LR・沈線・刻み	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	茶山下層式併行	28 16
119	A	J4	SK002	胴部	IV1a	不明	腹で/腹で	磨消織文 RL	褐色/黄褐色/黄褐色	中津1式(古)	28 16
120	A	L5	SK003	口縁部	IV1e	深鉢	腹で/腹で	縄文 RL	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		28 16
121	A	L5	SK003	口縁部	IV1c	深鉢	腹で/腹で	沈線・縄文 LR	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色	一筆写式	28 16
122	A	L7	SK037	胴部	V2	浅鉢	腹で/腹で	浮線	褐色/に灰黄褐色/明赤褐色/に灰黄褐色	浮線文系	28 16
123	A	K5	SK112	胴部	IV1d	不明	不明/腹で	沈線・縄文 RL	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色	加賀朝式 顔料付着	28 16
124	A	L8	SK070	胴部	IV1	不明	腹で/腹で	磨消・押し沈線	褐色/に灰黄褐色/黄褐色/に灰黄褐色		28 16
125	A	L9	SK084	胴部	IV2c	深鉢	腹で/腹で	磨消・隆帯・刺突	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		28 16
126	A	L8	SK061	口縁部	IV1a	深鉢	磨消/腹で	磨消織文 RL	褐色/黄褐色/灰黄褐色/黄褐色	中津2式	28 16
127	A	K4	SK119	底部	V81	深鉢	腹で/腹で	不明	褐色/に灰黄褐色/黄褐色	断面に縞代焼	28 16
128	A	L5	SK185	口縁部	VI1	不明	腹で/腹で	縄文 RL	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		28 16
129	A	K4	SK195	口縁部	IV1e	深鉢	腹で/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	灰化物付着(外面)	28 16
130	A	K9	SK194	口縁部	V2	浅鉢	腹で/腹で	浮線	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	水1式 口縁部付着に穿孔	28 16
131	A	K4	SK195	口縁部	IV1c	深鉢	不明/腹で	沈線・縄文 LR	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		28 16
132	A	K5	SK191	胴部	V2	浅鉢	腹で/腹で	浮線	褐色/黄褐色/に灰黄褐色	縞帯ノミ型前	28 16
133	A	K7	SK218	口縁部	IV1a	深鉢	腹で/腹で	磨消織文 RL	褐色/黄褐色/黄褐色	中津式	28 16
134	A	K6	SK358	口縁部	VI1	不明	腹で/腹で	不明	褐色/明赤褐色/に灰黄褐色/黄褐色		28 16
135	A	L8	SK424	口縁部	IV1a	不明	腹で/腹で	磨消織文 RL	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	中津1式(新)	28 16
136	A	L7	SK822	口縁部	V83	深鉢	腹で/腹で	不明	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	断面に木文縞	28 16
137	A	M40	SK415	口縁部	VI1	不明	腹で/腹で	不明	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		28 16
138	A	K4-7	SK346	口縁部	IV3	不明	磨消/腹で	磨消	褐色/灰黄褐色/に灰黄褐色/灰黄褐色		28 16
139	A	K5	SK828	口縁部	IV1d	不明	不明/腹で	沈線・縄文 LR	褐色/黄褐色/黄褐色	加賀朝式 顔料付着	28 16
140	A	L8	SK424	口縁部	IV1d	不明	不明/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	山田平直式	28 16
141	A	M10	SK804	口縁部	IV2a	深鉢	腹で/腹で	隆帯・沈線・刺突	褐色/に灰黄褐色/黄褐色		28 16
142	A	K7	SK346	底部	V8a	深鉢	腹で/腹で	不明	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		28 16
143	A	L5	SK024	口縁部	I3	深鉢	磨消/腹で	押型文	褐色/黄褐色/黄褐色		28 16
144	A	L5	SK024	口縁部	I2	深鉢	磨消/腹で	刺突・刻み	褐色/黄褐色/黄褐色	新式	28 16
145	A	L7	SK041	口縁部	I2	深鉢	磨消/磨消	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/灰黄褐色	新式 灰化物付着(外面)	28 16
146	B	D17	SK686	口縁部	V4	浅鉢	磨消/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色	黒色磨研土器	29 16
147	B	D17	SK778	胴部	II	深鉢	不明/腹で	縄文 RL	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色	北白川1式	29 16
148	B	E17	SK759	口縁部	VI1	不明	磨消/磨消	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色		29 16
149	B	D17	SK527	底部	V8a	深鉢	磨消/磨消	磨消	褐色/に灰黄褐色/灰黄褐色/灰黄褐色		29 16
150	B	D17	SK685	口縁部	V2	浅鉢	磨消/腹で	磨消	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色	縞帯縞直式	29 16
151	B	D17	SK707	胴部	II	深鉢	不明/腹で	縄文 RL	褐色/に灰黄褐色/に灰黄褐色/黄褐色	北白川直直式 灰化物付着(外面)	29 16

第16表 土器観察表(3)

種別	フリ	遺物	部位	分	種類	胴部 (外/内)	文様	胎土	色調(外/内/断面)	備考	図番
152	B	H15	SK909	口縁部	Ⅱb2a	深鉢	襷文・縄文	RL	赤良/灰赤/灰黄緑		29/16
153	B	E16	SK923	口縁部	Ⅱb2a	深鉢	刺突	赤良	灰赤/灰黄緑/灰黄緑		29/16
154	A	M7	V	底部	12	深鉢	条痕/縹	赤良	灰赤/灰赤	縹式	29/17
155	A	一基	V	胴部	12	深鉢	縹	赤良	灰赤/縹/縹	縹式	29/17
156	A	J3d	群瓦	胴部	12	深鉢	条痕/縹	赤良	灰赤/縹/縹	縹式	29/17
157	A	K7d	口縁部	12	深鉢	縹	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	29/17
158	A	証額	TR4	胴部	12	深鉢	条痕/縹	赤良	灰赤/縹	縹式	29/17
159	A	K4d	V	口縁部	12	深鉢	条痕/縹	赤良	灰赤/縹	縹式	29/17
160	A	K4	VI	底部	12	深鉢	縹	赤良	灰赤/縹/縹	縹式	29/17
161	A	一基	V	口縁部	12	深鉢	縹	赤良	灰赤/縹/縹	縹式併行	29/17
162	A	一基	V	口縁部	12	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	29/17
163	A	T4b	I	胴部	11	深鉢	不明/縹	赤良	灰赤/縹/縹	縹式	29/17
164	A	K4	V	胴部	13	深鉢	条痕/縹	赤良	灰赤/縹/縹	縹式	29/17
165	A	K10	V	口縁部	13	深鉢	条痕/縹	赤良	灰赤/縹/縹	縹式	29/17
166	A	K5	V	口縁部	13	深鉢	縹	赤良	縹/縹	縹式	29/17
167	A	K4d	V	口縁部	13	深鉢	縹	赤良	灰赤/縹/縹	縹式	29/17
168	B	E18a	IV	胴部	Ⅱ	深鉢	不明/縹	赤良	灰赤/縹/縹	北白川Ⅱ式	29/17
169	A	K10	IV	口縁部	Ⅱ1	深鉢	縹	赤良	縹/縹/縹	北ⅡC式 突起部分	29/17
170	B	証額	TR1	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	灰赤/縹/縹	縹式	29/17
171	A	K9b	Ⅱ	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹/縹/縹	縹式	29/17
172	A	K9	Ⅱ	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹/縹/縹	縹式	29/17
173	A	M10b	Ⅱ	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹/縹/縹	縹式	29/17
174	A	M8	Ⅱ	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹/縹/縹	縹式	29/17
175	A	L6	IV	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹/縹/縹	縹式	29/17
176	A	M10	IV	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹/縹/縹	縹式	29/17
177	A	M10b	Ⅱ	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹/縹/縹	縹式	29/17
178	A	L7	IV	胴部	Ⅱ2a	深鉢	不明/縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
179	A	L6-7	IV	胴部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
180	A	K9	IV	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	加藤利Ⅱ式	30/17
181	A	L8	IV	胴部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹/縹/縹	縹式	30/17
182	A	L8	IV	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	不明/縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	突起部分	30/17
183	A	M8	IV	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
184	A	M9	IV	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
185	A	K5	TR	口縁部	Ⅱ2a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	30/17
186	B	F15	IV	口縁部	Ⅱ2b	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
187	A	M9c	Ⅱ	胴部	Ⅱ2b	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
188	A	J-K 5-6	IV	口縁部	Ⅱ2b	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
189	A	M7b	Ⅱ	口縁部	Ⅱ2b	深鉢	条痕/縹	赤良	縹/縹/縹	縹式	30/17
190	B	E19	Ⅱ	口縁部	Ⅱ2b	深鉢	条痕/縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
191	A	L7d	IV	胴部	Ⅱ2c	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	30/17
192	A	M8	IV	口縁部	Ⅱ2c	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
193	B	D16	Ⅱ	口縁部	Ⅱ3	巻	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
194	B	証額	TR1	胴部	Ⅱ3	巻	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
195	B	C18	Ⅱ	胴部	Ⅱ3	巻	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
196	A	L5b	Ⅱ	胴部	Ⅱ3c	巻	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
197	B	F15	IV	胴部	Ⅱ3	巻	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
198	B	証額	TR1	胴部	Ⅱ3	巻	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
199	B	A19	Ⅱ	胴部	Ⅱ3	巻	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	30/17
200	B	証額	TR1	口縁部	IV1a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	中津Ⅱ式	30/18
201	A	K8	Ⅱ	口縁部	IV1a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	中津Ⅱ式	30/18
202	A	L8	Ⅱ	口縁部	IV1a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	中津Ⅱ式	30/18
203	A	M12	Ⅱ	口縁部	IV1a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	中津Ⅱ式	30/18
204	A	M8	Ⅱ	口縁部	IV1a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	中津Ⅱ式	30/18
205	A	L7d	Ⅱ	口縁部	IV1a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	中津Ⅱ式	30/18
206	A	C18	Ⅱ	口縁部	IV1a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	中津Ⅱ式	30/18
207	A	J7	Ⅱ	口縁部	IV1a	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	中津Ⅱ式	30/18
208	A	K5	Ⅱ	口縁部	IV1b	不明	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	30/18
209	A	K4d	Ⅱ	胴部	IV1b	不明	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	30/18
210	B	D19	Ⅱ	口縁部	IV1b	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	加藤利Ⅱ式	31/18
211	B	C18	Ⅱ	口縁部	IV1c	注口	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
212	B	C18	Ⅱ	口縁部	IV1c	注口	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
213	B	C18	Ⅱ	口縁部	IV1c	注口	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
214	A	L7	Ⅱ	口縁部	IV1c	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
215	A	L8	IV	口縁部	IV1c	注口	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
216	A	L7	Ⅱ	口縁部	IV1c	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
217	A	M8	Ⅱ	口縁部	IV1c	不明	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
218	A	M8	Ⅱ	口縁部	IV1c	注口	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
219	A	M8	Ⅱ	口縁部	IV1c	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
220	A	C18	Ⅱ	口縁部	IV1c	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
221	B	C18	Ⅱ	口縁部	IV1c	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
222	A	N7	Ⅱ	口縁部	IV1c	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	北白川Ⅱ式	31/18
223	A	J-K4	IV	胴部	IV1d	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	縹式	31/18
224	A	L5	IV	胴部	IV1d	不明	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	加藤利Ⅱ式(北白川Ⅱ式併行)	31/18
225	A	K5d	Ⅱ	口縁部	IV1d	不明	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	加藤利Ⅱ式	31/18
226	A	L5b	Ⅱ	口縁部	IV1d	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	加藤利Ⅱ式	31/18
227	A	L5	IV	底部	IV1d	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	加藤利Ⅱ式	31/18
228	A	L6-7 M7	IV	胴部	IV1d	注口	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	加藤利Ⅱ式	31/18
229	B	F17b	Ⅱ	口縁部	IV1d	深鉢	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	加藤利Ⅱ式 突起部分	31/18
230	A	K5c	Ⅱ	口縁部	IV1d	不明	縹	赤良	縹赤/縹赤/縹赤	加藤利Ⅱ式	31/18

第17表 土器観察表(4)

編號	地区	フリ	遺物	部位	分類	種類	調整 (外付)	文様	胎 子	色調(外/内/断面)	備考	図 番
231	A	L7d	Ⅲ	口縁部	IV1e	不明	腹で/腹で	沈線	密良	灰白/灰白/灰白		31
232	A	K5c	Ⅲ	口縁部	IV1e	不明	腹で/腹で	沈線 RL・輪帯	密良	灰白/灰白/灰白		31
233	A	L6	Ⅲ	口縁部	IV1e	浅鉢	腹で/腹で	縄文 RL	密良	灰白/灰白/灰白		31
234	A	M0d	Ⅲ	口縁部	IV1e	注口	腹で/腹で	縄文 RL・沈線	密良	灰白/灰白/灰白		31
235	A	L6	Ⅲ	口縁部	IV2	浅鉢	腹で/腹で	沈線	密良	灰白/灰白/灰白		31
236	B	F16a	Ⅳ	口縁部	IV2	不明	腹で/腹で	沈線・輪帯・押 引沈線	密良	灰白/灰白/灰白	先住西山Ⅱ式	31
237	A	M7	Ⅳ	口縁部	IV2	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		31
238	A	L7c	Ⅳ	口縁部	IV3	注口	腹で/腹で	沈線	密良	灰白/灰白/灰白		31
239	B	Ⅱ	Ⅲ	口縁部	IV3	浅鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		31
240	B	G14	Ⅲ	口縁部	V2	甕	腹で/腹で	沈線・縄文 RL・筋文	密良	灰白/灰白/灰白		32
241	B	D18	Ⅲ	口縁部	V2	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	炭化物付着(外蓋)	32
242	B	D17	Ⅲ	口縁部	V2	深鉢	腹で/腹で	突帯	密良	灰白/灰白/灰白	水1式併行	32
243	A	L8	Ⅲ	口縁部	V2	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	水1式併行	32
244	B	D19	Ⅲ	口縁部	V3a	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-1様式	32
245	B	D17	Ⅲ	口縁部	V3a	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
246	A	M7	Ⅲ	口縁部	V3a	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
247	B	C18	Ⅲ	口縁部	V3a	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
248	B	D19	Ⅲ	口縁部	V3a	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
249	A	J8	Ⅲ	口縁部	V3b	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
250	A	M9	Ⅲ	口縁部	V3b	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
251	A	M7	Ⅲ	口縁部	V3b	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
252	B	D18	Ⅲ	口縁部	V3b	深鉢	腹で/腹で	割突	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
253	B	D18	Ⅲ	口縁部	V3b	深鉢	腹で/腹で	割突	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
254	A	L5-6	Ⅲ	口縁部	V3b	甕	腹で/腹で	突帯	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
255	A	N8	Ⅲ	口縁部	V3b	甕	腹で/腹で	突帯	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
256	A	N7b	Ⅲ	口縁部	V3b	甕	腹で/腹で	突帯	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
257	B	Ⅱ	Ⅲ	口縁部	V3b	甕	腹で/腹で	突帯	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
258	A	M10	Ⅲ	口縁部	V3b	甕	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
259	A	L5a	Ⅲ	口縁部	V3c	浅鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
260	B	D9b	Ⅲ	口縁部	V3c	浅鉢	腹で/腹で	割突	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
261	A	L5	Ⅲ	口縁部	V3c	浅鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
262	A	K6	Ⅲ	口縁部	V3c	浅鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
263	A	L6	Ⅲ	口縁部	V3c	浅鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	三河Ⅰ-2様式	32
264	B	E16	Ⅲ	口縁部	V4	甕	腹で/腹で	割突	密良	灰白/灰白/灰白	厚層Ⅰ-5様式	32
265	B	D19	Ⅲ	口縁部	VI	不明	腹で/腹で	沈線	密良	灰白/灰白/灰白		32
266	A	L8	Ⅲ	口縁部	VI	不明	腹で/腹で	沈線	密良	灰白/灰白/灰白		32
267	B	D18	Ⅲ	口縁部	VI	不明	腹で/腹で	沈線・割突	密良	灰白/灰白/灰白		32
268	B	D19	Ⅲ	口縁部	VI	不明	腹で/腹で	沈線	密良	灰白/灰白/灰白		32
269	B	F16a	Ⅳ	口縁部	VI	不明	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		32
270	A	J6 SK202	-	VI	不明	-	-	赤線	密良	灰白/灰白/灰白	土製内蓋	32
271	B	D9b	Ⅲ	-	VI	不明	-	無	密良	灰白/灰白/灰白	土製内蓋	32
272	B	D18	Ⅲ	底部	ⅡB3	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
273	B	E16	Ⅲ	底部	ⅡB3	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
274	B	D18	Ⅲ	底部	ⅡB3	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
275	B	C17	Ⅲ	底部	ⅡB2	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
276	A	N8	Ⅳ	底部	ⅡB1	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
277	A	M9	Ⅳ	底部	ⅡB1	深鉢	腹で/腹で	不明	密良	灰白/灰白/灰白		33
278	B	D18	Ⅲ	底部	ⅡB1	深鉢	腹で/腹で	不明	密良	灰白/灰白/灰白		33
279	A	L9	Ⅳ	底部	ⅡB1	深鉢	腹で/腹で	不明	密良	灰白/灰白/灰白		33
280	B	F16	Ⅲ	底部	ⅡB2	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
281	B	B20	Ⅲ	底部	ⅡB2	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
282	A	M9b	Ⅳ	底部	ⅡB1	深鉢	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
283	A	K10	Ⅲ	脚部	土師器 高坪	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
284	B	E16	Ⅲ	脚部	土師器 小型甕	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
285	A	M9c	Ⅱ	胴部	須恵器 回転甕	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白	炭化物付着(内蓋)	33
286	A	一括 I	Ⅱ	底部	須恵器 回転甕	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
287	B	Ⅱ	Ⅱ	底部	須恵器 回転甕	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
288	B	F16a	Ⅲ	底部	山形陶 甕	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
289	B	F16a	Ⅲ	底部	山形陶 甕	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
290	B	F15d	Ⅲ	口縁部	山形陶 甕	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
291	A	M8a	Ⅱ	口縁部	山形陶 甕	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
292	B	D9b	Ⅲ	口縁部	山形陶 甕	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
293	A	M9b	Ⅲ	口縁部	天目 茶碗	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
294	A	Ⅱ	Ⅰ	口縁部	片口鉢	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
295	A	一括 I	Ⅰ	底部	陶甕	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33
296	A	K10c	Ⅱ	胴部	白磁	無	腹で/腹で	無	密良	灰白/灰白/灰白		33

第18表 石鑑観察表

観覧 番号	地区	グリッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	基部 備考	尖頭 備考	刃部 備考	図 版	写 真
297	A	K9	S8001	黒曜石	122	153	(2.6)	(0.4)	A	5		34	21
298	B	H14	S2007	下呂石	255	163	4.0	(1.4)	A	2		34	21
299	A	L8-9	SK074	黒曜石	143	120	2.8	(0.3)	A	2		34	21
300	A	L9	SK084	黒曜石	188	127	2.2	(0.5)	A	2		34	21
301	A	K6	SK127	チャート	225	159	(4.0)	(1.7)	B	2		34	21
302	A	L7	SK139	下呂石	116	127	1.6	(0.3)	A	5		34	21
303	A	J5	SK197	黒曜石	120	132	(2.6)	(0.4)	A	5		34	21
304	A	J5	SK197	チャート	192	134	(4.9)	(1.4)	A	5	未製図	34	21
305	A	L6	SK205	下呂石	220	120	(2.5)	(0.7)	A	2		34	21
306	A	J-K8	SK239	安山岩	140	128	3.0	0.4	A	2		34	21
307	A	K8-9	SK251	黒曜石	233	117	2.5	(0.4)	A	2		34	21
308	A	K8-9	SK251	下呂石	225	123	(3.2)	(0.8)	E	2		34	21
309	A	L9	SK261	チャート	244	164	(3.1)	(1.2)	A	5		34	21
310	A	L9	SK261	黒曜石	189	147	3.1	(0.6)	A	2		34	21
311	A	L9	SK261	黒曜石	104	(3.0)	(2.1)	(0.2)	A	5		34	21
312	A	L9	SK261	黒曜石	187	(9.2)	2.2	(0.3)	E	3		34	21
313	A	L9	SK277	黒曜石	159	(9.5)	(3.1)	(0.5)	B	2		34	21
314	A	L11	SK319	石炭	197	(1.4)	(4.8)	(0.9)	A	2		34	21
315	A	L5	SK205	下呂石	127	105	3.1	(0.4)	D	4		34	21
316	A	M7	SK347	チャート	122	120	(2.3)	(0.3)	A	2		34	21
317	A	J7	SK471	下呂石	127	113	2.3	(0.3)	A	5		34	21
318	A	K-J6	SK488	黒曜石	244	139	3.8	(0.9)	A	1		34	21
319	B	D18	SK581	チャート	282	207	12.8	(6.0)	C	2		34	21
320	B	D16	SK527	下呂石	241	168	4.9	(1.5)	D	4		34	21
321	A	M10	SK804	黒曜石	128	(9.7)	(2.1)	(0.2)	A	5		34	21
322	A	L5	SK003	黒曜石	149	121	(1.9)	(0.3)	A	5		34	21
323	A	K3b	V	チャート	225	141	4.4	(1.1)	A	1		34	21
324	A	K7c	IV	黒曜石	(9.3)	(9.1)	1.2	(0.1)	A	2		34	21
325	A	M8c	IV	石炭	168	113	(3.4)	(0.6)	A	1		34	21
326	A	K8d	III	黒曜石	167	117	2.3	0.4	A	3		34	21
327	A	M7b	III	チャート	180	107	(2.2)	(0.3)	A	3		34	21
328	A	M8d	III	チャート	258	147	3.5	(0.9)	A	3		34	21
329	A	K7b	III	黒曜石	132	112	(1.6)	(0.1)	D	2		34	21
330	B	D18c	III	下呂石	185	146	2.6	(0.7)	D	4		34	21
331	B	D18b	III	チャート	178	127	4.7	(0.8)	D	2		34	21

第19表 石鑑観察表

観覧 番号	地区	グリッド	遺構 層位	石材	全体		断面		質量 (g)	形 備考	断面 備考	図 版	写 真			
					長さ (mm)	幅 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)								
332	A	K7	SK458	徳島 島原 安山岩	40.7	13.4	8.2	15.5	6.3	2.8	3.5	1	三角	35	22	
333	A	J6	SK466	下呂石	30.0	9.0	7.0	3.8	5.0	4.2	1.7	3b	1	円形	35	22
334	A	M8	SK342	チャート	30.7	8.0	15.8	9.5	6.8	5.7	2.9	2a	1	円形	35	22
335	B	D16c	III	下呂石	20.7	11.4	4.0	7.5	5.0	3.2	0.7	1	1	円形	35	22
336	A	M8d	III	チャート	28.0	12.6	6.5	4.0	4.5	2.7	1.9	2b	1	六角	35	22
337	B	D18b	III	チャート	26.4	10.0	7.4	11.4	9.0	4.8	1.9	3b	1	円形	35	22
338	A	K8d	IV	黒曜石	35.2	11.0	6.5	8.0	7.0	6.2	2.7	2b	1	円形	35	22

第20表 スクレイパー観察表

観覧 番号	地区	グリッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	素材	調整	刃部 備考	図 版	写 真	
339	A	K-L 45	SK199	チャート	31.3	13.1	7.9	3.6	縦長	両面	削面	削面	35	22
340	A	K7	SK402	下呂石	33.9	26.9	8.1	6.9	縦長	両面	削面	削面	35	22
341	A	L8	SK226	徳島 島原 安山岩	31.4	37.8	6.7	7.9	横長	両面	下掘	削面	35	22
342	A	K8-9	SK251	チャート	36.4	38.0	8.3	12.2	横長	両面	削面	削面	35	22
343	B	H15	SK917	チャート	27.3	35.2	7.6	9.3	横長	両面	下掘	削面	35	22
344	A	中央	III	チャート	23.0	24.5	7.5	4.5	縦長	両面	削面	削面	35	22
345	A	L10a	III	下呂石	41.5	27.1	6.1	7.0	縦長	両面	削面	削面	35	22
346	B	E17	IV	安山岩	69.1	50.1	10.0	44.6	縦長	両面	削面	削面	35	22
347	B	F15b	III	淡灰 岩質 滑岩	(44.7)	17.4	9.4	(9.9)	縦長	両面	削面	削面	35	22

第21表 粗製刃器観察表

観覧 番号	地区	グリッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	備考	図 版	写 真
348	A	L11a	III	ドレライト	47.9	100.3	11.5	61.9		36	22
349	B	C18c	III	ホルンフェルス	61.4	39.9	6.8	22.7		36	22

第22表 楔形石器観察表

観覧 番号	地区	グリッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	潰れ (対)	備考	図 版	写 真
350	A	L9	SK261	黒曜石	30.1	22.2	17.2	8.1	2		36	22
351	B	G14d	III	下呂石	36.4	18.4	12.8	8.2	1		36	22
352	A	L8	SK226	黒曜石	20.3	14.6	11.3	3.4	2		36	22
353	A	J4a	粘土	黒曜石	43.7	19.3	13.1	11.6	1		36	22
354	A	L7a	IV	安山岩	71.8	39.3	17.7	73.9	1	壊損	36	22

第23表 RF観察表

観覧 番号	地区	グリッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	素材	備考	図 版	写 真
355	B	C17	IV	黒曜石	29.8	19.0	8.5	4.3	縦長		36	23
356	A	K7b	IV	黒曜石	30.5	23.5	12.8	6.5	縦長		36	23
357	A	L9	SK187	黒曜石	17.1	21.7	6.7	2.7	横長		36	23

第24表 UF観察表

観覧 番号	地区	グリッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	素材	備考	図 版	写 真
358	A	K9	S8001	チャート	29.3	31.8	7.6	6.6	横長		36	23
359	A	K4	SK173	黒曜石	46.4	34.3	12.3	13.0	縦長		36	23
360	B	A19	III	黒曜石	27.2	12.0	3.3	0.9	縦長		36	23
361	B	F15c	III	チャート	24.0	12.5	6.0	1.8	縦長		36	23

第25表 安山岩製石器観察表

観覧 番号	地区	グリッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	調整	備考	図 版	写 真
362	A	K9	S8001	安山岩	61.8	62.8	23.0	93.8	2		37	23
363	A	L8	SK226	安山岩	43.5	63.3	11.0	32.7	3		37	23
364	A	K8-9	SK251	安山岩	70.0	82.5	22.0	127.6	1		37	23
365	A	L11	SK319	安山岩	59.4	62.8	13.8	41.9	2		37	23
366	A	M10	SK813	安山岩	167.0	54.5	19.0	215.6	3		37	23
367	A	J5	SK002	安山岩	70.0	48.8	11.0	49.0	2		37	23
368	A	J4d	IV	安山岩	47.8	75.0	18.0	54.9	1		37	23
369	A	一落	V	安山岩	53.0	99.5	17.0	98.2	2		37	23
370	A	一落	V	安山岩	98.8	79.8	38.0	281.6	1		37	23
371	B	C18d	III	安山岩	115.0	85.0	57.5	669.0	1		37	23

第26表 打製石斧観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	形態	備考	図 版 図 録
372	A	K4b	SK011	安山岩	863	440	141	71.8	1	39 24
373	A	L9	SK261	安山岩	413	342	146	26.7	2	39 24
374	A	KS-6	IV	安山岩	725	298	12.6	38.1	1	39 24
375	A	M8	SK416	安山岩	894	42.4	15.7	81.8	2	39 24
376	A	J6	SK466	安山岩	165.5	70.0	22.0	330.1	2	39 24
377	A	LSa	III	安山岩	1145	39.1	13.9	84.0	1	39 24
378	A	L6a	III	安山岩	842	35.2	18.0	69.9	1	39 24
379	A	M9b	III	結晶片岩	108.8	53.3	17.9	167.8	1	39 24
380	A	M8b	III	安山岩	862	50.5	17.0	103.7	1	39 24
381	A	M9c	III	安山岩	125.5	59.5	25.4	181.2	2	39 24
382	A	LSb	IV	安山岩	1095	40.5	11.5	75.0	1	39 24
383	B	E16c	III	結晶片岩	179.5	81.5	25.2	527.7	1	39 24

第27表 磨製石斧観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	形態	備考	写 真 図 録
384	A	M8	SK079	フリント	48.0	40.5	18.0	61.2	2	39 23
385	A	J6c	SK001	蛇紋岩	83.0	27.0	5.8	22.7	2	39 23
386	A	K9	S8001	凝灰岩	65.0	17.0	6.0	15.1	2	39 23
387	A	M7	SK347	蛇紋岩	70.0	32.0	10.0	37.6	1	39 23
388	A	K7a	IV	凝灰岩	844	38.5	20.5	120.7	2	39 23
389	A	M9b	III	蛇紋岩	340	27.0	9.5	15.4	2	39 23

第28表 切目石錘観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	折 損	備考	図 版 図 録	
390	A	J4	SK004	凝灰岩	65.7	41.5	15.6	60.3	a	39 25	
391	A	K6	SK121	結晶片岩	69.0	15.5	8.0	12.8	d	39 25	
392	A	K4	SK199	結晶片岩	76.9	51.5	20.6	118.0	a	39 25	
393	A	L8	SK226	結晶片岩	51.5	36.3	21.2	61.2	-	上端打欠	39 25
394	A	J6d	IV	結晶片岩	52.8	30.2	12.1	29.2	-	-	39 25
395	A	L6b	III	凝灰岩 凝灰岩	56.5	18.1	17.3	23.7	c	有溝石錘	39 25

第29表 打欠石錘観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	折 損	備考	図 版 図 録
396	A	L10	SK300	結晶片岩	43.0	37.5	15.4	35.4	-	39 25
397	A	L7	IV	安山岩	45.5	38.5	17.0	49.2	-	39 25
398	A	L8c	IV	結晶片岩	46.0	44.0	19.0	50.1	-	39 25
399	A	L7d	IV	結晶片岩	88.0	45.0	15.0	79.3	-	39 25
400	A	L10c	IV	安山岩	47.5	31.5	17.5	34.6	-	39 25

第30表 磨石類観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	使用痕	図 版 図 録	
401	A	J-K8	SK239	花こう岩	109.0	72.5	53.8	611.1	凹み	40 25
402	A	K7	SK467	花こう岩	118.0	87.0	47.3	507.7	凹み	40 25
403	A	M9	IV	砂岩	87.5	82.5	51.7	550.8	凹+磨	40 25
404	B	D16c	III	花こう岩	92.5	104.5	39.0	574.6	凹み	40 25
405	A	M7b	IV	砂岩	107.5	102.5	44.3	748.0	凹+磨	40 25
406	B	E17b	SK759	花こう岩	80.4	34.2	34.6	140.5	叩き痕	40 25

第31表 砥石観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	備考	図 版 図 録	
407	A	M9c	III	砂岩	63.1	39.2	27.4	45.3		40 26

第32表 石製品観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	備考	図 版 図 録	
408	A	L8	SK226	砂岩	33.6	13.6	5.4	3.9	石製品	40 26

第33表 石核観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	備考	図 版 図 録	
409	A	K4	SK173	黒曜石	52.5	43.0	27.0	52.9	打面: 4 作業面: 7	41 26
410	A	K89	SK302	黒曜石	44.0	35.2	15.5	16.1	打面: 3 作業面: 6	41 26

第34表 垂飾観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	備考	図 版 図 録	
411	A	L8	SK827	ヒスイ	35.5	20.0	17.0	20.4	垂飾	41 26

第35表 石棒・石剣観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	備考	図 版 図 録	
412	A	K7b	III	結晶片岩	80.0	25.8	24.0	34.0	石棒	41 26
413	A	M8b	IV	結晶片岩	55.8	21.5	17.0	69.4	石棒	41 26
414	A	M9c	III	結晶片岩	100.5	46.5	21.5	158.4	石剣	41 26

第36表 石皿観察表

採集 地区	グリ ッド	遺構 層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (kg)	備考	図 版 図 録	
415	A	K-L 7-8	SK443	花こう岩	57.3	40.4	12.1	41.8		42 26
416	A	K7c	III	花こう岩	31.3	34.2	9.7	13.3		42 26

第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

採取された炭化材及び土器付着炭化物の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。炭化材は2点あり、1点は竪穴住居跡（SB001）内のものであり、もう1点は土坑（SK807）内のものである。SB001には年代を示す遺物が少ないため、年代（古墳時代前期）を確認するために行った。また、SK807は同じような土坑が複数あり、それらから出土した遺物が示す年代（縄文時代中期末～後期初頭）との整合性を確かめた。また、土器付着炭化物については、弥生時代初頭と思われる土器棺墓を構成する土器の中から、採取した3点を使用し、土器による年代との整合性を確かめた。分析は山形秀樹（パレオ・ラボ）が担当した。

2. 試料と方法

試料は、SB001中央部から採取した炭化材（クリ）1点、SK807より採取した炭化材（カエデ属）1点、SZ003棺身土器片（9：図版17）の外側から採取した付着物1点、SZ004中蓋土器片（12：図版18）の外側から採取した付着物1点、SZ002棺身土器片（6：図版15）の外側から採取した付着物1点の併せて5点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定した ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

第37表に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値 -25.0% ）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値（yrBP）の算出は、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、次の通りである。

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用し

た。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

結果に関しては第37表のとおりである。試料4点のうち2点については比較試料とほぼ整合する結果であったが、他の2点については下に述べる。

SK807の炭化材については、他の土坑から出土した土器型式の年代とは整合的でなく、かなり古い値が出ている。

SZ003棺身の土器は斜方向と横方向の条痕調整を組み合わせ、羽状にも見えるためSZ002、SZ004の土器よりも時期的に新しく、檜王式から水神平式への移行過程とも考えられたが、年代測定の結果では逆に時期が遡る結果となっている。

引用文献

中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』3-20p.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. 1993 「Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program」『Radiocarbon, 35, p.215-230

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. 1998 「INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP」『Radiocarbon, 40, p.1041-1083

第37表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{POB}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-2314 (AMS)	炭化材 (クワ) SB001中央部	-26.0	1,760 \pm 40	cal AD 255 cal AD 300 cal AD 320	<u>cal AD 235 - 340(98.9%)</u>
PLD-2337 (AMS)	土器付着物 SZ003 棺身	-24.5	2,775 \pm 30	cal BC 915	<u>cal BC 970 - 955(17.8%)</u> <u>cal BC 940 - 895(58.8%)</u> <u>cal BC 875 - 860(16.6%)</u>
PLD-2338 (AMS)	土器付着物 SZ004 中蓋	-25.5	2,505 \pm 30	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 610 cal BC 595	<u>cal BC 685 - 655(17.8%)</u> <u>cal BC 650 - 540(77.7%)</u>
PLD-2339 (AMS)	土器付着物 SZ002 棺身	-24.4	2,440 \pm 30	cal BC 520 cal BC 455 cal BC 435	<u>cal BC 755 - 715(23.1%)</u> <u>cal BC 540 - 480(37.3%)</u> <u>cal BC 470 - 410(35.4%)</u>
PLD-2445 (AMS)	炭化材 (カエデ屑) SK807	-23.9	4,675 \pm 30	cal BC 3,500 cal BC 3,435 cal BC 3,380	<u>cal BC 3,515 - 3,495(22.4%)</u> <u>cal BC 3,470 - 3,405(67.0%)</u> <u>cal BC 3,385 - 3,375(10.7%)</u>

第2節 土器の赤色顔料分析

1. はじめに

外面に赤色顔料が認められる縄文時代の土器が12点出土した。12点の赤色顔料付着土器のうち、9点を図示し、器種と時期が明確なもの4点を分析した。赤色顔料のうち、水銀は特定地域からの搬入要素を強く示すので興味深い対象である。ここでは、X線分析顕微鏡を用いた元素マッピング分析及びポイント分析を行った。分析は、藤根久（バレオ・ラボ）が担当した。

2. 試料と方法

各試料は、最も赤味の強い部分についてポイント分析を行った（第14図）。なお、試料 No.3の土器は、ポイント分析により水銀が確認されたため、土器全体について元素マッピング分析を行った。

測定は、株式会社製作所製 XGT-5000TypeIIを用いた。ポイント測定は、X線導管径100 μ m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。定量計算は、標準試料を用いないFP法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。試料 No.3外側面の元素マッピング分析は、X線導管径100 μ m、電圧50KV、測定時間は3,000秒である。

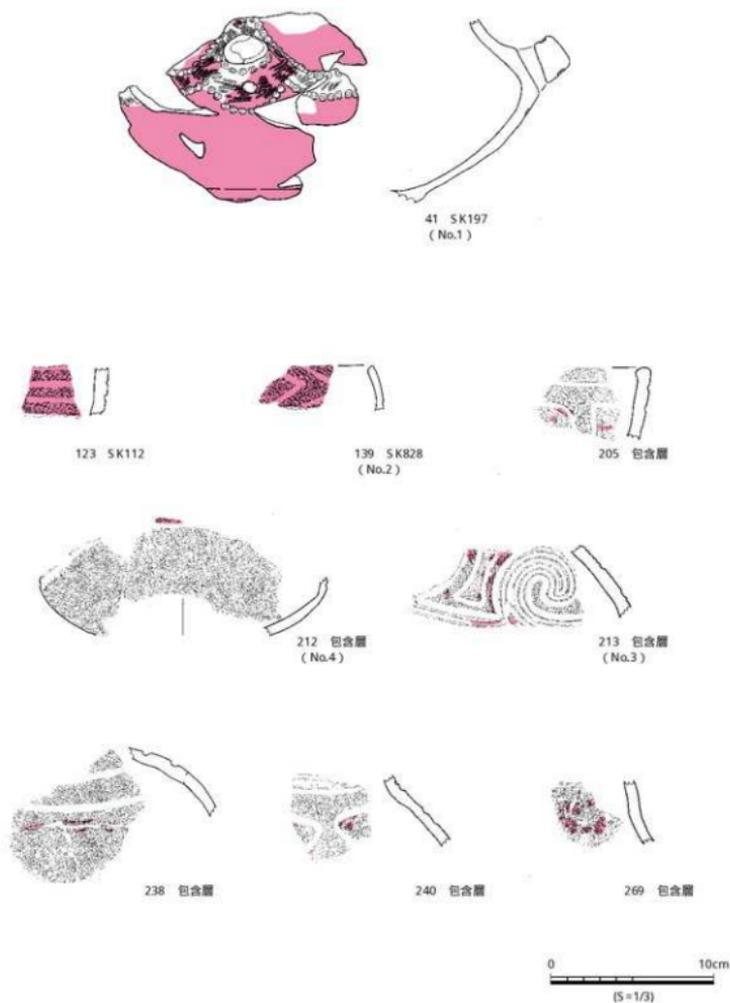
3. 結果及び考察

各土器について最も赤味の強い部分のポイント分析を行った結果、試料 No.2と No.4では鉄（ Fe_2O_3 ）が高率で検出された。半定量分析では、試料 No.2が最大19.25%、試料 No.4が最大39.39%それぞれ含まれていた（第38表）。一方、試料 No.1と No.3では、水銀（ HgO ）が明瞭に検出され、最も赤味の強い場所では、No.1が最大38.60%、No.3が最大7.87%含まれていた（第38表）。

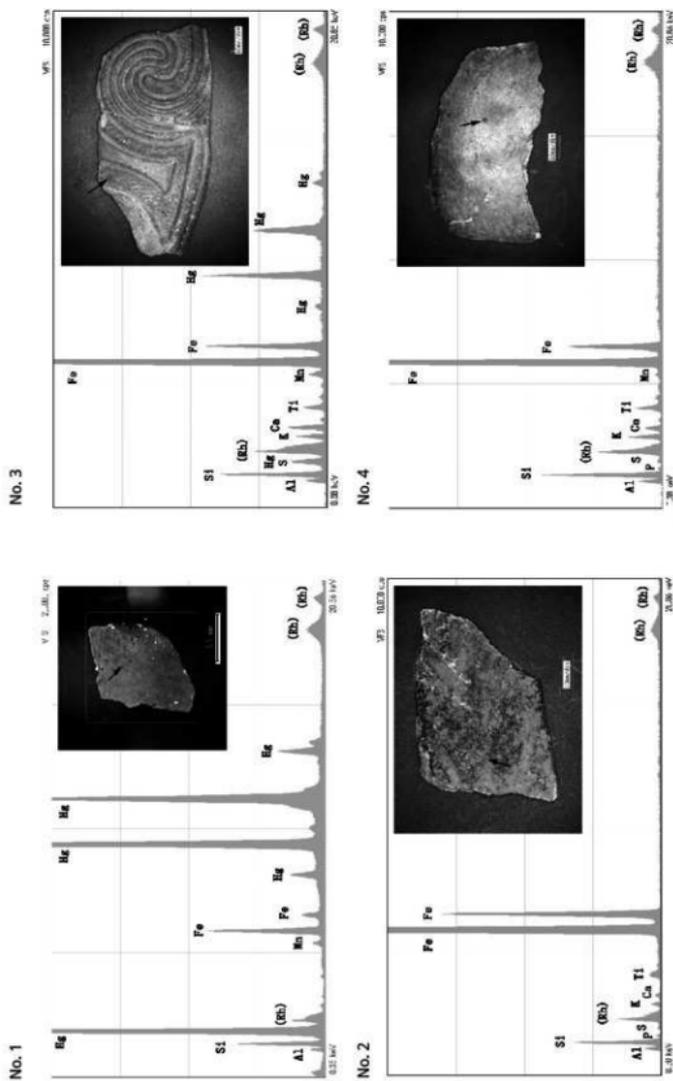
この試料 No.3について元素マッピング分析を行った結果、特定の場所において分布することが理解される。また、辰砂（硫化水銀 HgS ）を反映してイオウ S が水銀と調和的に分布する（第15図）。なお、ポイント分析において鉄が19.73%と高い含有量を示すことから、ベンガラ材料も混入している可能性が高い。一方、No.1は鉄が3.31%と低いことからベンガラは含まれていないと考える。

第38表 土器赤色顔料の蛍光X線分析結果（半定量分析；FP法）※分析数値は%

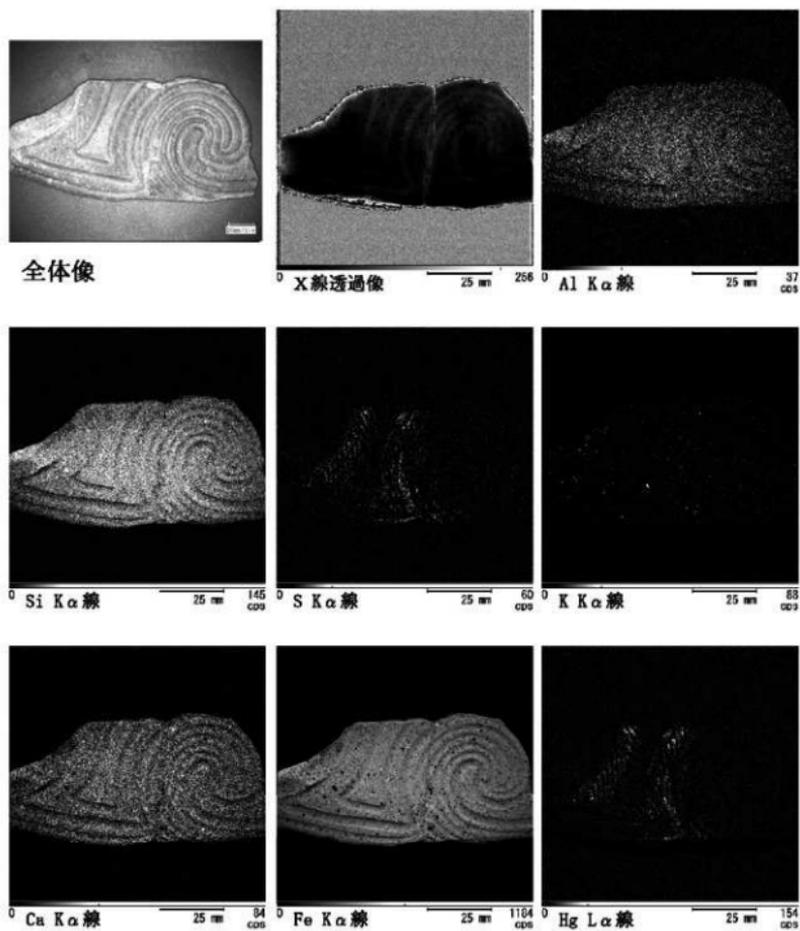
No.	掲載	器種	出土地点	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	HgO	合計	顔料の成分
1	41	双耳壺	SK197	8.22	25.71	0.00	23.05	0.44	0.18	0.22	0.26	3.31	38.60	99.99	水銀朱
2	139	鉢	SK828	14.71	57.44	1.27	0.86	3.36	1.45	1.60	0.04	19.25	0.00	99.98	ベンガラ
3	213	注口土器	C18-III	16.44	44.33	0.37	2.99	2.82	3.65	1.51	0.29	19.73	7.87	100.00	水銀朱 (ベンガラを含む)
4	212	注口土器	C18-III	14.96	42.31	1.16	0.46	0.84	0.33	0.53	0.01	39.39	0.00	99.99	ベンガラ



第13図 赤色顔料付着土器



第14図 土器赤色顔料の蛍光X線スペクトル図（矢印のポイントは測定位置を示す）



第15図 試料No.3の元素マッピング図

第3節 黒曜石製石器の原産地推定

1. はじめに

黒曜石製の石器が多く出土した。この黒曜石製の石器を赤褐色の部分があるものとなないもの、不純物の混入の多いものと少ないものに肉眼観察によって分類し、それぞれ石核と剥片、計4点を抽出した。これら石器について蛍光X線分析計を用いた黒曜石の産地推定の検討を行った。分析は藤根久(パレオ・ラボ)が担当した。

2. 試料と方法

試料は、黒曜石製石器4試料である(第39表)。試料は、精製水で超音波洗浄を行い、試料表面に付着する土壌等の汚れを除去した。

測定は、セイコー電子工業㈱製の卓上型蛍光X線分析計SEA-2001Lによって行った。X線管球はロジウム(Rh)ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、電圧50KV、測定時間300秒、照射径10mm、電流自動設定、測定室真空である。測定した元素は、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素である。各元素は、定量計算は行わずX線強度(cps)のみ測定した。

黒曜石の産地推定は、望月(1999)が示した蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定の判別図法と同様の方法を用いた。

主成分元素のカリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)と微量元素のルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素を蛍光X線分析で測定し、各元素のX線強度(cps)から以下に示す指標値を計算する。

- 1) .Rb分率 = $Rb \times 100 / (Rb + Sr + Y + Zr)$
- 2) .Sr分率 = $Sr \times 100 / (Rb + Sr + Y + Zr)$
- 3) .Mn $\times 100 / Fe$
- 4) .log(FeK)

これら指標値を用いた2種類の判別図(横軸 Rb分率- 縦軸 Mn $\times 100 / Fe$ の判別図と横軸 Sr分率- 縦軸 log(FeK)の判別図)を作成し、日本各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定した。判別図に用いる黒曜石原産地及び判別群名称は第40表に示す。判別群名称は望月(2002)などを参考にした。

3. 結果

第39表に、黒曜石製石器について蛍光X線分析を行った各元素のX線強度(cps)と計算による指標値を示す。また、第16図には主な黒曜石原石の測定による指標値をプロットした判別図を示す。各判別群で重複している箇所があるため各判別群を楕円で示す。なお、第40表には主な黒曜石の原産地リストを示す。

第39表 黒曜石製石器の元素強度(cps)と計算された指標値及び原産地推定結果

No	器種	掲載取上番号	濃 縮	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn $\times 100 / Fe$	Sr分率	log(FeK)	原産地推定	
1	石核	409	2726	SK173	26.527	4.309	48.484	8.745	2.365	3.136	5.894	43.421	8.887	11.743	0.262	諏訪星ヶ台群
2	石核	410	6612	SK302	27.232	4.000	47.100	9.016	2.950	3.084	6.688	41.476	8.493	13.571	0.238	諏訪星ヶ台群
3	剥片	9296-2	SK226	25.232	5.662	50.211	15.525	0.597	6.222	6.872	53.141	11.277	2.042	0.299	和田小深沢群 または黒山群	
4	剥片	3021	SK557	28.878	4.815	51.132	9.384	3.309	3.474	7.348	39.906	9.417	14.072	0.248	諏訪星ヶ台群	

第16図の左図では、試料 No.3が鷹山群 (WDTY) または小深沢群 (WDKB) に分布し、右図では土屋橋西群 (WDTN) または小深沢群 (WDKB) あるいは鷹山群 (WDTY) に近い位置に分布する。このことから、試料 No.3の石器は鷹山群または小深沢群の黒曜石と推定される。

一方、その他の試料では、左図及び右図において星ヶ台群 (SWHD) の構内内に分布している。このことから、これら石器は、星ヶ台群の黒曜石と推定される。

第40表 黒曜石原産地の判別群名称 (望月、2002参考)

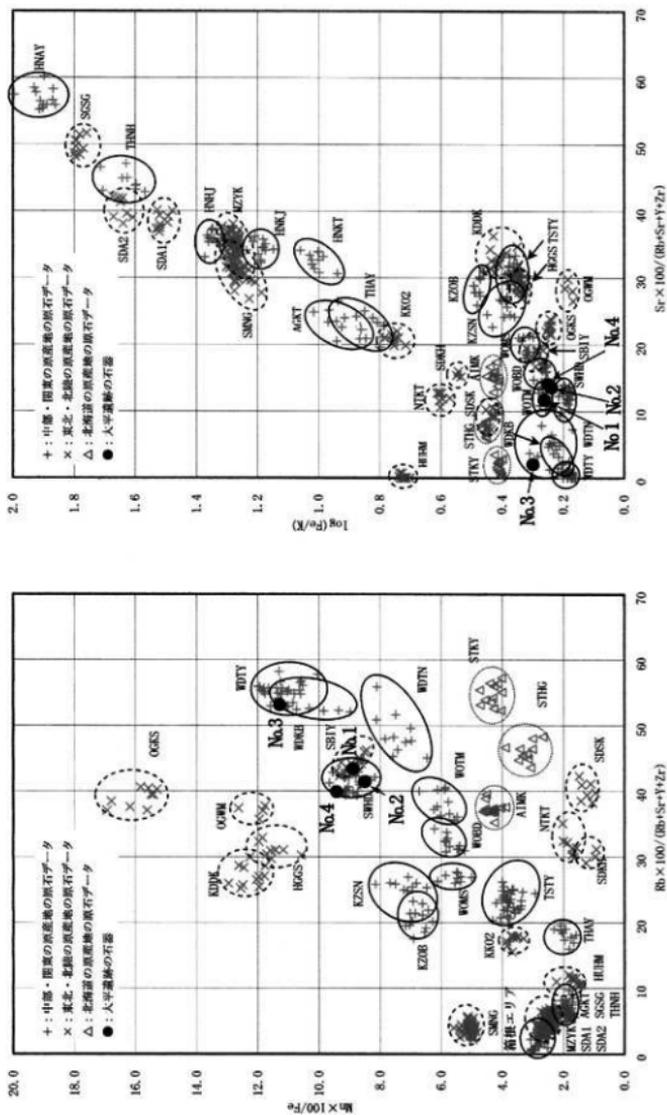
都道府県	エリア	判別群	記号	原石採取地
北海道	白滝	八号沢群	STHG	
		黒曜の沢群	STKY	
	赤井川	曲川群	AIMK	
青森	木造	出来島群	KDDK	出来島
	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜
秋田	男鹿	金ヶ崎群	OGK5	金ヶ崎温泉、阪本海岸
		阪本群	OGWM	阪本海岸
岩手	北上川	北上折戻2群	KK02	北上川
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前
	新津	金津群	NTKT	金津
新潟	新発田	板山群	SBIY	板山牧場
		真光寺群	SD5K	真光寺山
	佐渡	金井二ツ坂群	SDKH	二ツ坂
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	湯ノ倉
	色麻	根岸群	SMNG	根岸
	仙台	秋保1群	SDA1	土蔵
		秋保2群	SDA2	土蔵
	塩釜	塩釜群	SGSG	塩釜
栃木	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢
		七島沢群	THNH	七島沢、富川
長野	和田 (WD)	鷹山群	WDTY	鷹山、東御屋
		小深沢群	WDKB	小深沢
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋西
		ぶどう沢群	WOBD	ぶどう沢
	和田 (WO)	牧ヶ沢群	WOMS	牧ヶ沢下
		高松沢群	WOTM	高松沢
		諏訪	星ヶ台群	SWHD
茅科	冷山群	TS1Y	冷山、菱草峠、菱草峠東	
神奈川	箱根	芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯
		畑原群	HNHJ	畑原
		野合原群	HNKJ	野合原
静岡	天城	上多賀群	HNKT	上多賀
		柏峠群	AGKT	柏峠
東京	神津島	黒船島群	KZOB	黒船島
		砂樋崎群	KZSN	砂樋崎

4. 考察

今回、黒曜石の産地推定を行ったのは、黒曜石が多く出土したこととともに、赤褐色の部分をもつ黒曜石が存在し、産地が大きく異なる複数箇所の可能性が考えられたためである。蛍光X線分析による産地推定を行ったところ、和田及び諏訪の黒曜石と推定され、いずれも長野県からの流入品であることが分かった。

引用文献

- 望月明彦・堤 隆 1996 「黒曜石の産地推定による南関東の細石刃文化の研究 (I)」『日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集』p.112-113
- 望月明彦 1999 「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 - 上和田城山遺跡篇 -』大和市教育委員会、p.172-179
- 望月明彦 2002 「茅野市馬捨場遺跡出土黒曜石製石器の産地推定」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書58、広域営団地農道整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書 - 茅野市内 -、馬捨場遺跡』長野県埋蔵文化財センター、p.149-158



第16図 黒曜石の産地判別図 (試料は黒丸で示す)

第6章 考察 まとめ

今回の調査では、縄文時代早期末・中期末～後期前葉の土坑や石組み遺構及び埋設土器、弥生時代初頭の土器棺墓、古墳時代前期の竪穴住居跡を確認した。また、遺物では縄文時代早期から近世陶器までの土器類や黒曜石・下呂石などの石材を使用した石器など、多量ではないが長い時期に渉る多くの種類の遺物が出土した。このことは当遺跡が永年に渉って生活が営まれてきたことを表している。

ここでは遺構や遺物について検出した順に大きく3つの観点で今回の調査成果をまとめ、考察することにした。

1 弥生時代初頭の土器棺墓について

今回の調査で検出した土器棺墓はA区2基、B区2基の合計4基である。検出数が少ない上、土器棺墓以外に住居跡等、性格が明確な遺構が検出できなかったので集落域と墓域との関係、墓域の全体像についてはつかむことができなかった。しかしながら個々の土器棺墓に目を向けるとそれぞれ違った様相が見られるため、構成する土器及び埋設方法に着目してまとめてみる。

A区検出の2基(SZ002・SZ004)は構成する土器すべてに粗い条痕調整が施されている。包含層出土で同じタイプの土器片(図版32:252・253)は口唇部に貝殻の腹縁で施された刺突が観察できる(写真3・4)が、そこから三河湾沿岸部で採取したと思われるハイガイを原体として使用したと考えられる。口縁端部に面取りを施すことからそれらの土器は三河I-2様式で榎王式に該当し、矢作川流域の影響を受けたものであると言える。埋設方法はSZ002が棺身とした深鉢を斜位に置き、別の2個体の破片で蓋をする方法、SZ004が壺の大破片を棺身とし、別の2個体の深鉢の破片で蓋するという、三河地方におけるこの時期の典型的な土器棺墓の形態である。

B区の2基(SZ003・SZ007)はA区の2基と様相を異にする。SZ007は調整についてはA区の2基と類似しているが、SZ003については棺身がサルボウ、棺蓋が二叉状工具を使用するという三河地方でも豊川流域に見られる調整を施す。棺身の土器(図版17:9)は斜方向と横方向の調整を組み合わせ、羽状にも見えるため水神平式への移行過程とも考えられたが、自然科学分析の結果A区の土器棺よりも時期が遡る結果となっている。さらに埋設方法ではどちらも棺身を立位にする方法で縄文晩期末の埋設土器にも似た形態であり、したがってこれら2基の土器棺は大平遺跡においては土器棺墓が形成され始めた初期の段階のものではないかと考えられる。



写真3 口唇部刺突 (252)



写真4 口唇部刺突 (253)

2 縄文時代の土坑及び遺物について

(1) 土坑の形態と性格について

縄文時代の土坑で長軸が1mを超え、埋土に遺物や礫を多く含む大型土坑はA区の第1・第2検出面で23基検出した。A区の北側は地形的に高く、表土を掘削した時点でV層が露出したため、便宜上第1検出面として扱ったが、層位的には第2検出面と対応する。

これらの土坑の性格についてであるが、貯蔵穴の可能性も否めないが、埋土の堆積の様子や埋土に含まれるものから墓の可能性のある土坑と判断した。

いずれの土坑もまとまった人骨は出土していないが、SK203・SK205・SK207・SK251・SK347・SK416・SK443からは骨片と思われる石灰質の細片が出土している。また、SK325・SK347・SK345・SK416・SK456・SK443には層的に焼土が入り込んでおり、土坑の中若しくは近辺で火を使った痕跡が残されている。SK443では何層かに分けて礫を投げ込んでいるが、他のほとんどの土坑でも礫が人為的に据えられたり投げ込まれたりしているところが特徴的である。

SK197からは水銀朱が塗られた後期前葉（中津式）の双耳壺が礫とともに出土しているが、愛知県東加茂郡稲武町のクダリヤマ遺跡でも同様に礫とともに中期末の双耳壺が出土している例もあり、これらの土器は副葬品と考えられる。また、SK807出土のヒスイ製垂飾も同様の意味合いを持つものと考えられる。

これら23基の土坑はSK207とSK345・SK466・SK471、SK251とSK325を除いて切り合うことなく調査区全体に広がっている。さらに出土遺物からも時期に差はなく、ほとんどが同時期に構築されたものばかりであると言えよう。調査区を中心、北東方向に軸を持って一連の土坑が並んでいるように見えるが、この時期の平坦面は非常に狭い範囲であり、これらが環状になるとは考えにくい。中心の軸に対して垂直方向に並ぶ土坑もあり、方形の区画を意図して配置されていると考えられる。

(2) 主な遺構出土の遺物について

縄文時代の遺構に伴う土器は第1・第2検出面では主に第Ⅲ群・第Ⅳ群、第3検出面では第Ⅰ群が対応する。第Ⅰ群は早期の遺物でわずかに細久保式・穂谷式が入るが、ほとんどが粕畑式・茅山下層式など早期後半条痕文系土器に該当する。出土した土器の中心は第1・第2検出面の第Ⅲ群・第Ⅳ群の土器で、その中でも特に第Ⅲ群では2類b、第Ⅳ群では1類aが突出している。

第Ⅲ群2類bの土器は、曾利式に該当するものが2点あるが、ほとんどが条線・沈線のみ施される粗製の深鉢である。口縁部付近から縦方向へ垂直若しくは斜方向に櫛状の工具で条線を引くタイプのもが目立っている。既存の型式に該当するものではないが、第Ⅳ群の土器とは胎土が違いため、中期末と位置つけた。第Ⅳ群1類aは2点福田KⅡ式を含むが、大半は中津式に該当するものである。



第17図 大型土坑配置図

この2種類の土器は、前述した土坑から多く出土しているが、いずれも第41表にあるように比率に多少の差はあるものの、同じ土坑から同時に出土する傾向にある。

中津式でも沈線が内面に押し出されるように施文されている(58・60; 写真図版12)ものは中期末にもみられる。またSK251のように磨消縄文が確立しないものと完成されたものが混在する例から考えると、中期末から後期初頭のきわめて短い期間に位置づけられる土器群であると考えられる。

第41表 分類別土坑出土遺物点数(接合後)

	SK197	SK207	SK226	SK251	SK261	SK466	SK443
Ⅲ群2類b	6	4	10	3	13	2	128
Ⅳ群1類a	8	9	52	12	8	8	16

3 石器について

(1) 石器全体について

今回出土した石器2,544点の中で、剥片類を除いたものは625点であった。その中でも一番出土量の多かったものは石鏃で、次いで打製石斧・安山岩製礫器であった。これら出土した石器の組成から大平遺跡の土地利用の様相を読み取ることができる。

まず、石鏃についてであるが、製作途中の段階と思われる未製品の点数は出土点数191点に対し57点であり、約三分の一、高い割合を占める。また、主に石鏃の素材として使われている石材の黒曜石・下呂石をはじめ、剥片が出土の大半を占めている。これらのことから遺跡内では狩猟活動というよりも石材を加工する作業が行われていたことが考えられる。

次に打製石斧・安山岩製礫器の出土が多いことが、当遺跡内において土を掘る(根菜類を掘ったのか墓坑を掘ったのかは断定できないが)作業が行われていたことを表している。

また、磨石類・石皿などの出土が非常に少ないことは、食品加工の行為が遺跡内ではほとんど行われていなかったことを表している。

以上の点から大平遺跡では居住域としてではなく、極めて作業場的な要素を持った使われ方をしていたのではないかと考えられる。

第42表 器種別・石材別石器一覧表

	石鏃	石鏃	スクレ イバー	粗製 刃器	楔形 石器	RF	UF	安山岩 製礫器	打製 石斧	磨製 石斧	切目 石鏃	打欠 石鏃	磨石類	砥石	石製品	石核	磨石	石棒・ 石刺	石皿	計
黒曜石	94	3	8	0	25	28	22	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	188
安山岩	9	1	3	0	1	1	1	65	52	0	1	6	1	0	0	0	0	0	3	144
下呂石	56	10	13	0	12	6	8	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	108
チャート	27	4	13	0	4	7	10	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	71
結晶片岩	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	9	13	0	0	0	0	0	0	3	31
ホルンフェルス	1	0	0	2	0	0	0	0	16	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	22
花こう岩	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	2	10	0	0	0	0	0	0	24
砂岩	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	2	1	1	0	0	0	0	7
その他	4	0	4	1	0	4	1	0	3	7	3	0	1	0	0	1	1	1	0	30
計	191	18	41	4	42	46	42	65	81	7	16	22	14	1	1	18	1	6	9	625

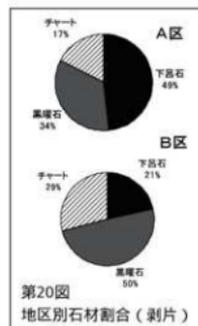
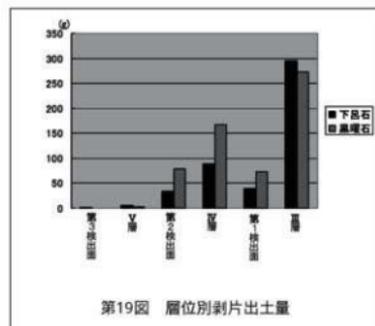
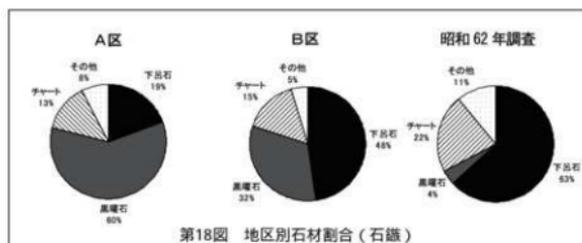
(2) 黒曜石と下呂石の割合について

今回出土した石器のうち、石材で最も割合の高いものが黒曜石で約30%、次いで安山岩が23%、下呂石が17%であった。黒曜石・下呂石は明らかに遺跡周辺で採取できる石材ではなく持ち込まれたも

のである。この二つの石材及びそれらを多く素材としている石礫に着目して、大平遺跡の石材選択の移り変わりを考えてみたい。

第18図にあるようにA区とB区では明らかに黒曜石と下呂石の割合が違う。B区は昭和62年の大平遺跡調査区に隣接する地区であり、下呂石が約半数を占める点で概ね同じような様相を示している。また、石礫等剥片石器を作成する際にできる剥片類（黒曜石・下呂石・チャート）の割合についても、両地区とも石礫における各石材の割合と同様である。

剥片における層毎の出土量（質量）は、第3検出面（主に縄文時代早期末）から第2検出面（主に縄文時代中期末～後期前葉）にかけて黒曜石の出土量が大幅に増える。第1検出面（縄文時代晚期末～弥生時代初頭）については遺構が少なく出土量は両者とも減るが、包含層については両者とも大幅に増える上に黒曜石と下呂石の割合が逆転する。さらに、縄文時代晚期末から多くみられるようになる石礫4D類（有茎五角形礫）がすべて下呂石製である（第43表）これらのことから大平遺跡においては縄文時代中期末から黒曜石を中心として剥片石器に使用し始め、時代が下るに従って下呂石も多く選択されるようになっていったと考えられる。B区では縄文時代の性格が明確な遺構はほとんど検出されておらず、昭和62年の調査でも主体は縄文時代晚期末であった。したがってA区は縄文時代中期末から、B区では縄文時代晚期末から本格的に土地が利用され始めたのではないかと考えられる。



第43表
分類別石礫点数

	黒曜石	下呂石	その他	計
1A	7	2	2	11
1B	0	0	0	0
1C	0	0	0	0
1D	0	0	0	0
1E	1	0	0	1
1類計	8	2	2	12
2A	29	15	11	55
2B	1	2	3	6
2C	1	1	3	5
2D	1	2	3	6
2E	5	2	2	9
2類計	37	22	22	81
3A	6	2	2	10
3B	0	0	0	0
3C	0	0	0	0
3D	0	0	0	0
3E	1	1	0	2
3類計	7	3	2	12
4A	0	0	0	0
4B	0	0	0	0
4C	0	0	0	0
4D	0	9	1	10
4E	0	0	0	0
4類計	0	9	1	10
5A	27	11	7	45
5B	0	1	3	4
5C	0	0	1	1
5D	1	4	1	6
5E	14	4	2	20
5類計	42	20	14	76
合計	94	56	41	191

(3) 安山岩製礮器について

今回出土した石器の中で特徴的なものは「安山岩製礮器」で、石鏃・打製石斧に次いで出土量であった。定義は第4章で述べたとおりである。打製石斧と形態が似ているものもあり、用途は土掘り具と考えられるが、打製石斧の中にも同じ石材を用いたものも多くあり、加工の際には明らかに意識をして打製石斧と礮器とを作り分けたと考えられる。ほとんどが素材の円礮部分を多く残しており、手のひらに収まる程度の大きさであることから手持ちの土掘り具であったのかも知れない。また、中には両面から調整を加え、刃部として機能するようにしたものもあることから、搔器・削器的要素を持ったものであるとも考えられる。実際、矢作川沿いでは同じように安山岩を素材とした石器が出土しており、豊田市の三本松遺跡では搔器として位置づけられている。昭和62年の大平遺跡の調査では1点出土しており、今回と同様に、礮器として位置づけられている。

今回の調査ではこの器種がどの層からも出土していることから、時期を特定することはできないが、性格付けをするのであれば、縄文時代全般を通して使用されたものであり、形態にこだわらず様々な場面で用途に応じて作られたものであるのではないかと推測する。

4 大平遺跡の変遷

以上の点から、大平遺跡の変遷を考えてみたい。

縄文時代早期末の遺構・遺物は確認したものの、量的に乏しく、遺構も性格が分かるものではなかった。旧地形はA区でやや平坦面はあるものの、人が生活していたとは考えにくい。おそらく集落は調査区北側に存在し、遺物の多くは流れ込んだものであると考えられる。

縄文時代中期末までにはA区は谷からの堆積土によって、B区においては大平川の流れによってある程度の平坦面が形成されたと思われる。B区においては平坦面が小さく、まだ生活が本格的に営まれていたとは考えにくい。A区では谷からの堆積により礮が一面に広がるため、生活区域というよりも墓域として利用したのであろう。また、この時期から黒曜石の搬入など、他地域との交流が盛んになってきたと思われる。

縄文時代晩期末には両地区とも墓域として利用された。前回の調査では地床炉らしき遺構が確認されているが、今回の調査では住居跡等、生活の痕跡は確認できなかったことから、集落の本体は調査区より南側の大平川近辺にあったと考えられる。また、土器の様式から考えるに非常に短い期間のみ集落が営まれた可能性もある。

古墳時代に入ると平坦面を利用して住居が作られたようだが、その後は耕作地として現代まで利用されてきた。

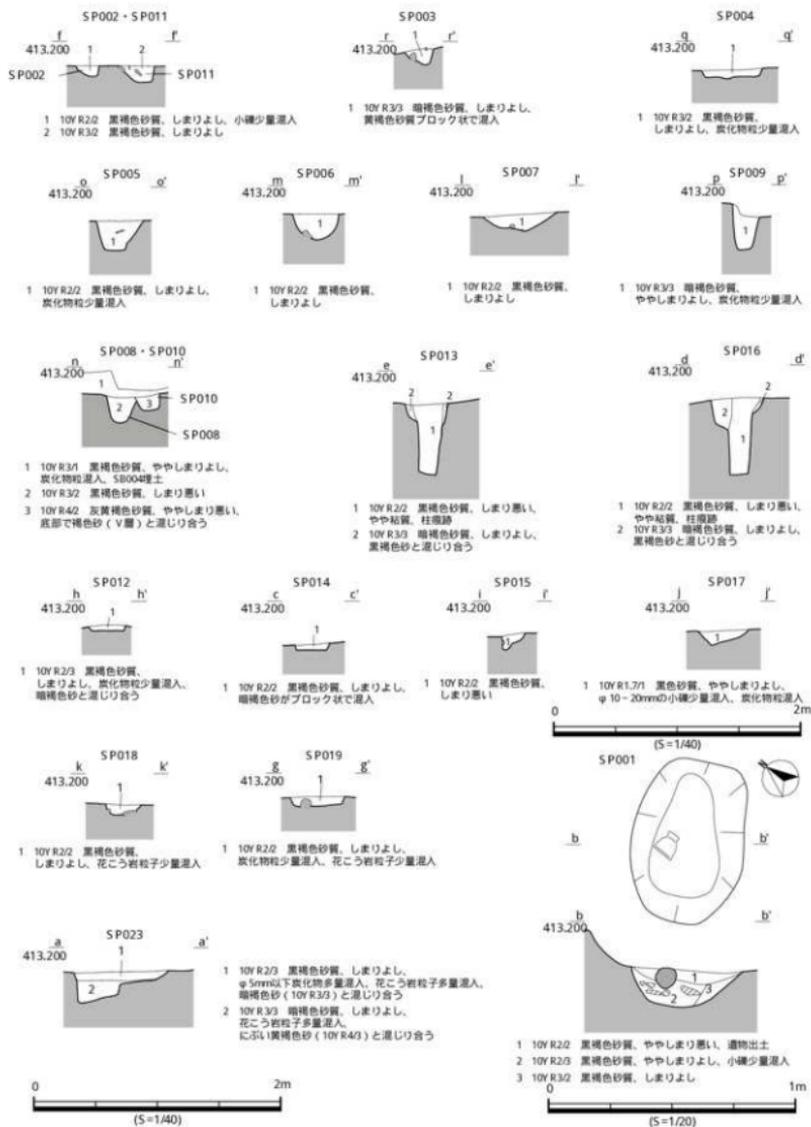
今回の調査では縄文時代から古墳時代まで、幅広い時期に涉る人々の生活の痕跡を確認することができた。しかしながら調査範囲は限られた部分であり、縄文時代早期や古墳時代の集落、縄文時代中期末から後期初頭や弥生時代初頭の墓域と集落との関係など、未だ解明されていない部分は多く残されている。今後、周辺の遺跡において調査が行われる中で、今回の成果がその一助となれば幸いである。

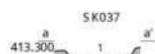
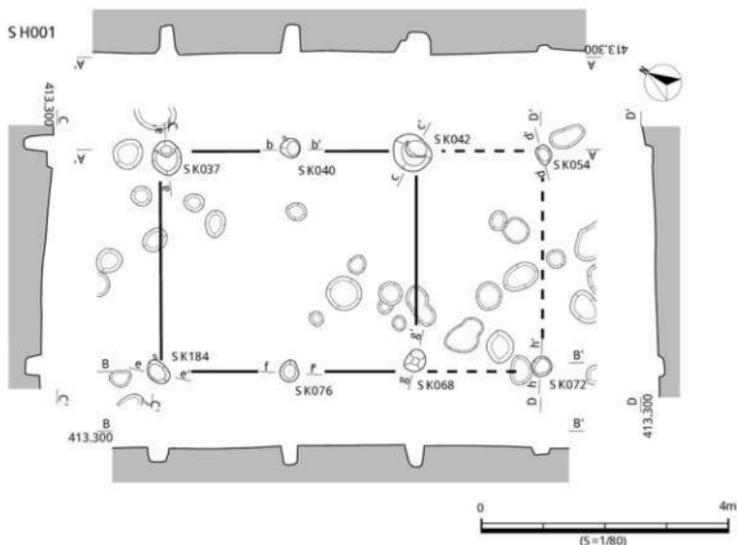
参考文献

- 網谷克彦 1989 「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』小学館
- 泉 拓良 1989 「縁帯文土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 泉 拓良 1989 「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 泉 拓良 1989 「西日本磨研土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 泉 拓良 1989 「船元・里木土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 泉 拓良・山崎純男 1989 「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 大下 明 2002 「近畿地方と東海地方西部における押型紋土器期の石器群について」『第4回関西縄文文化研究会 縄文時代の石器- 関西の縄文草創期・早期-』関西縄文文化研究会
- 可児通宏 1989 「押型文系土器様式」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』小学館
- 狩野 睦 1989 「串田新・大杉谷式土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 上矢作町教育委員会 1998 『上矢作町内遺跡発掘調査報告書 上村川下流域の考古学的調査』
- 川添和暁 2003 「棺の構造からみた縄文晩期葬法研究について - 近畿・東海・中部高地・北陸地方を中心に-」『関西縄文時代の集落・墓地と生業 関西縄文論集1』関西縄文文化研究会
- 関西縄文文化研究会 2000 『関西の縄文墓地- 葬り葬られた関西縄文人』
- 岐阜県教育委員会 1968 『矢作ダム水没地区遺跡発掘調査報告書- 相走遺跡・大野遺跡-』
- 串原村教育委員会 1988 『大平遺跡』
- 串原村教育委員会 2003 『閑羅瀬遺跡発掘調査概報- 矢作川上流域における縄文中期前半の遺跡-』
- 串原村役場 1968 『串原村史』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991 『麻生田大橋遺跡』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992 『山中遺跡』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1993 『三斗目・三本松遺跡』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 2001 『牛牧遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1995 『西乙原遺跡 勝更白山神社周辺遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2000 『いんべ遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2000 『戸入村平遺跡Ⅱ 小谷戸遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2002 『富田清友遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2003 『尾元遺跡』
- 条痕文土器研究会 2003 『第1回三河考古学談話会研究会資料集- 条痕文系土器の原体をめぐって-』
- 末木 健 1989 『曾利式土器様式』『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 鈴木道之助 1991 『図録・石器入門事典<縄文>』柏書房
- 鈴木保彦・山本暁久 1989 「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 谷口康浩 1989 「条痕文系土器様式」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』小学館
- 玉田芳英 1989 「中津・福田KⅡ式土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 戸沢充則編 1994 『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 豊川市教育委員会 1993 『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』
- 中島庄一 1989 「称名寺式土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 永峯光一編 1998 『氷遺跡発掘調査資料図譜』氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
- 西田泰民 1989 「堀之内・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 穂積裕昌 1992 『縄文時代後期の壺形土器- 中津・福田KⅡ式土器に伴う双耳壺を中心に-』
『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 前田清彦ほか 2002 「三河地域」『弥生土器の様式と編年- 東海編-』木耳社
- 三重県埋蔵文化財センター 1998 『鴻ノ木遺跡発掘調査報告書』
- 三上徹也 1989 「唐草文系土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 宮下健司 1989 「東海条痕文系土器様式」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』小学館

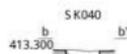
圖 版

図版2 SB001内遺構実測図

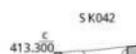




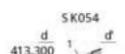
- 10Y R2/2 黒褐色砂質、ややしまり悪い
- 10Y R2/1 黒色砂質、しまり悪い、やや粘質
- 10Y R3/2 黒褐色砂質、ややしまり悪い



- 10Y R3/2 黒褐色砂質、しまり悪い、 ϕ 5mm程度の炭化物少量混入、柱痕跡
- 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い



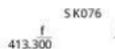
- 10Y R3/2 黒褐色砂質、しまり悪い、 ϕ 5mm程度の炭化物少量混入、柱痕跡
- 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い



- 10Y R2/2 黒褐色砂質、ややしまり悪い、花こう質粒子少量混入



- 10Y R3/2 黒褐色砂質、ややしまり悪い



- 10Y R2/2 黒褐色砂質



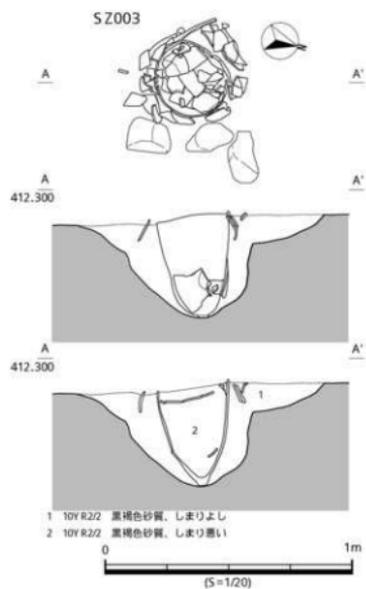
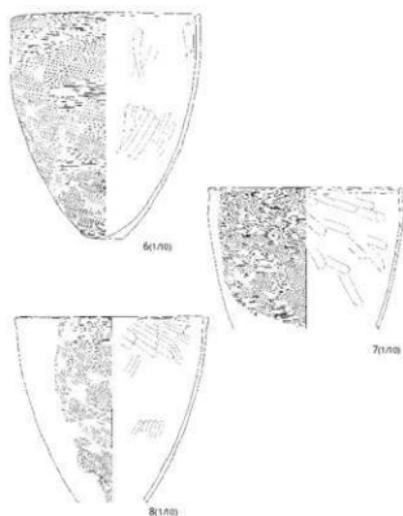
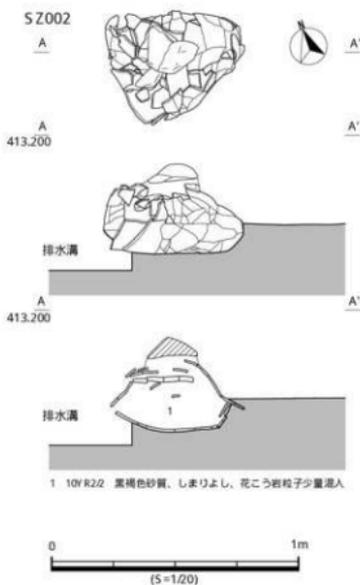
- 10Y R2/1 黒色砂質、しまり悪い、やや粘質、柱痕跡
- 10Y R3/2 黒褐色砂質、ややしまり悪い

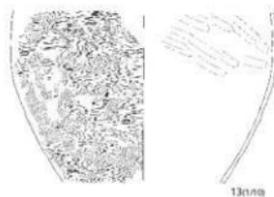


- 10Y R2/2 黒褐色砂質、ややしまりよし、炭化物粒少量混入

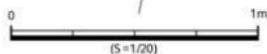
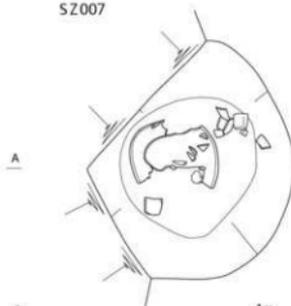


図版4 SZ002・003実測図

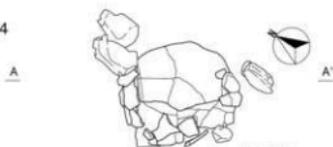




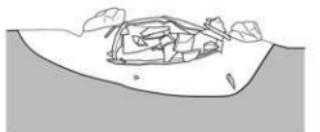
SZ007



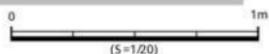
SZ004



413.300



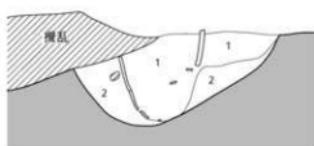
413.300



- 1 10Y R2/2 黒褐色砂質、ややしまり悪い、やや粘質、小礫少量混入
- 2 10Y R2/3 黒褐色砂質、しまり悪い、やや粘質
- 3 10Y R2/2 黒褐色砂質、しまり悪い、やや粘質、φ 5mm程度の炭化物混入

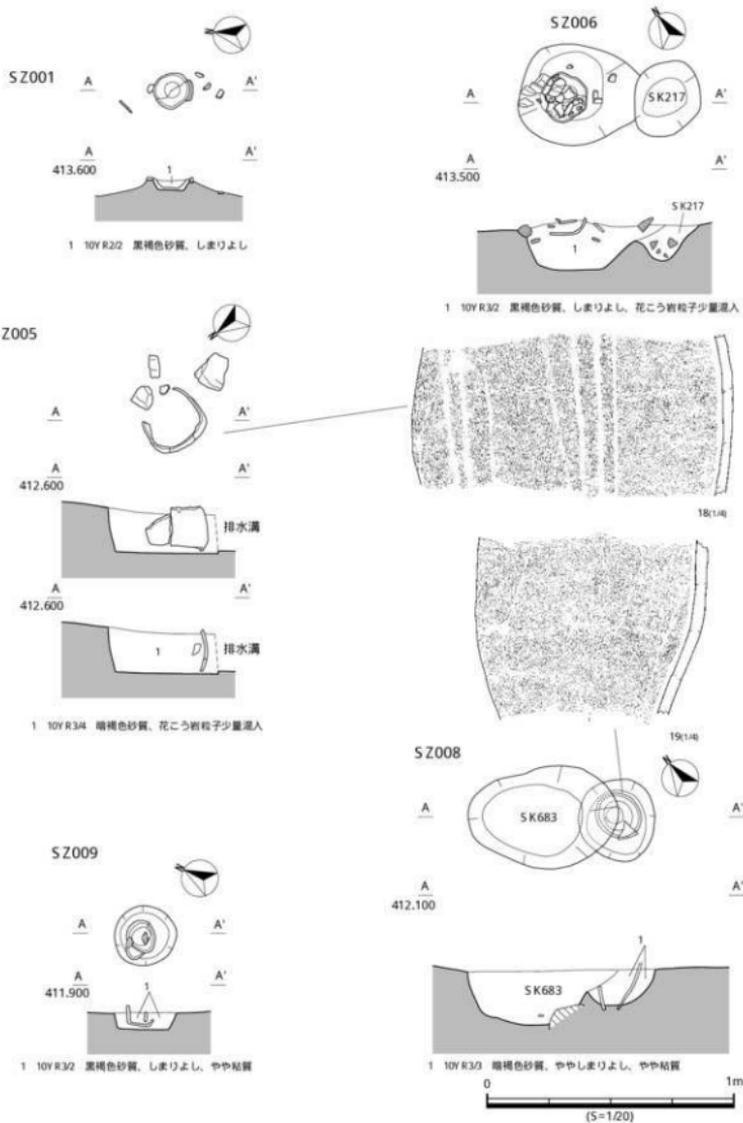


412.500

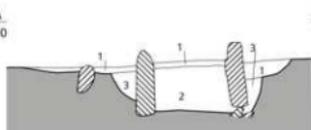


- 1 10Y R2/3 黒褐色砂質、花こう岩粒子少量混入
- 2 10Y R2/3 黒褐色砂質、にぶい黄褐色砂(10Y R4/3)と混じり合う

図版6 SZ001・005・006・008・009実測図



SF001

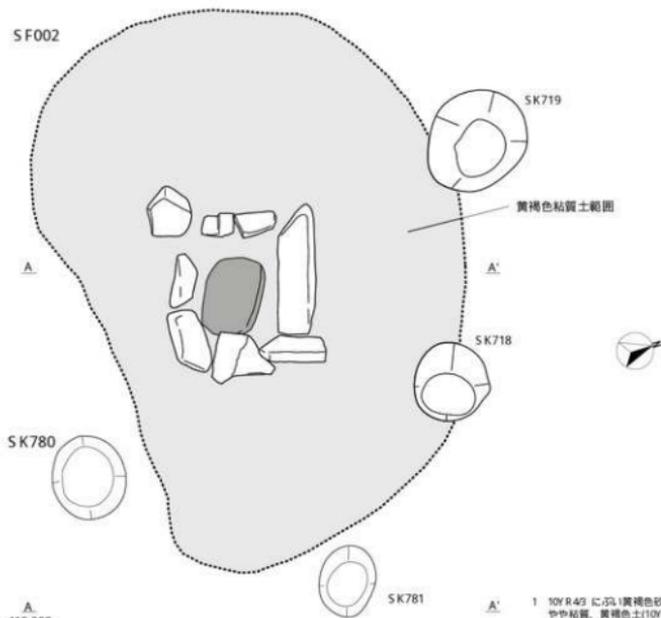
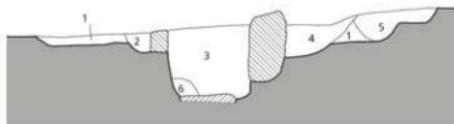
A
413.770

- 1 10Y R2/2 黒褐色砂質、ややしまり悪い、遺物出土層
2 10Y R2/3 黒褐色砂質、ややしまりよし、小礫少量混入
3 10Y R3/2 黒褐色砂質、しまりよし

0 1m

(S=1/20)

SF002

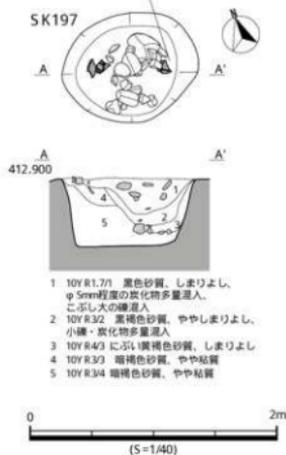
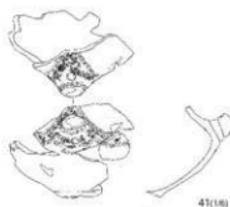
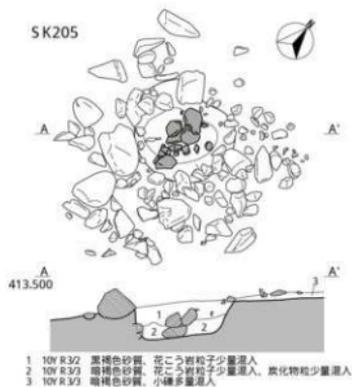
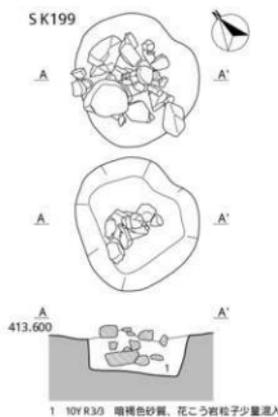
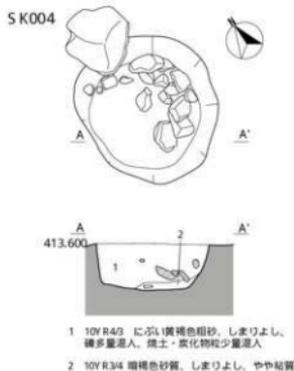
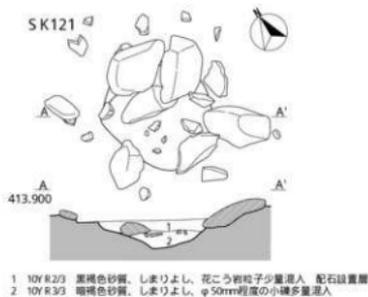
A
412.200

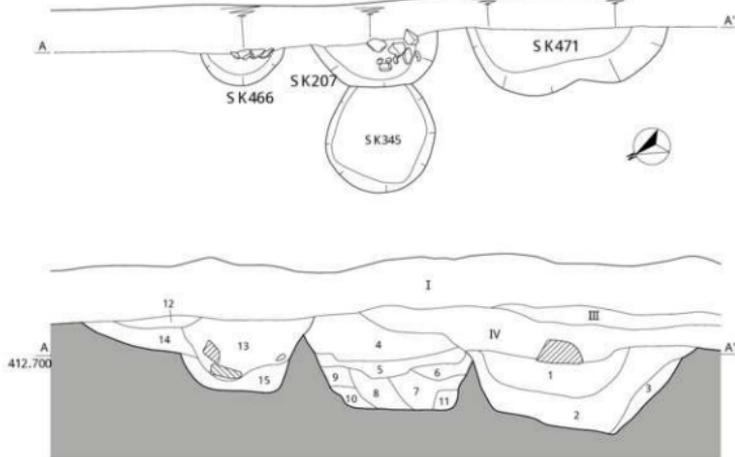
- 1 10Y R4/3 にごい黄褐色砂質、しまりよし、
やや粘質、黄褐色土(10Y R5)混入、
住居の陥床面の可能性あり
2 10Y R3/2 黒褐色砂質、しまりよし、
φ20-50mm程度の礫混入、石組の張り崩
3 10Y R2/2 黒褐色砂質、
地土、カコワ岩粒子少量混入、
φ30-50mm程度の礫混入、石組内の埋土
4 10Y R3/2 黒褐色砂質、しまりよし、
φ20-50mm程度の礫混入、石組の張り崩
5 10Y R4/3 にごい黄褐色砂質、しまりよし、
やや粘質、黄褐色土(10Y R5)混入、
住居の陥床面の可能性あり
6 10Y R3/4 黄褐色砂質、しまり悪い、
腐土粒子少量混入、
φ1-2mm程度のカコワ岩粒子少量混入

0 1m

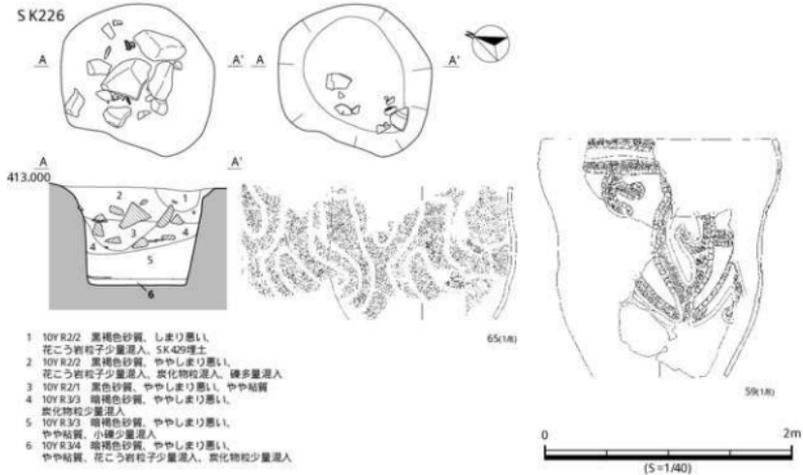
(S=1/20)

図版8 SK004・121・197・199・205実測図



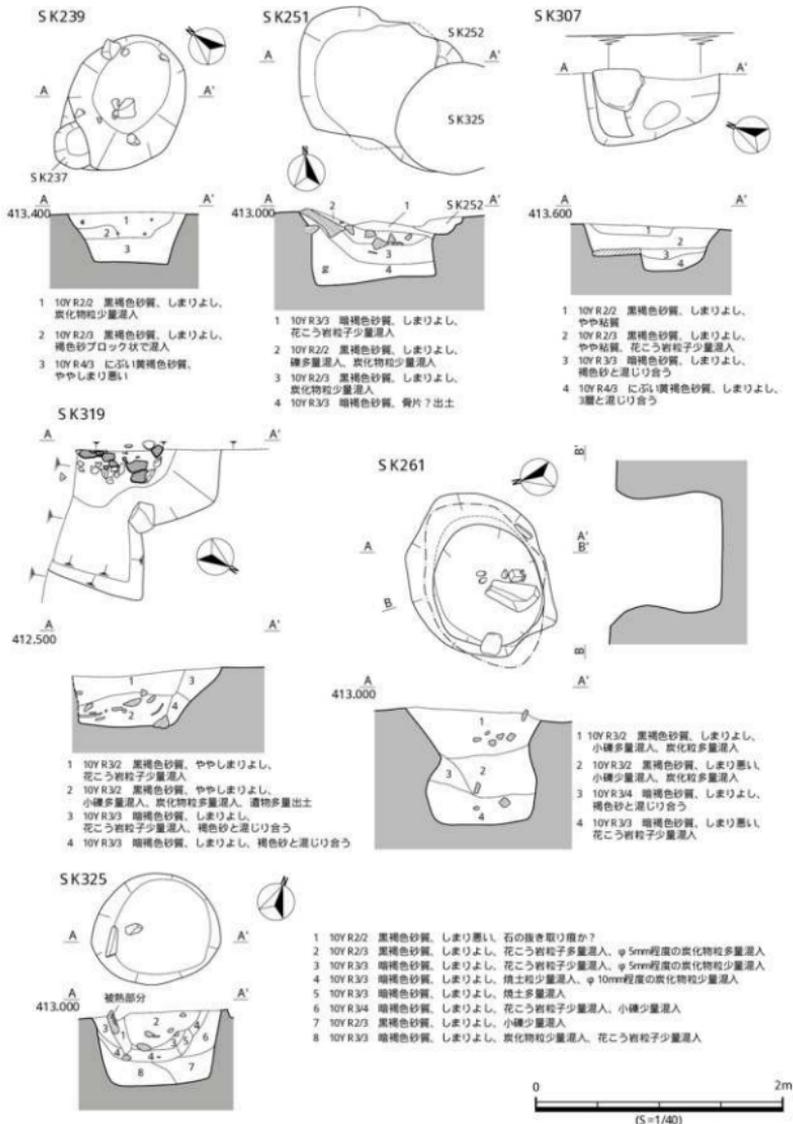


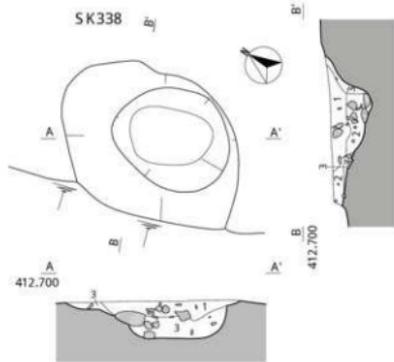
- | | |
|--|---|
| 1 10Y R 3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入、炭化物粒少量混入、小礫少量混入 SK471 | 9 10Y R 3/2 黒褐色砂質、しまりよし SK207 |
| 2 10Y R 3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入、炭化物粒少量混入、小礫多量混入 SK471 | 10 10Y R 3/4 暗褐色砂質、しまりよし SK207 |
| 3 10Y R 3/4 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入 SK471 | 11 10Y R 3/2 黒褐色砂質、しまりよし SK207 |
| 4 10Y R 3/2 黒褐色砂質、しまりよし SK207 | 12 10Y R 4/3 にぶい黄褐色砂質、しまりよし、黒褐色砂と混じり合う SK466 |
| 5 10Y R 3/3 暗褐色砂質、しまりよし SK207 | 13 10Y R 3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入、炭化物粒少量混入、小礫多量混入 SK466 |
| 6 10Y R 3/4 暗褐色砂質、しまりよし SK207 | 14 10Y R 2/3 黒褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入、炭化物粒少量混入、小礫少量混入 SK466 |
| 7 10Y R 3/3 暗褐色砂質、しまりよし SK207 | 15 10Y R 3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入、炭化物粒少量混入、遺物多量出土 SK466 |
| 8 7.5Y R 3/4 暗褐色砂質、しまりよし SK207 | |



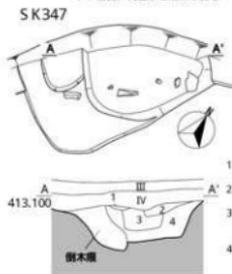
- | |
|--|
| 1 10Y R 2/2 黒褐色砂質、しまり悪い、花こう岩粒子少量混入、SK466埋土 |
| 2 10Y R 2/2 黒褐色砂質、ややしまり悪い、花こう岩粒子少量混入、炭化物粒混入、礫多量混入 |
| 3 10Y R 2/1 黒色砂質、ややしまり悪い、やや粘質 |
| 4 10Y R 3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い、炭化物粒少量混入 |
| 5 10Y R 3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い、やや粘質、小礫少量混入 |
| 6 10Y R 3/4 暗褐色砂質、ややしまり悪い、やや粘質、花こう岩粒子少量混入、炭化物粒少量混入 |

図版10 SK239・251・261・307・319・325実測図

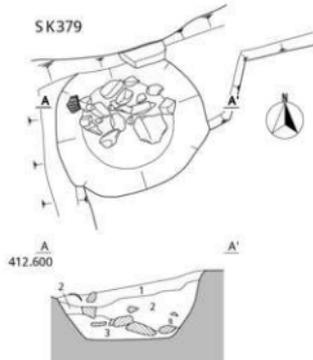




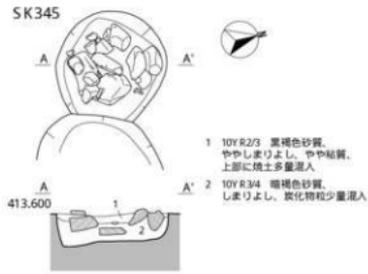
- 1 10Y R2/2 黒褐色砂質、ややしまり悪い、やや粘質、花こう骨粒子少量混入、 ϕ 3mm程度の炭化物少量混入
- 2 10Y R2/2 黒褐色砂質、しまりよし、やや粘質、小礫少量混入
- 3 10Y R3/4 暗褐色砂質、しまりよし、やや粘質、褐色砂と混じり合う



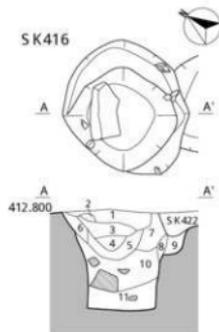
- 1 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまりよし
- 2 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまりよし
- 3 10Y R4/4 褐色砂質、ややしまりよし
- 4 10Y R3/4 暗褐色砂質、焼土・炭化物少量混入、ややしまり悪い、 ϕ 10mm程度の炭化物少量混入



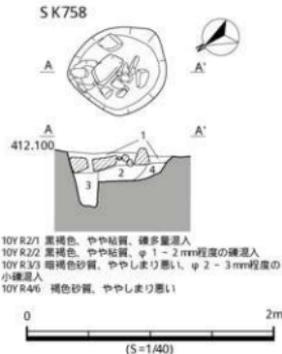
- 1 10Y R3/4 暗褐色砂質、ややしまり悪い、花こう骨粒子少量混入、小礫少量混入
- 2 10Y R3/4 暗褐色砂質、しまりよし、礫少量混入
- 3 10Y R4/2 に近い黄褐色砂質、しまりよし、やや粘質



- 1 10Y R2/3 黒褐色砂質、ややしまりよし、やや粘質、上部に焼土多量混入
- 2 10Y R3/4 暗褐色砂質、しまりよし、炭化物少量混入



- 1 10Y R2/3 黒褐色砂質、しまりよし、花こう骨粒子少量混入
- 2 10Y R2/3 黒褐色砂質、しまりよし、花こう骨粒子少量混入
- 3 10Y R2/3 黒褐色砂質、ややしまり悪い、焼土多量混入
- 4 10Y R2/3 黒褐色砂質、しまり悪い
- 5 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い、焼土多量混入
- 6 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い、小礫少量混入
- 7 10Y R3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう骨粒子少量混入
- 8 10Y R4/2 に近い黄褐色砂質、しまりよし、7・10層に対してブロック状で混入
- 9 10Y R3/3 暗褐色砂質、しまりよし、礫砂
- 10 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い、こぶし大礫少量混入
- 11 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い、やや粘質、こぶし大の礫少量混入



- 1 10Y R2/3 黒褐色、やや粘質、礫少量混入
- 2 10Y R2/3 黒褐色、やや粘質、 ϕ 1 - 2mm程度の礫混入
- 3 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い、 ϕ 2 - 3mm程度の小礫混入
- 4 10Y R4/6 褐色砂質、ややしまり悪い

図版12 SK443・456・807・827・1083実測図

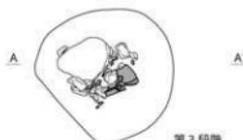
SK443



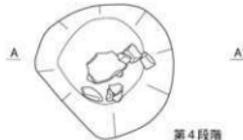
第1段階



第2段階



第3段階



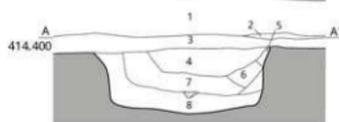
第4段階



413,200

- 1 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い
- 2 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまり悪い、1がブロック状で混入
- 3 10Y R2/2 黒褐色砂質、ややしまり悪い、小礫少量混入、炭化物粒少量混入
- 4 10Y R2/2 黒褐色砂質、しまりよし、炭化物粒少量混入
- 5 10Y R2/3 黒褐色砂質、しまりよし
- 6 10Y R3/4 暗褐色砂質、ややしまりよし、やや粘質、褐色(7.5YR4/4)の焼土が混じり合う

SK1083



414,400

- 1 現代耕作土
- 2 カウラン
- 3 堅地土
- 4 10Y R3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子多量混入、炭化物粒少量混入
- 5 10Y R4/3 に近い黄褐色砂質、しまりよし、暗褐色砂と混じり合う
- 6 10Y R3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子多量混入
- 7 10Y R3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子多量混入、炭化物粒少量混入
- 8 10Y R3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子多量混入

SK456



A
413,400



- 1 10Y R2/2 黒褐色砂質、しまりよし、小礫少量混入
- 2 10Y R2/2 黒褐色砂質、ややしまりよし、やや粘質
- 3 10Y R3/4 暗褐色砂質、ややしまり悪い、焼土と混じり合う
- 4 10Y R3/4 暗褐色砂質、ややしまり悪い、焼土少量混入

SK807

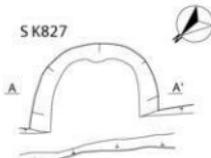


A
412,600



- 1 10Y R3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入、こぶし大の小礫少量混入
- 2 10Y R3/2 黒褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入
- 3 10Y R3/4 暗褐色砂質、しまりよし、炭化物粒多量混入

SK827



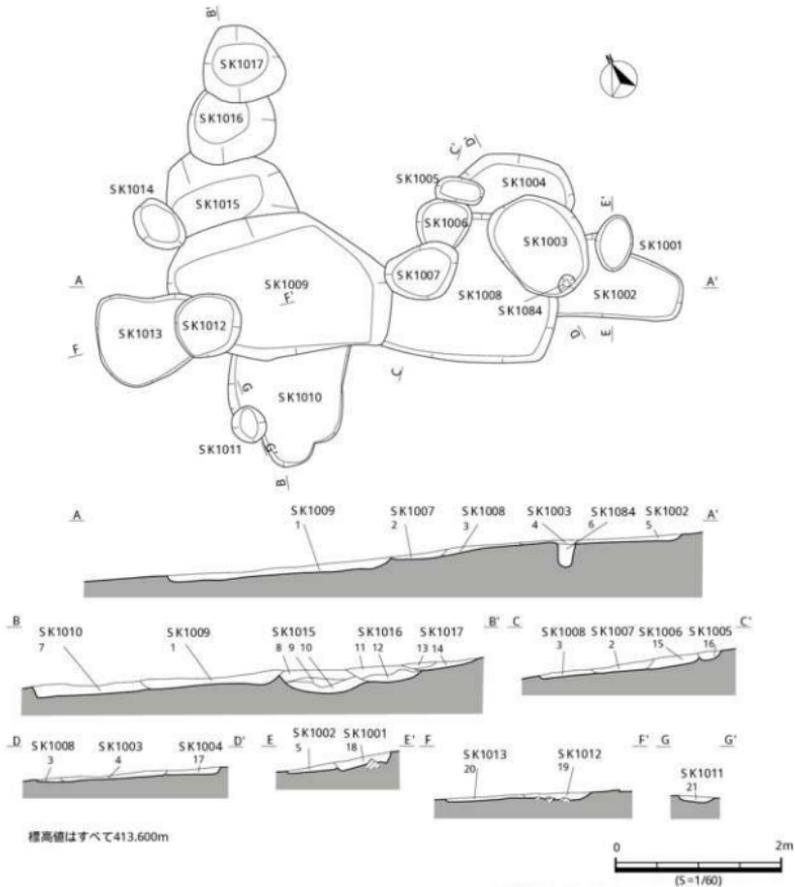
A
412,900



- 1 10Y R3/2 黒褐色砂質、しまりよし、炭化物粒まばらに混入、花こう岩まばらに混入



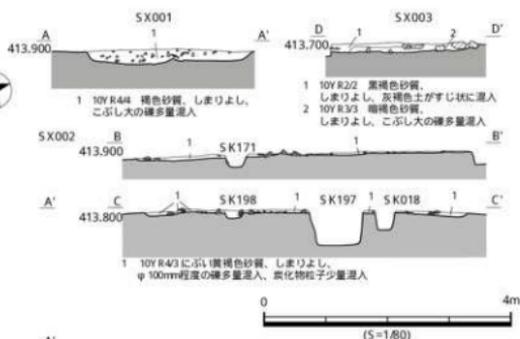
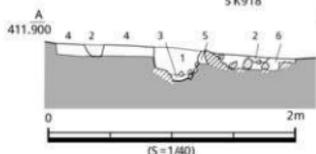
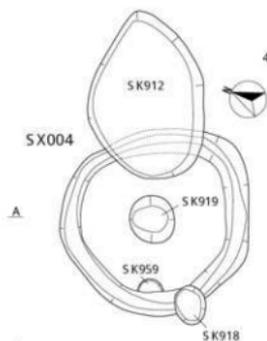
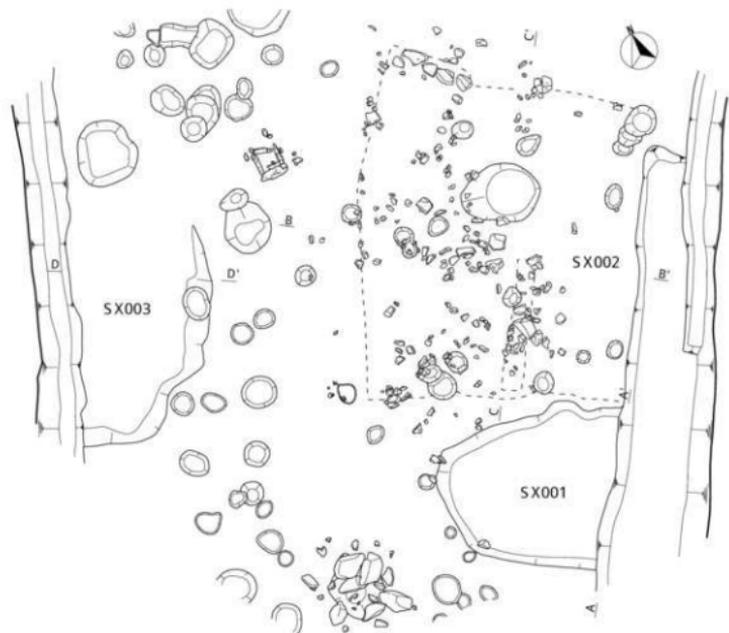
(S=1/40)



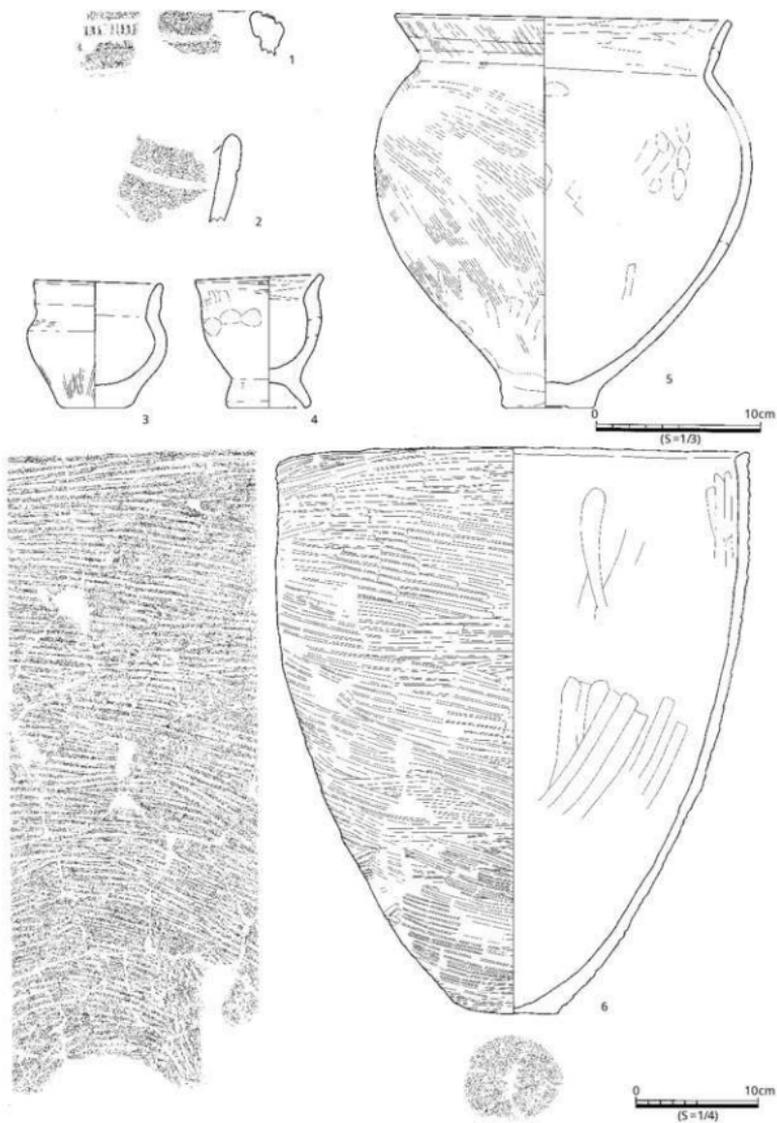
- 1 10Y R3/2 黒褐色砂質、やや粘質、ややしまりよし、花こう岩粒子少量混入、暗褐色砂(10Y R3/3)上部混入
- 2 10Y R3/2 黒褐色砂質、やや粘質、ややしまりよし、花こう岩粒子少量混入
- 3 10Y R3/2 黒褐色砂質、やや粘質、ややしまりよし、暗褐色砂(10Y R2/2)と混じりあつ
- 4 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまりよし、花こう岩粒子少量混入
- 5 10Y R2/2 黒褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入、 ϕ 5mm程度の炭化植物少量混入
- 6 10Y R3/3 暗褐色砂質、やや粘質、ややしまりよし
- 7 10Y R2/3 黒褐色砂質、やや粘質、ややしまりよし
- 8 10Y R3/3 暗褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入、炭化植物少量混入
- 9 10Y R2/3 黒褐色砂質、やや粘質、しまりよし、 ϕ 50mm程度の礫少量混入
- 10 10Y R2/2 黒褐色砂質、やや粘質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入

- 11 10Y R3/2 黒褐色砂質、粘質、ややしまりよし、花こう岩粒子少量混入
- 12 10Y R2/1 黒褐色砂質、やや粘質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入
- 13 10Y R3/2 黒褐色砂質、粘質、しまりよし
- 14 10Y R2/2 黒褐色砂質、粘質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入
- 15 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまりよし、炭化植物少量混入
- 16 10Y R4/3 に5%黄褐色砂質、やや粘質、ややしまり悪し、花こう岩粒子少量混入
- 17 10Y R3/2 黒褐色砂質、粘質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入
- 18 10Y R2/1 黒褐色砂質、やや粘質、しまりよし、花こう岩粒子多量混入、暗褐色砂(10Y R2/3)上部混入
- 19 10Y R3/2 黒褐色砂質、粘質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入、 ϕ 30-100mm程度の礫多量混入、黄褐色砂少量混入
- 20 10Y R2/3 黒褐色砂質、しまりよし、花こう岩粒子少量混入、礫少量混入、黄褐色砂少量混入
- 21 10Y R3/3 黒褐色砂質、しまりよし、炭化植物少量混入、黄褐色砂多量混入

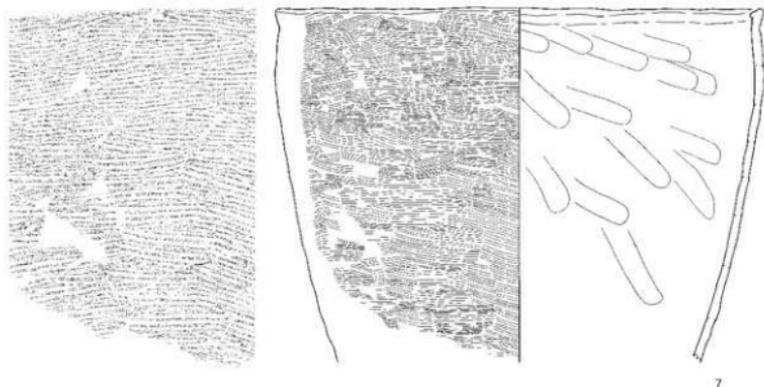
図版14 SX001-004実測図



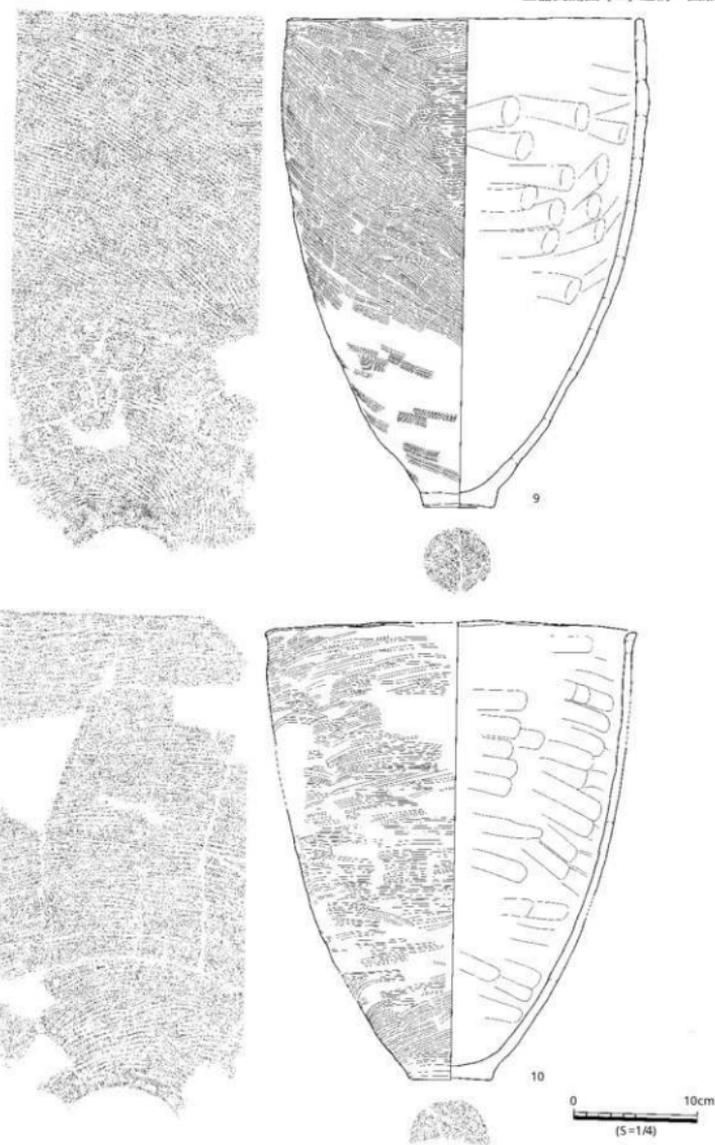
- 1 10Y R2/1 黒色砂質、ややしまりよし、やや粘質、黄色粒子を少量混入
- 2 10Y R2/2 黒褐色砂質、しまりよし、黄色粒子を少量混入
- 3 10Y R3/4 暗褐色砂質、ややしまり悪し、φ50mm程度の礫混入、黄色粒子を少量混入
- 4 10Y R4/4 褐色砂質、ややしまり悪し、φ50-100mm程度の小石混入、炭化物粒少量混入、黄色砂粒子を多量混入、基礎層
- 5 10Y R4/4 褐色砂質、ややしまり悪し、φ50mm程度の礫多量混入、炭化物粒少量混入、黄色砂粒子を多量混入、基礎層
- 6 10Y R3/3 暗褐色砂質、ややしまりよし、φ50mm程度の礫多量混入、黄色粒子を多量混入、基礎層



图版16 土器实测图(2) 遺構



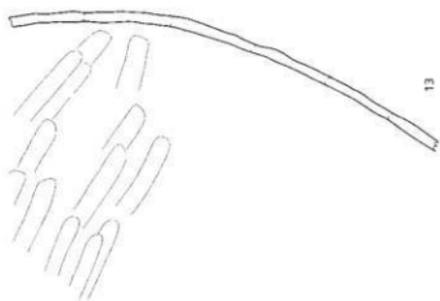
0 10cm
(S=1/4)



图版18 土器实测图(4) 遺構

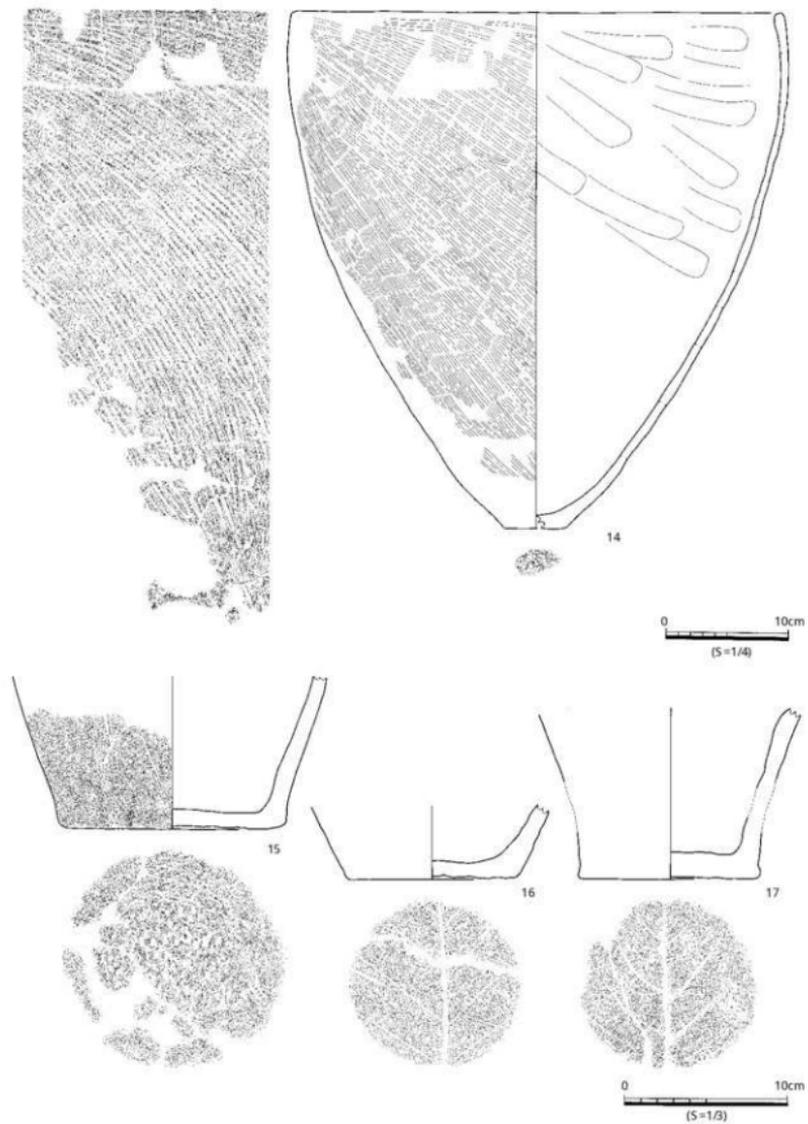


SZ004 (1)

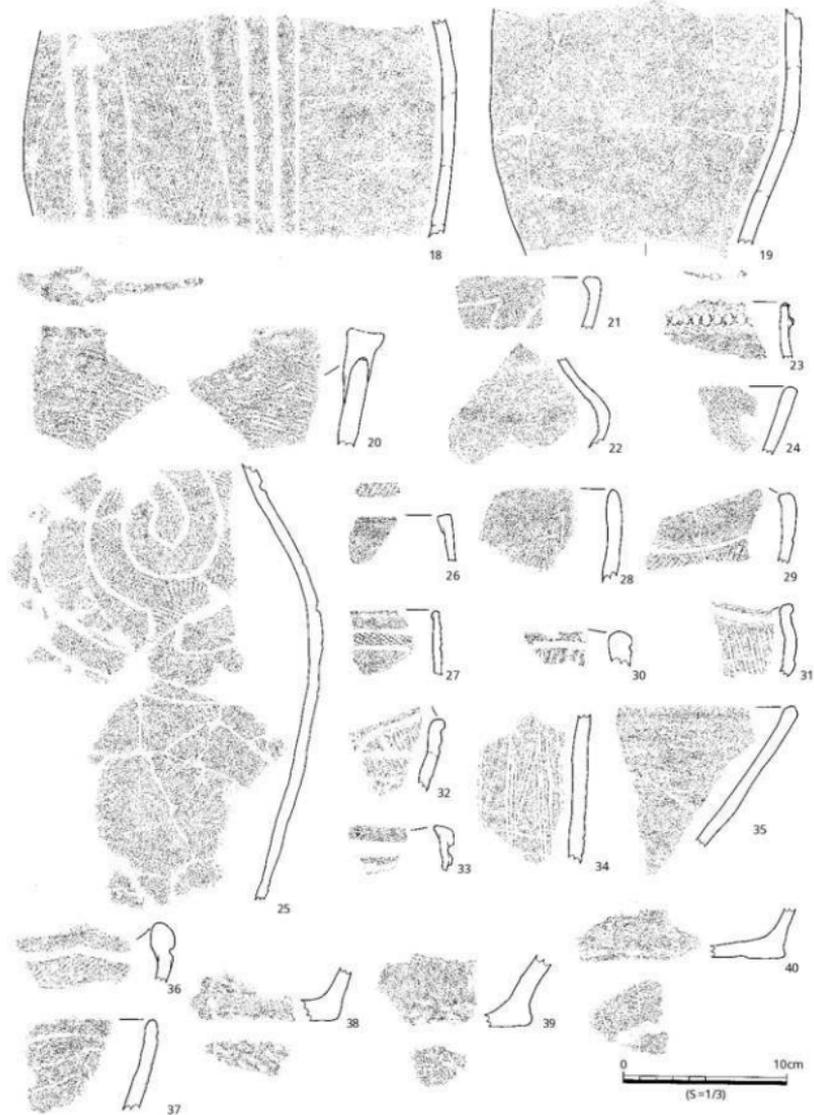


SZ004 (2)

图版20 土器实测图(6) 遺構

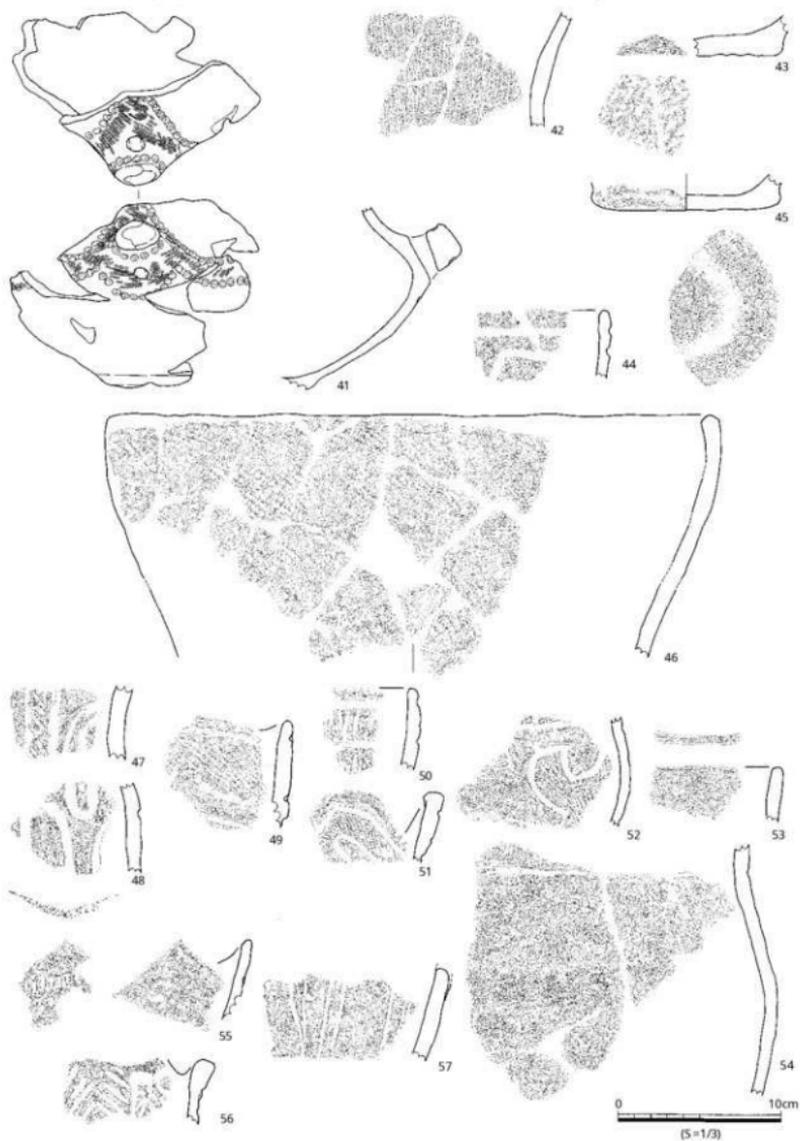


SZ007 : 14 SZ006 : 15 SZ001 : 16 SZ009 : 17

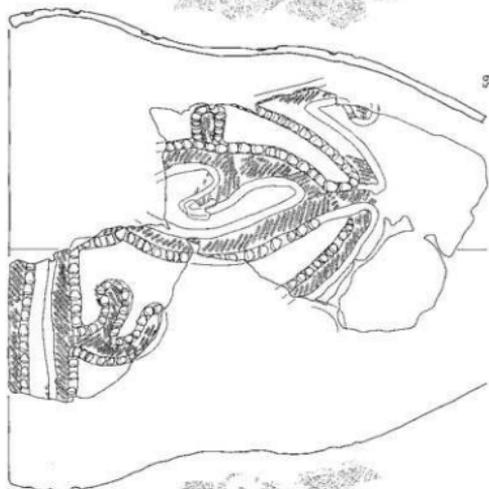


SZ005 : 18 SZ008 : 19 SK004 : 20-23 SK307 : 24 SK199 : 25 SK205 : 26-27
SK207 : 28-29 SK325 : 30-34 SK121 : 35 SK239 : 36-40

图版22 土器实测图(8)遺構

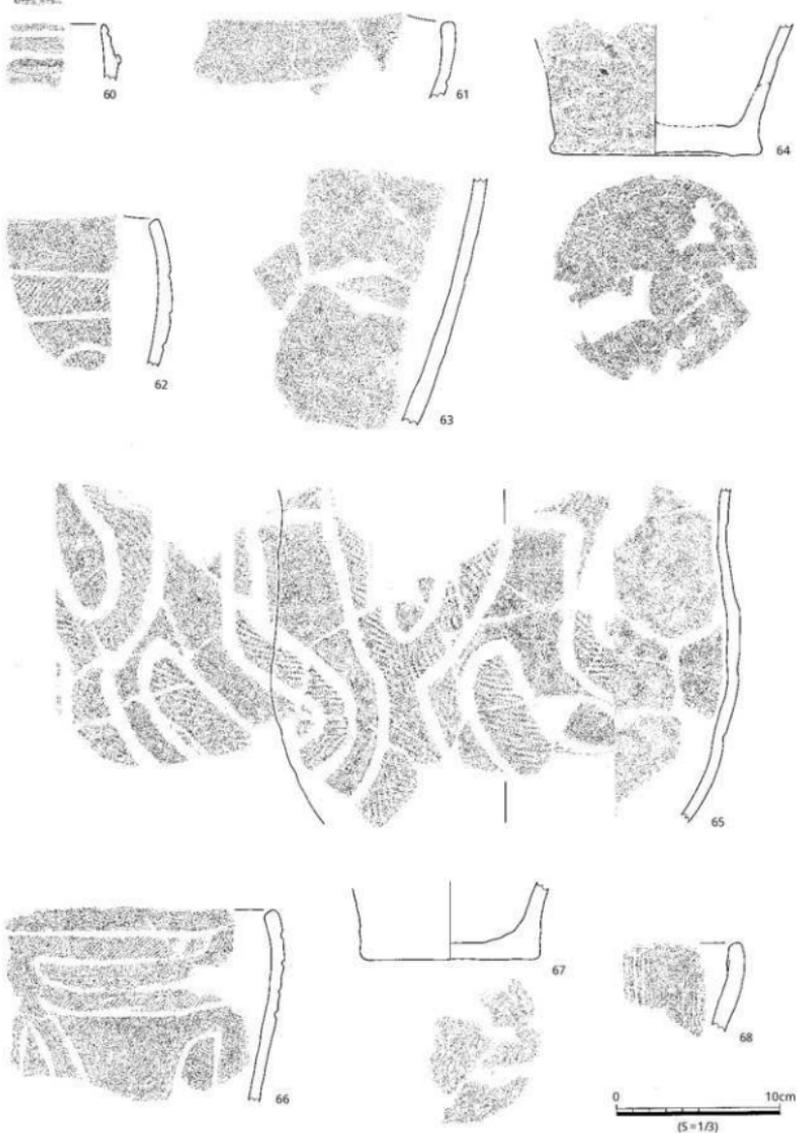


SK197 : 41 - 46 SK261 : 47 - 54 SK347 : 55 · 56 SK807 : 57

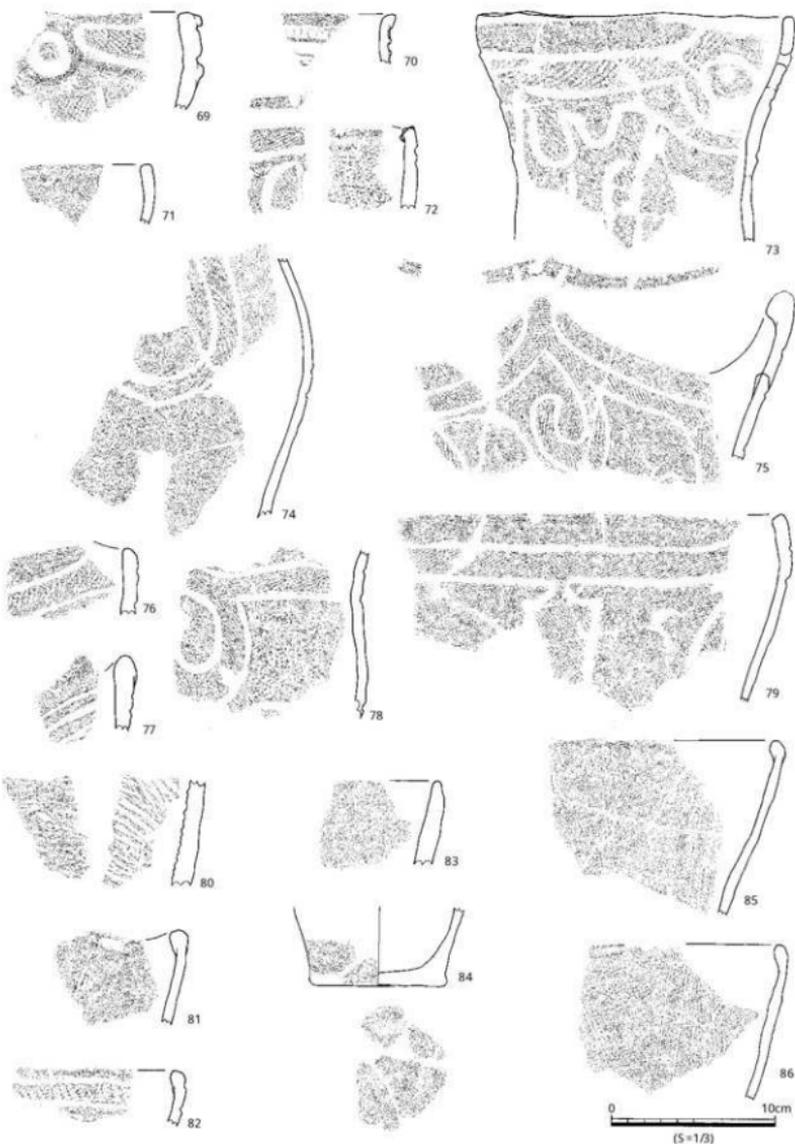


SK226(1)

图版24 土器实测图(10) 遺構

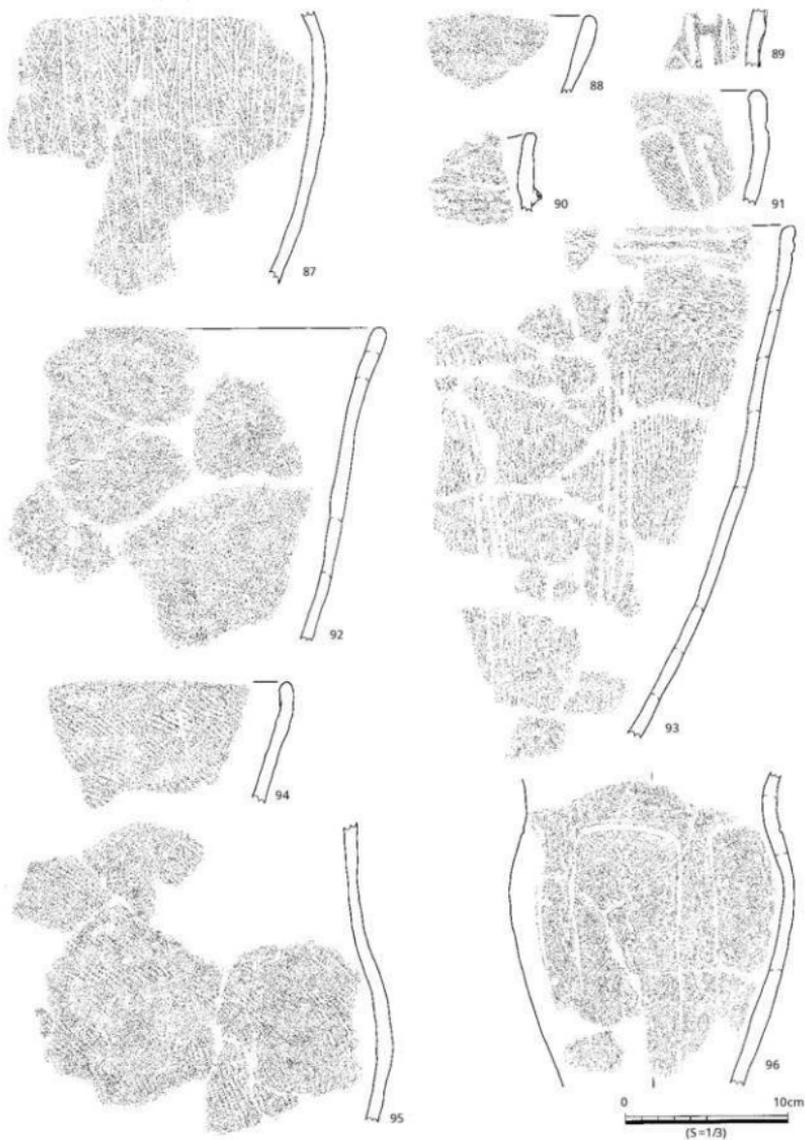


SK226(2): 60-65 SK466: 66-68

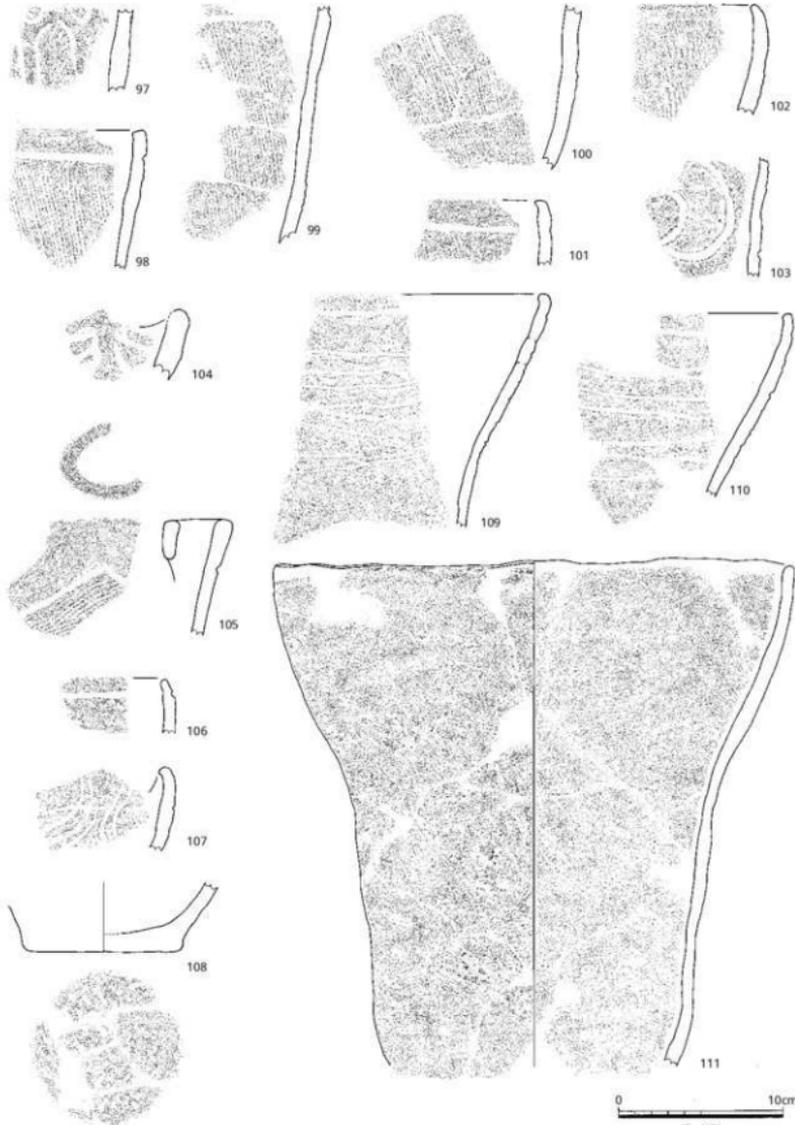


SK251: 69-79 SK456: 80-86

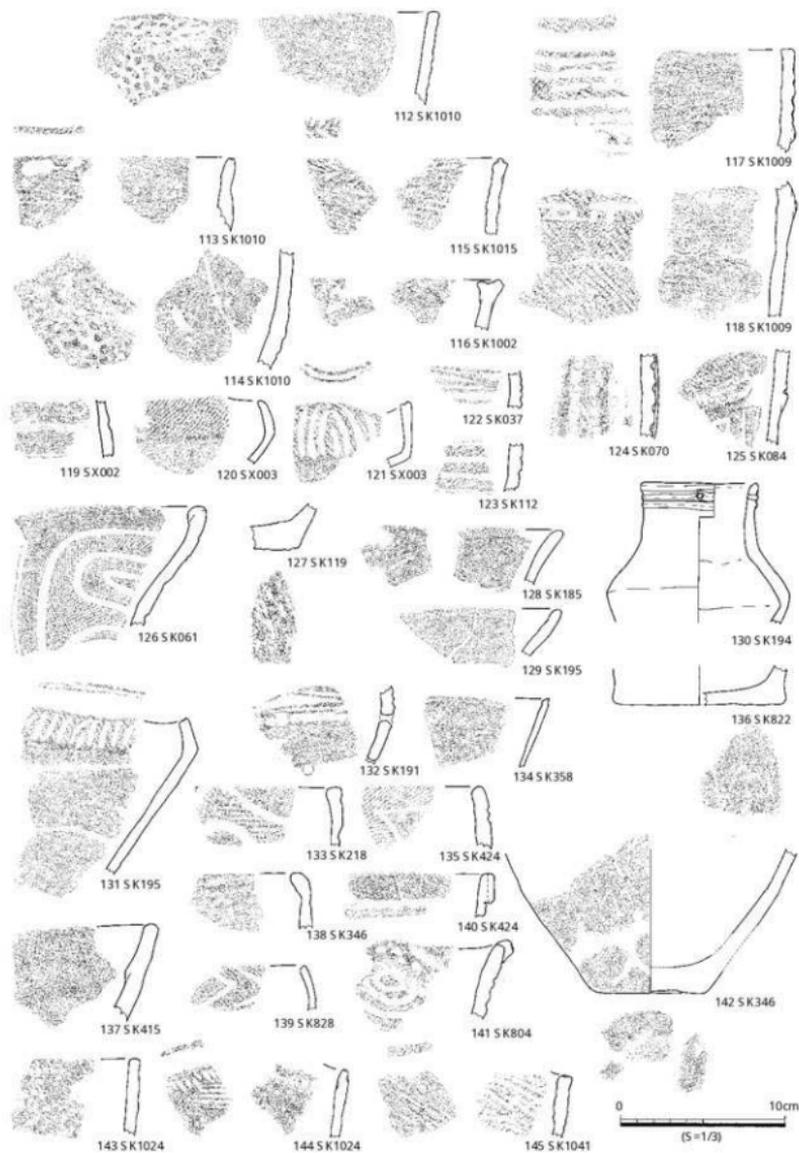
图版26 土器实测图(12) 遺構

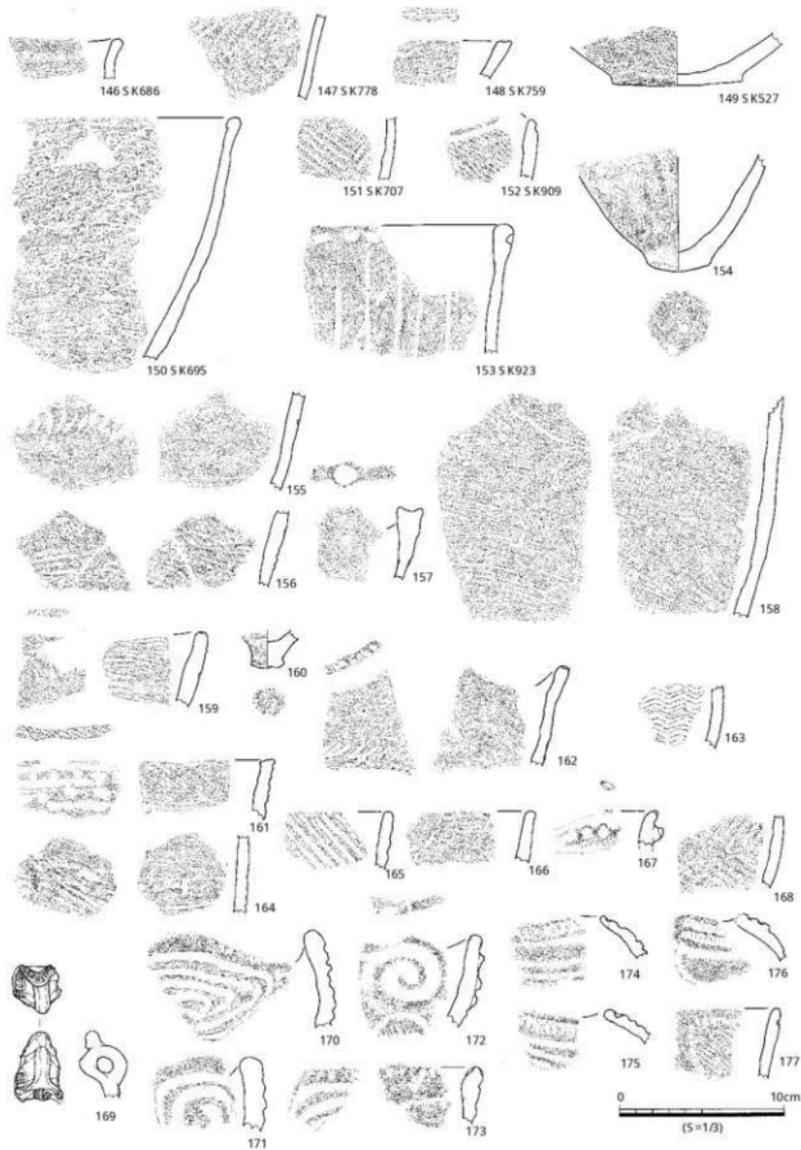


SK319 : 87-93 SK471 : 94・95 SK379 : 96

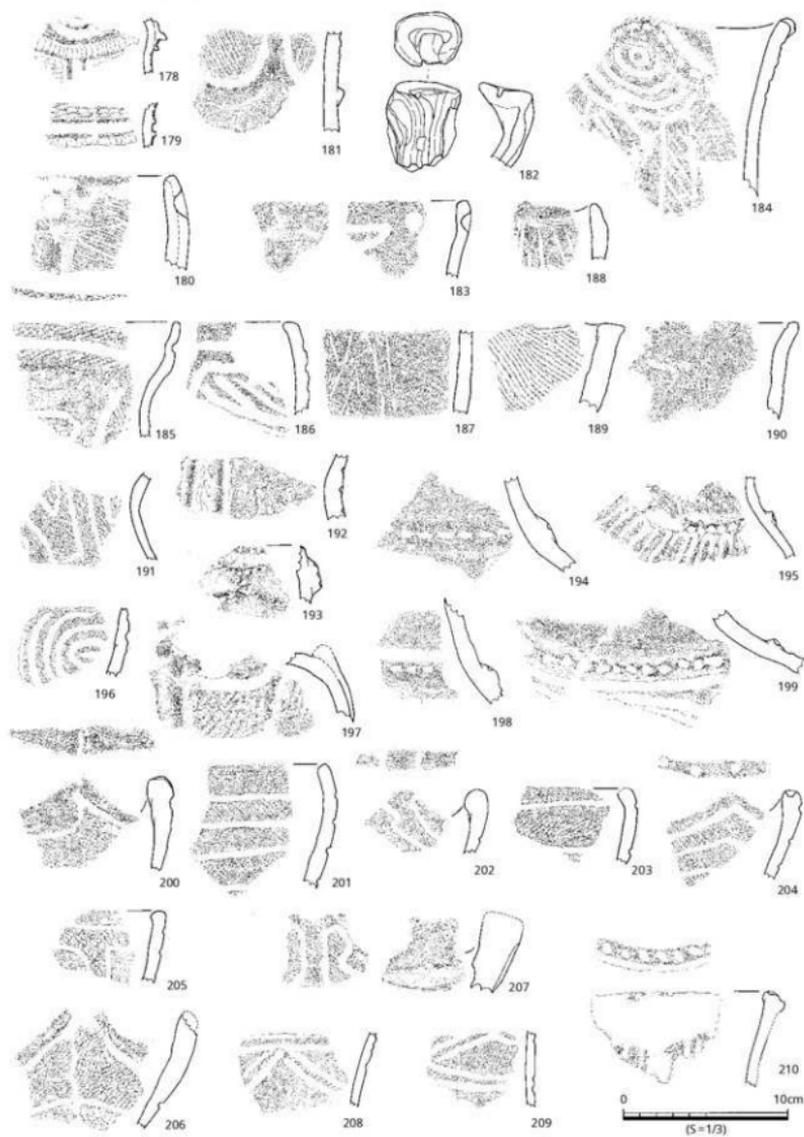


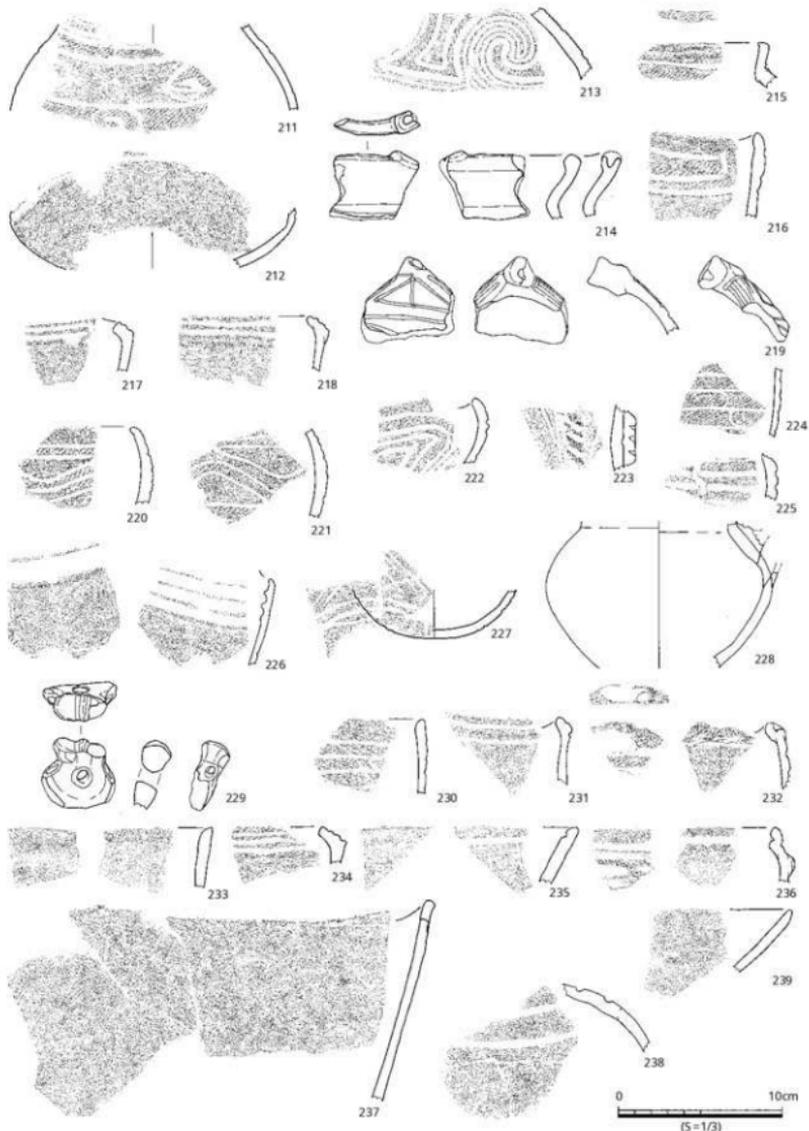
図版28 土器実測図(14) 遺構



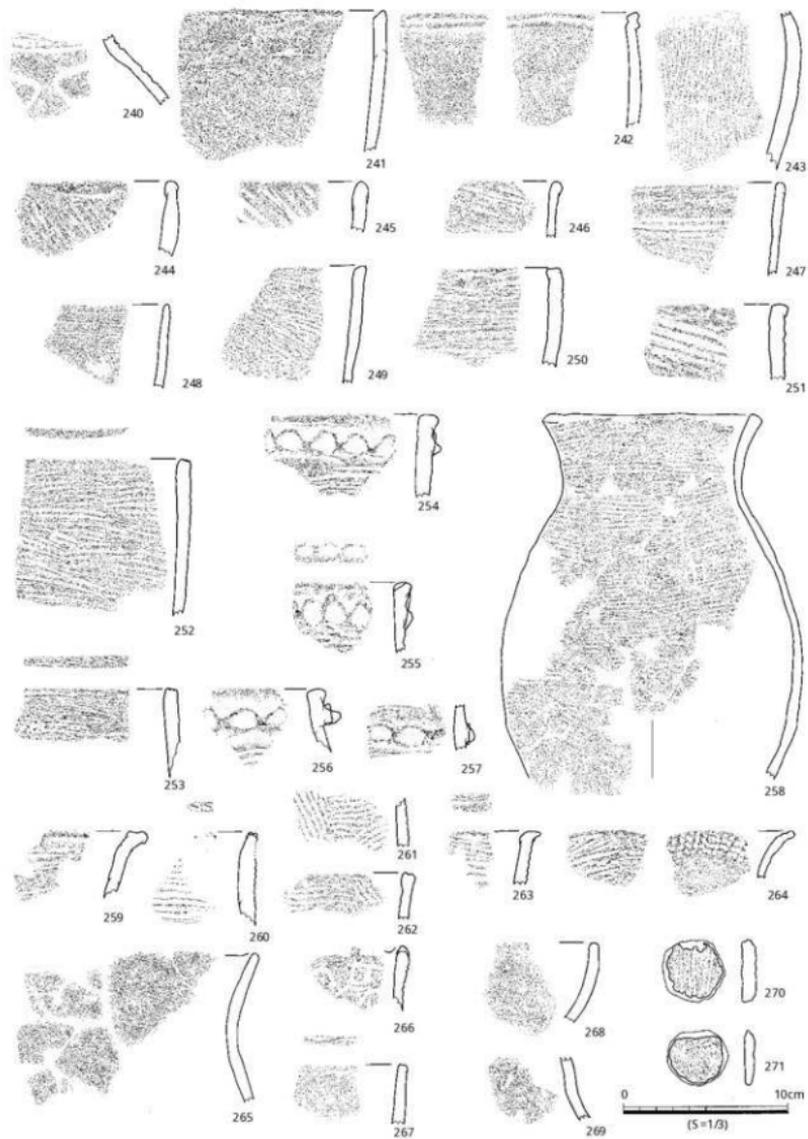


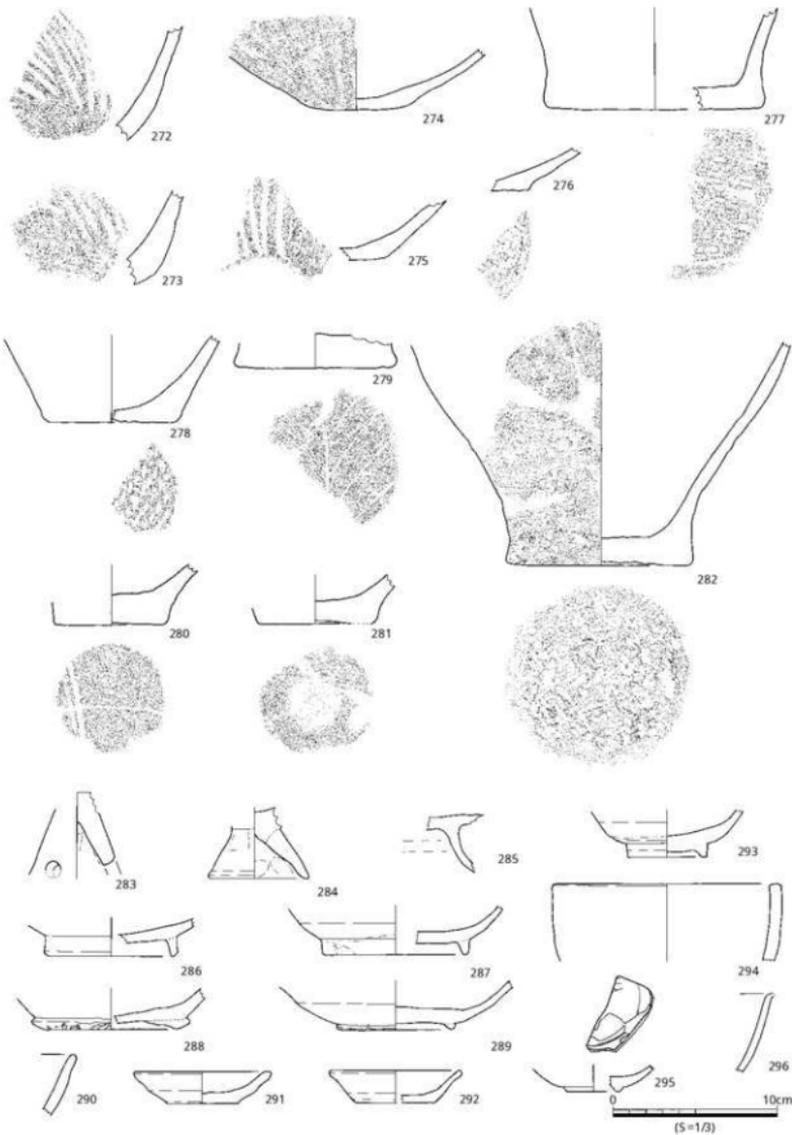
图版30 土器实测图(16)包含层



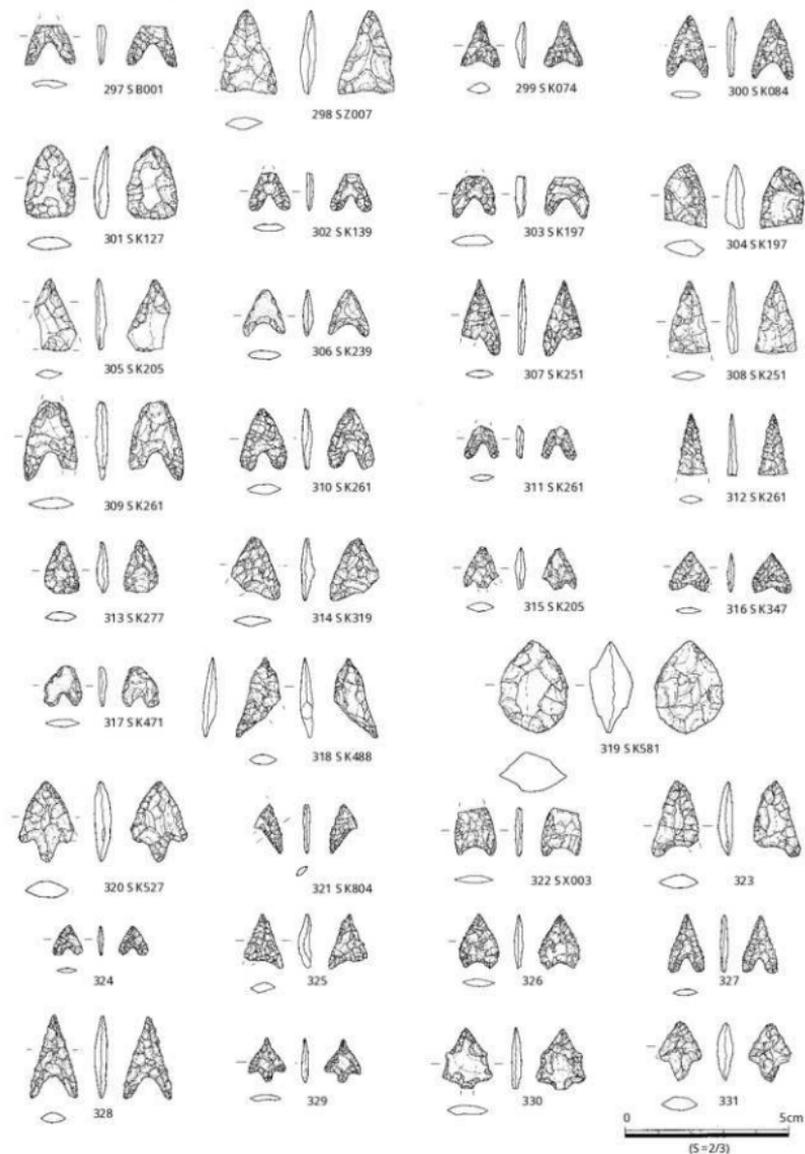


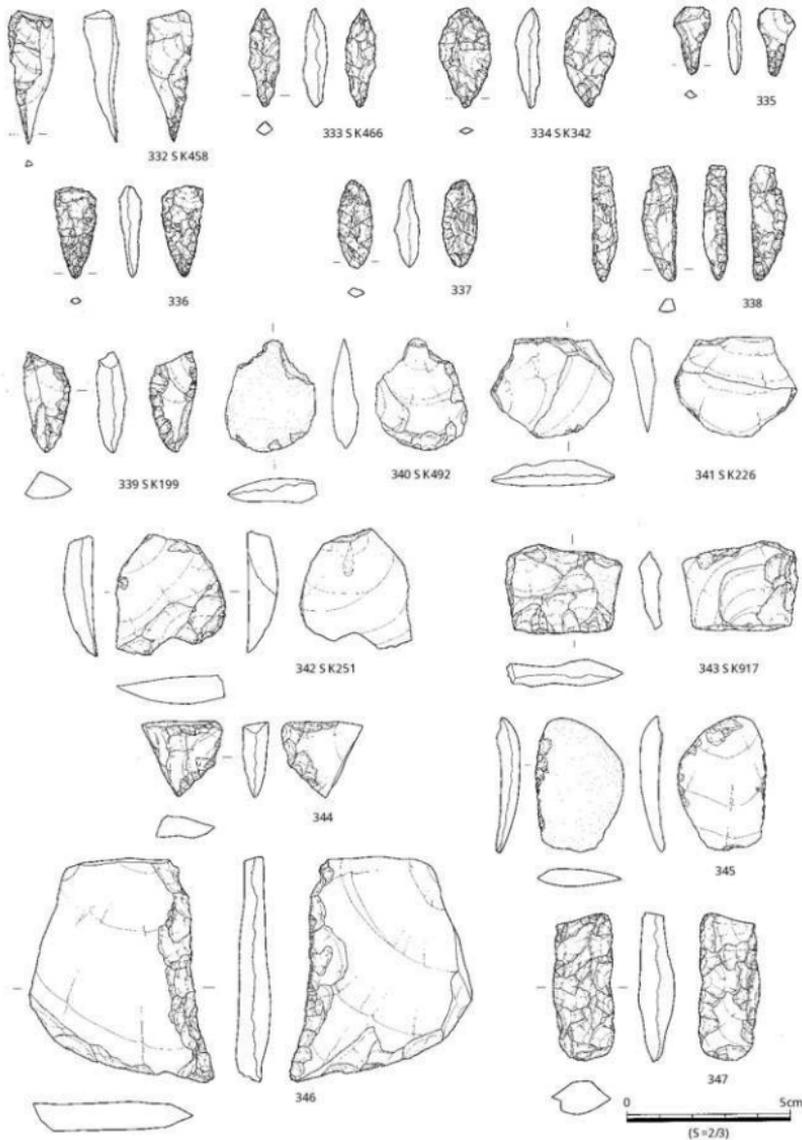
图版32 土器实测图(18)包含层



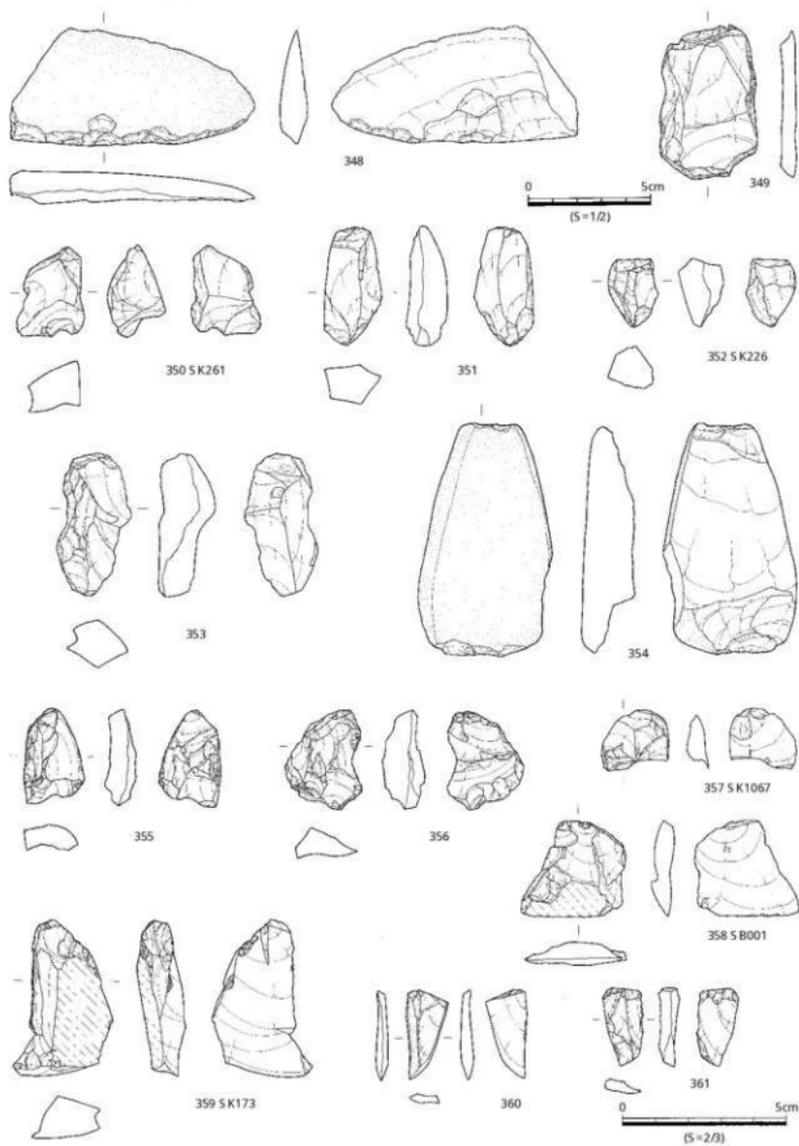


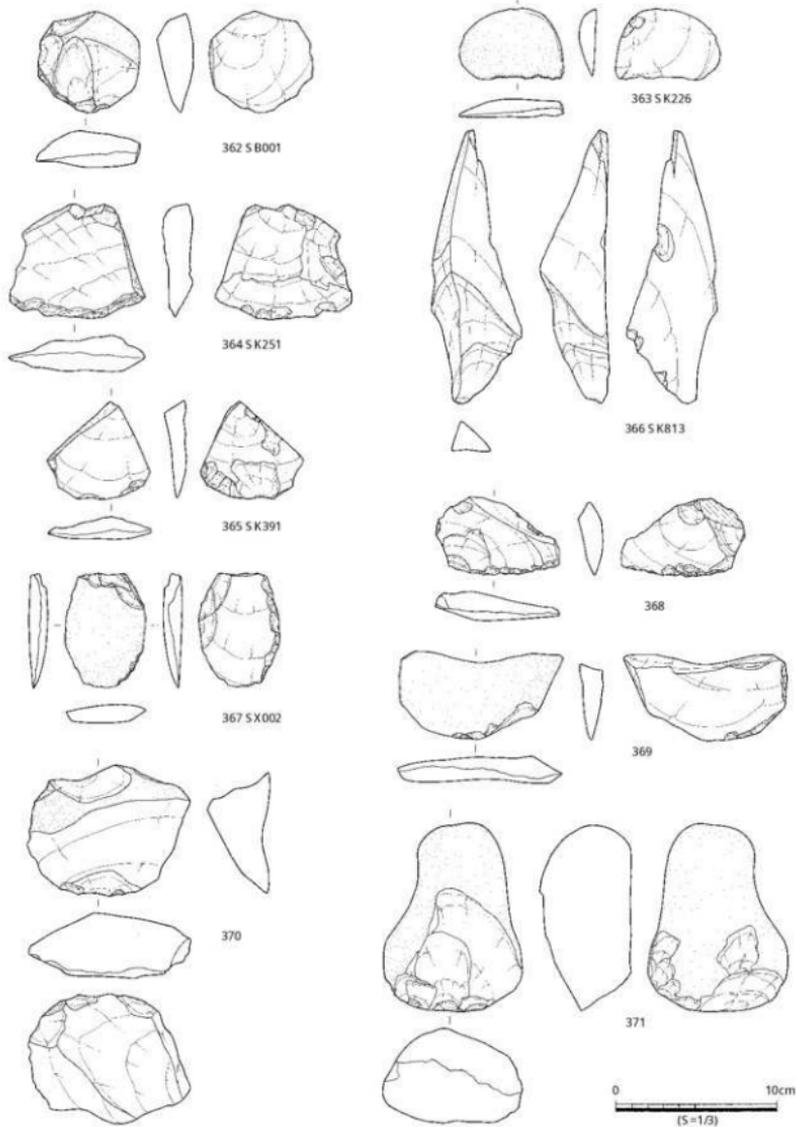
图版34 石器实测图(1)石锛



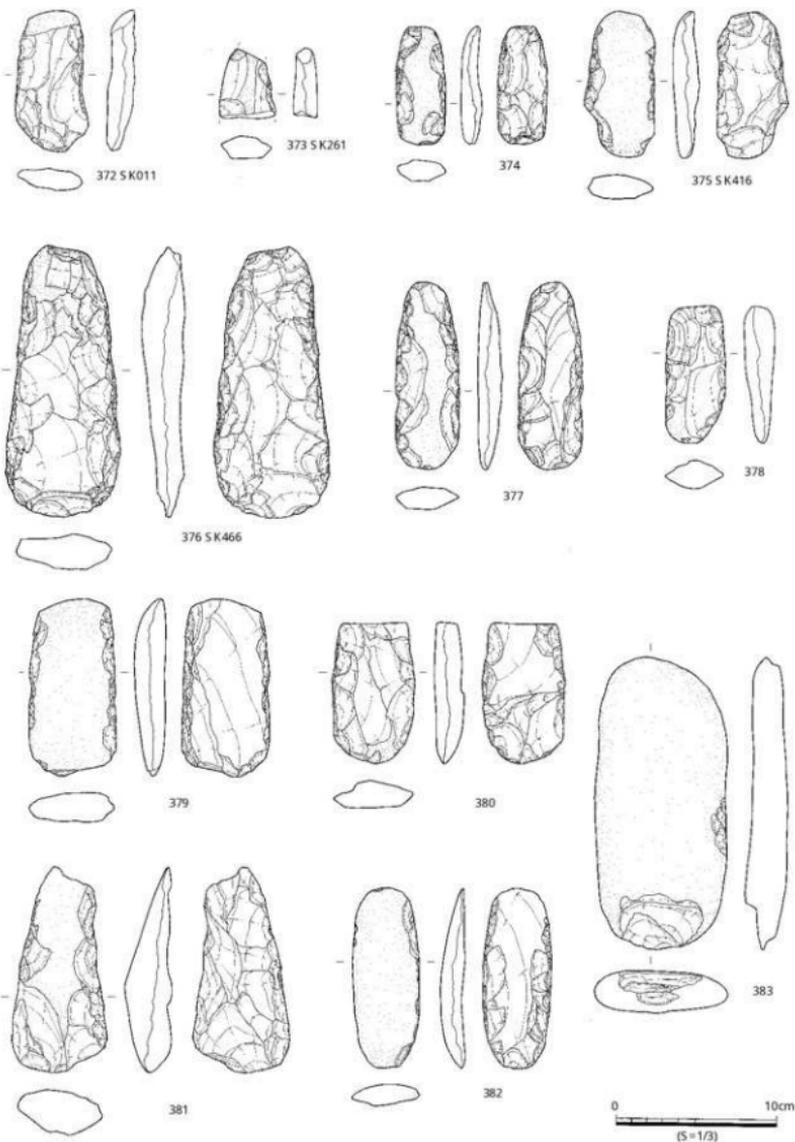


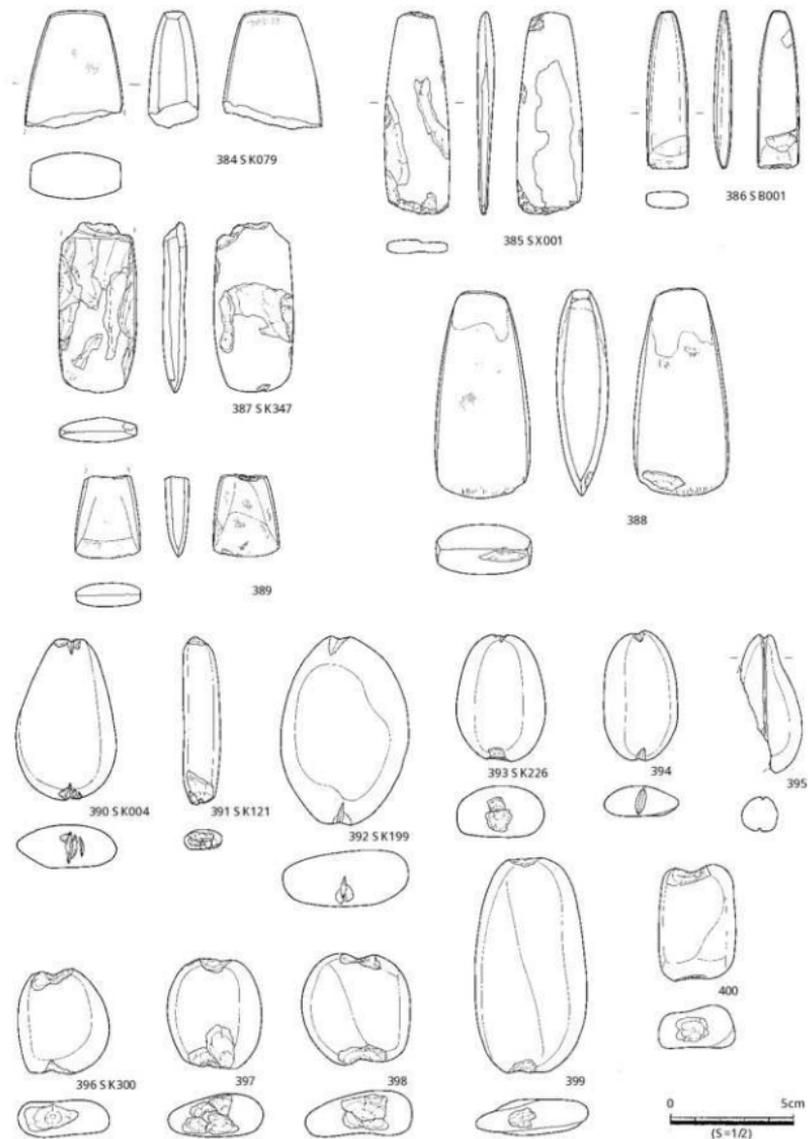
图版36 石器实测图(3) 粗製刃器·楔形石器·RF·UF



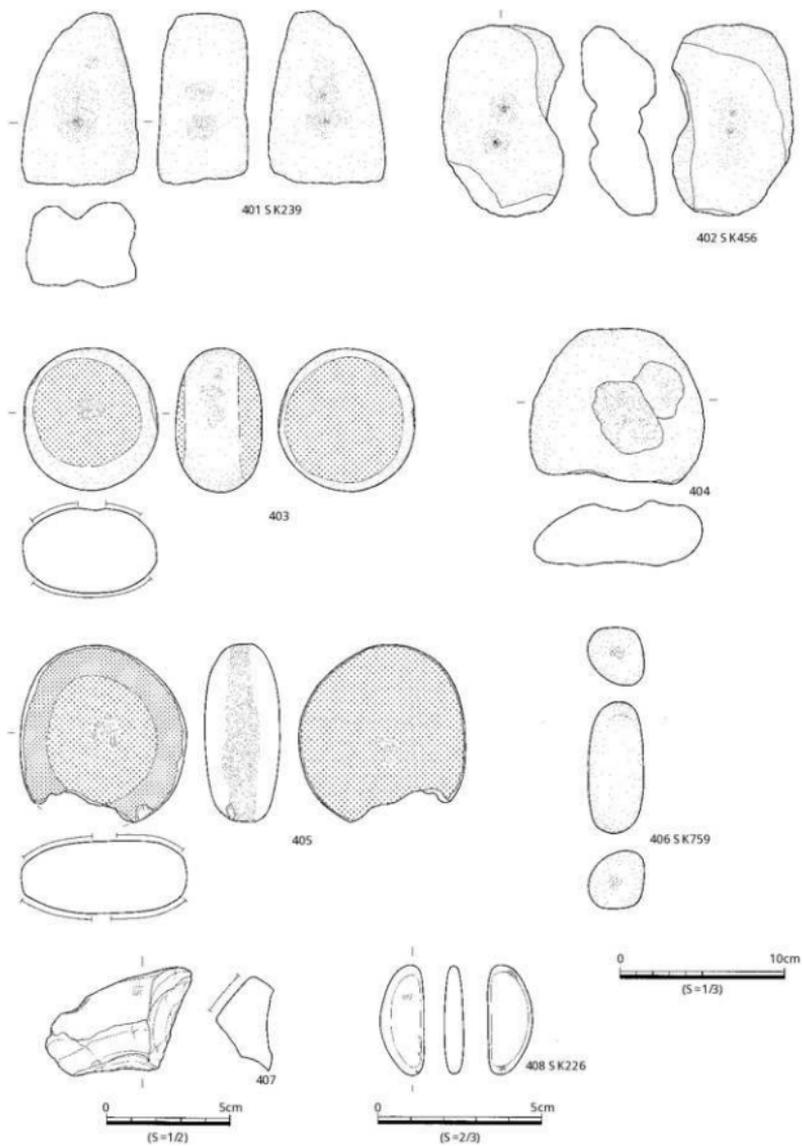


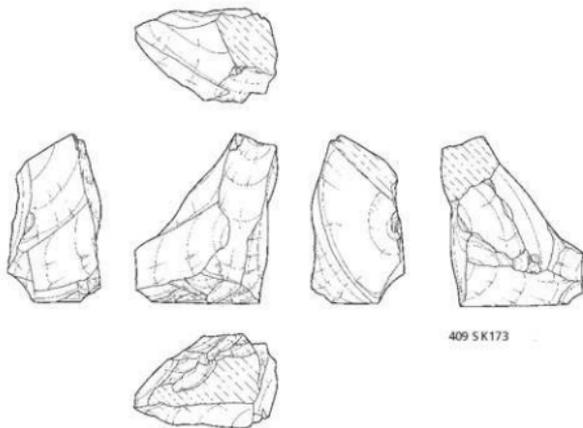
图版38 石器实测图(5) 打製石斧





図版40 石器実測図(7) 磨石類・砥石・石製品

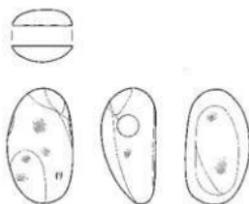




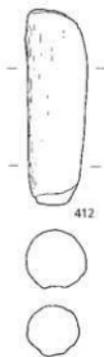
409 SK173



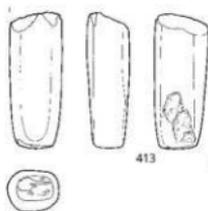
410 SK302



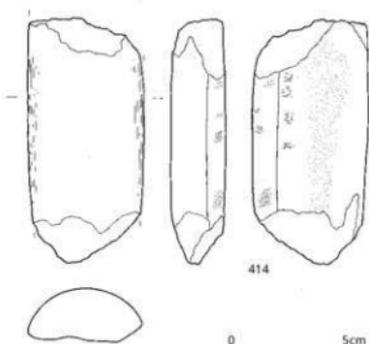
411 SK827



412



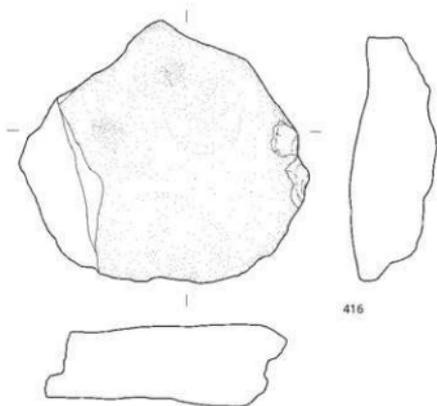
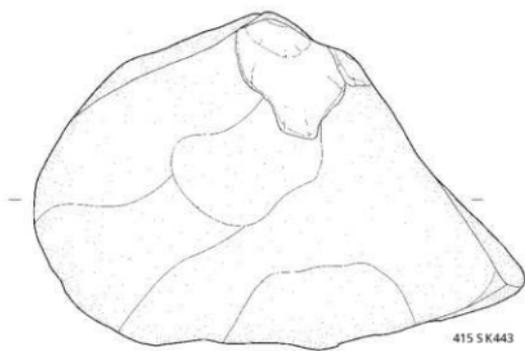
413



414



图版42 石器实测图(9)石皿



0 20cm
(S=1/6)

写真図版

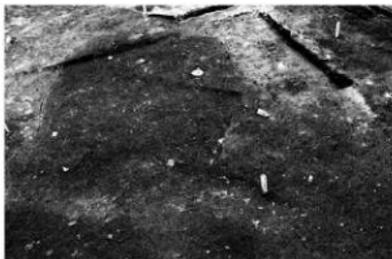


調査区遠景（南西より）



調査区全景（第2棟出面）

写真図版2



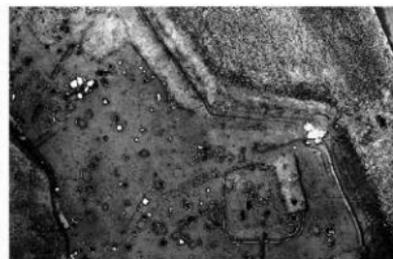
S B001検出状況（南西より）



S B001遺物出土状況（北より）



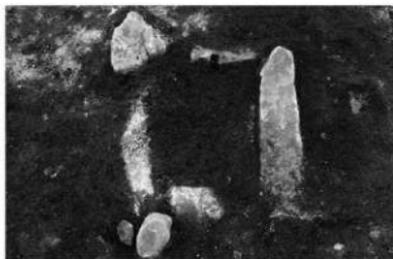
S H001完掘状況（北西より）



S B001・S H001完掘状況



S F001土層断面（北より）



S F002検出状況（東より）



S Z003棺蓋検出状況



S Z003土層断面（東より）



SZ004検出状況（北より）



SZ004中蓋出土状況（南より）



SZ002検出状況（南西より）



SZ007土層断面（北より）



SZ001検出状況（南西より）



SZ005土層断面（西より）



SZ006検出状況（北東より）



SZ008土層断面（南より）

写真図版4



SZ009土層断面(南より)



SK004礫検出状況(南より)



SK199礫検出状況(北東より)



SK121検出状況(西より)



SK205検出状況(北東より)



SK197遺物出土状況(南より)



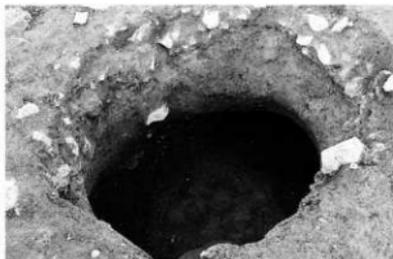
SK226礫検出状況(北より)



SK226遺物出土状況(北より)



SK251遺物出土状況(西より)



SK261完掘状況(南西より)



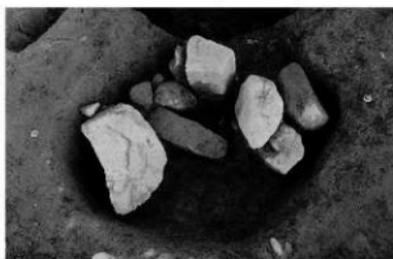
SK307土層断面(南西より)



SK319土層断面(北東より)



SK325土層断面(北東より)



SK345礫検出状況(西より)



SK379礫検出状況(南より)



SK416土層断面(南より)

写真図版6



SK443遺物出土状況(北より)



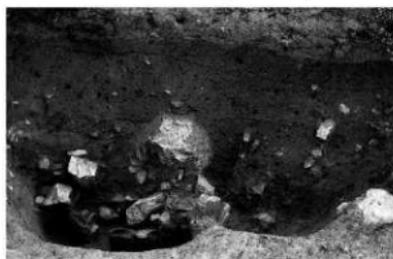
SK443遺物出土状況(南西より)



SK443遺物出土状況(南西より)



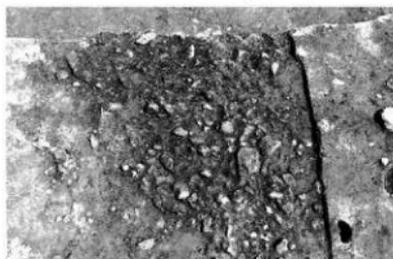
SK456土層断面(西より)



SK471遺物出土状況(西より)



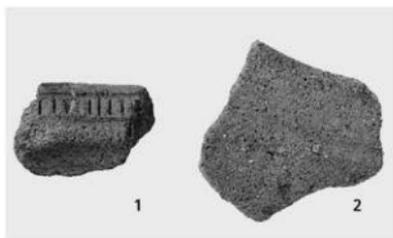
A区第3検出面 土坑完掘状況(南東より)



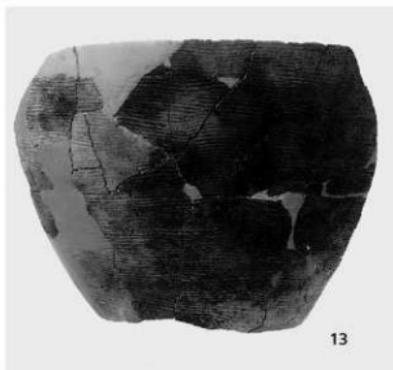
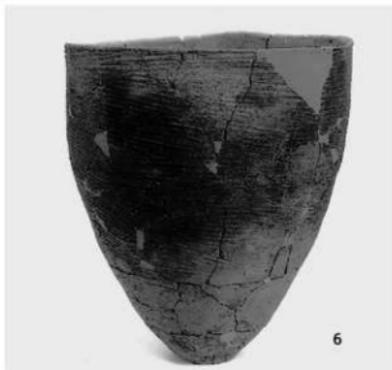
SX001検出状況(北西より)

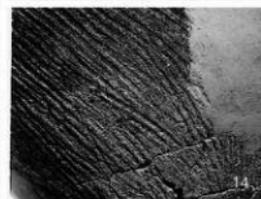
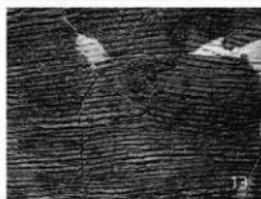
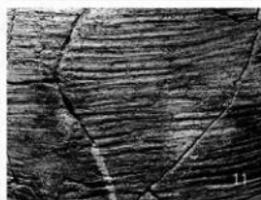
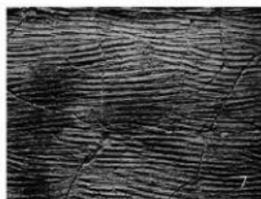


SX004完掘状況(西より)

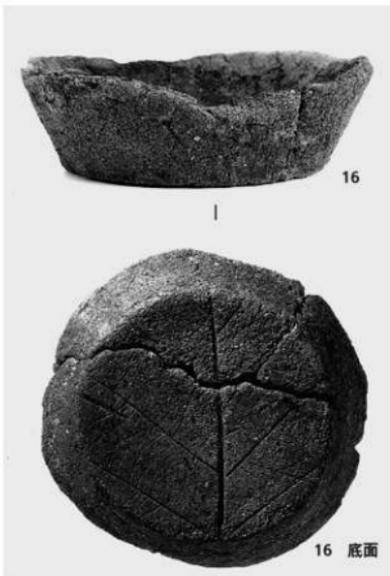


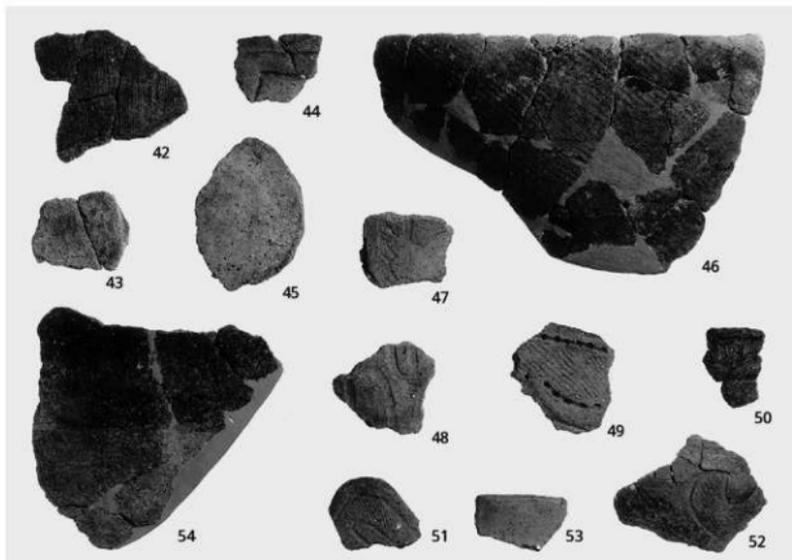
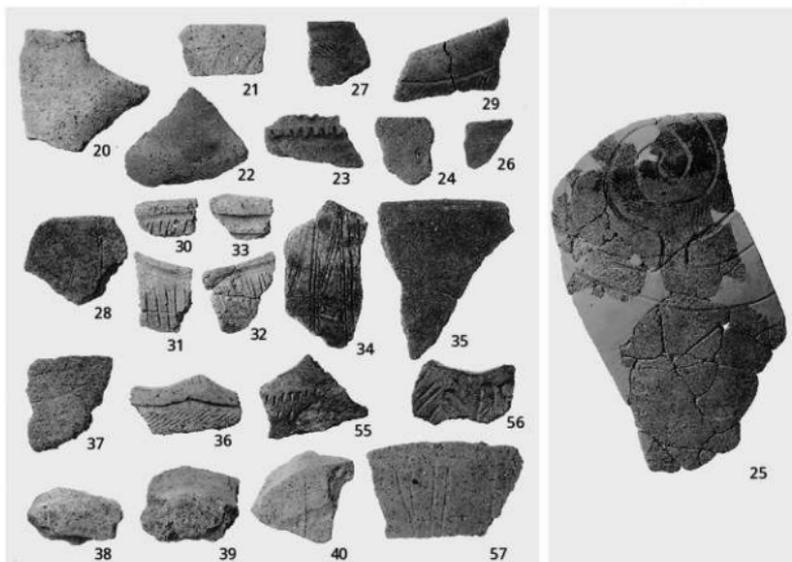
写真图版8 遺構出土土器(2)



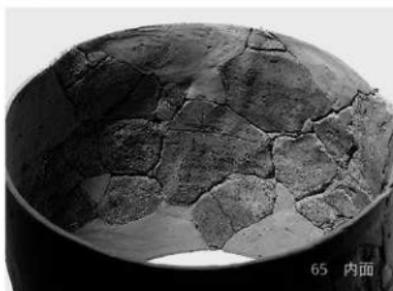
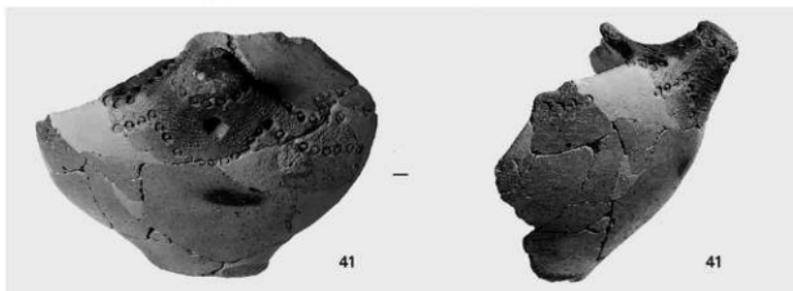


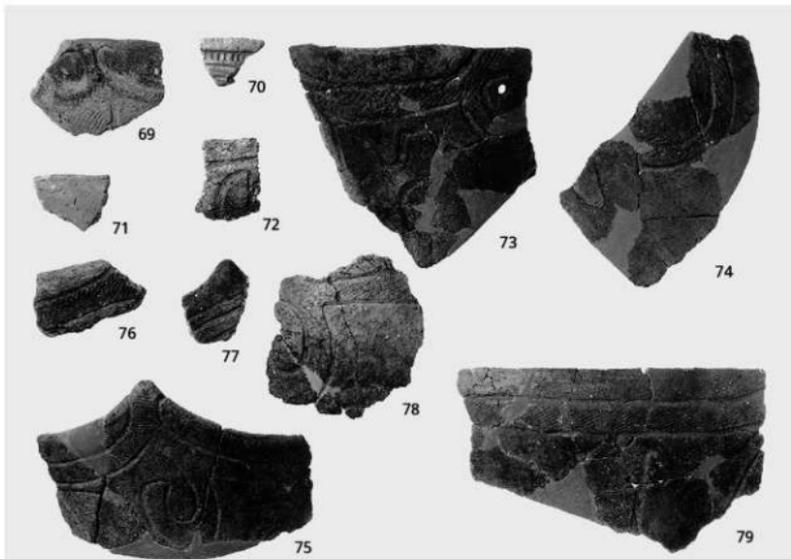
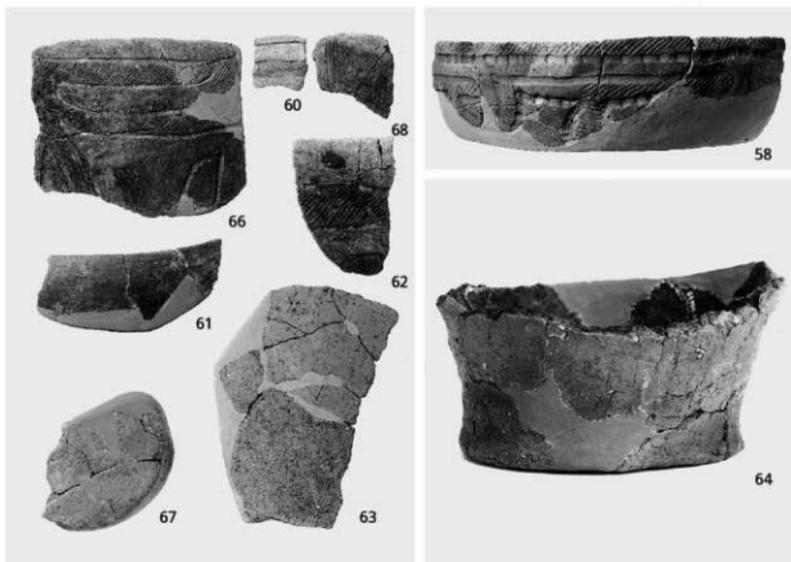
写真図版10 遺構出土土器(4)



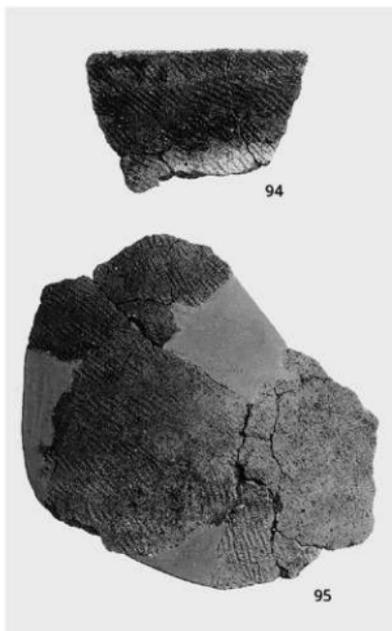


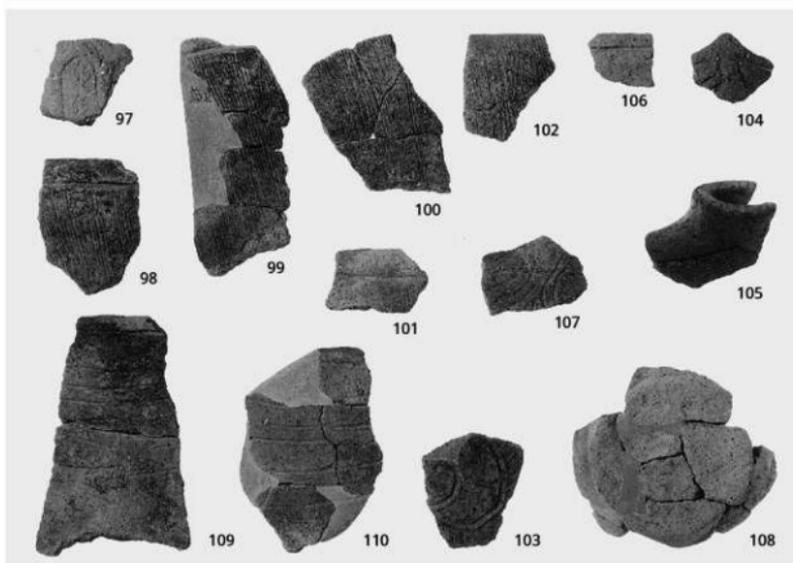
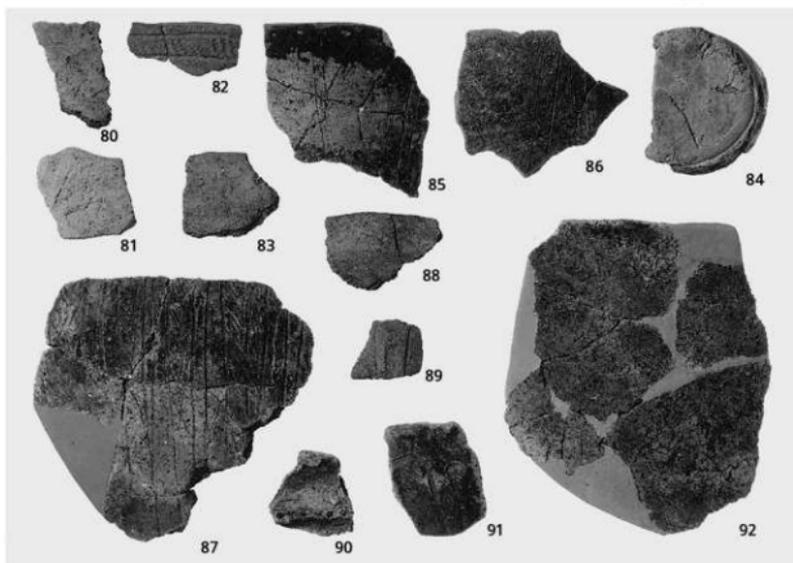
写真图版12 遺構出土土器(6)



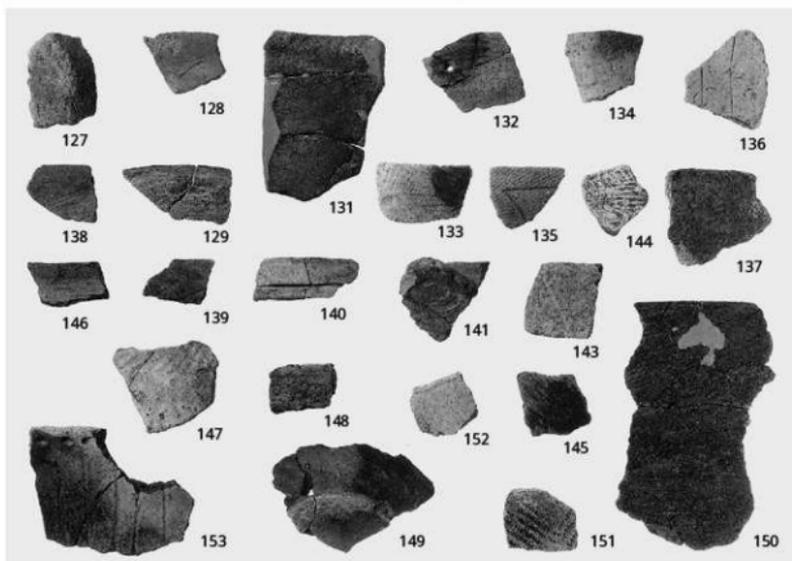
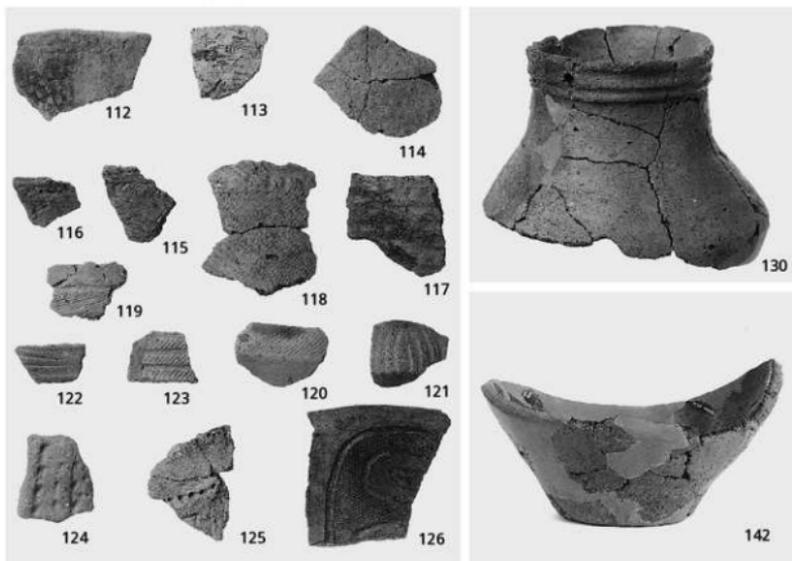


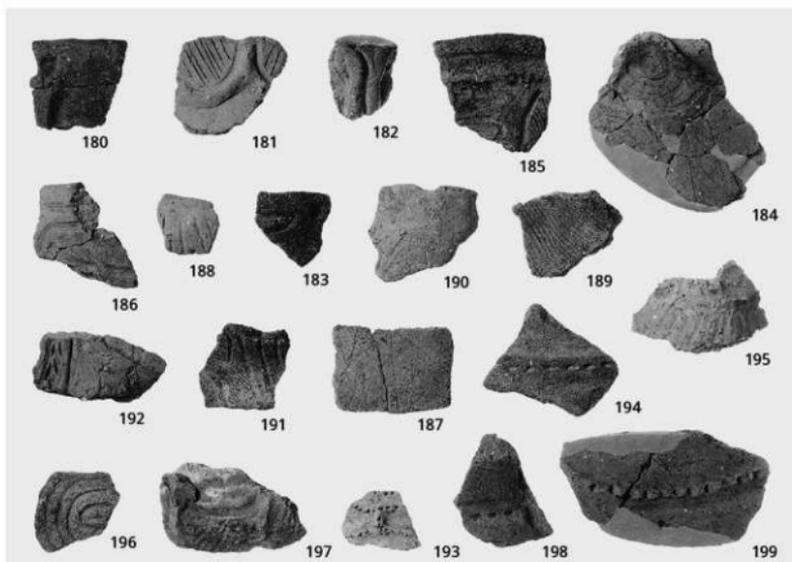
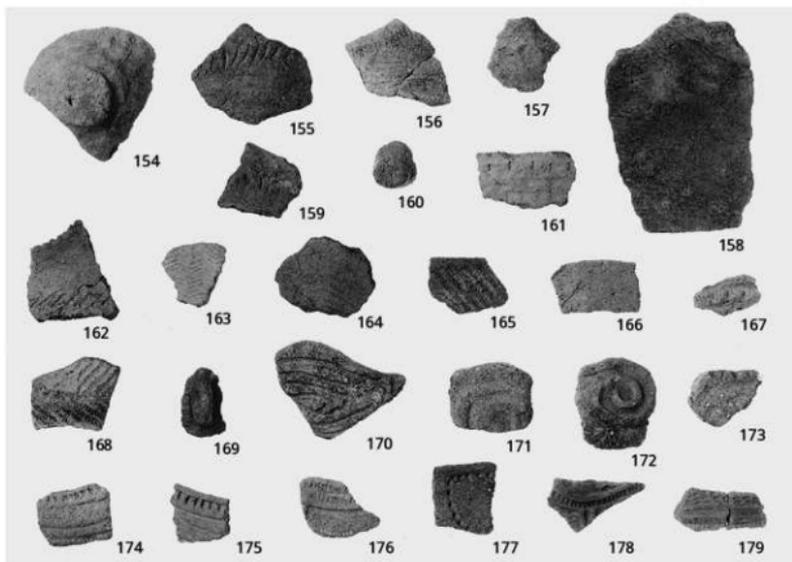
写真図版14 遺構出土土器(8)



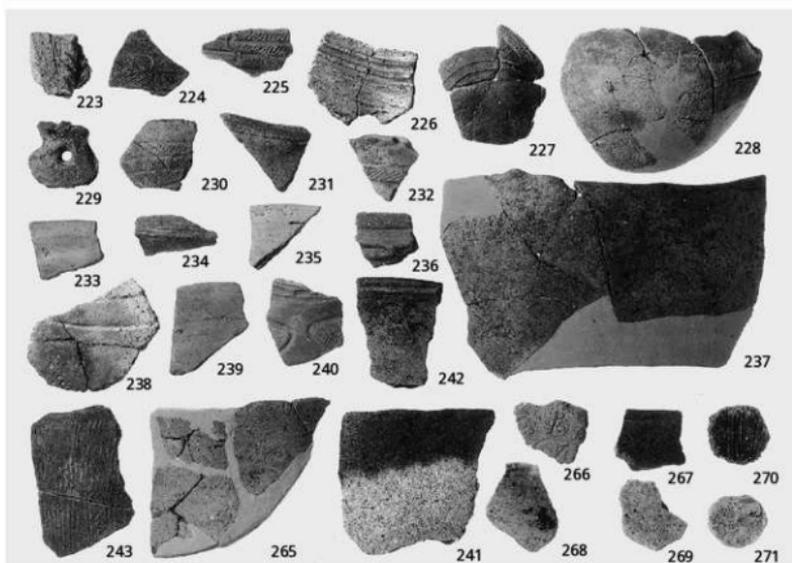
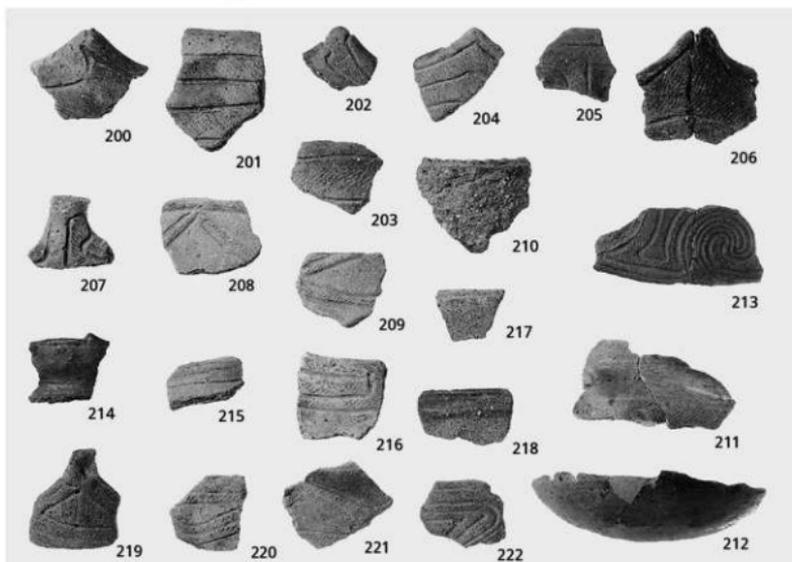


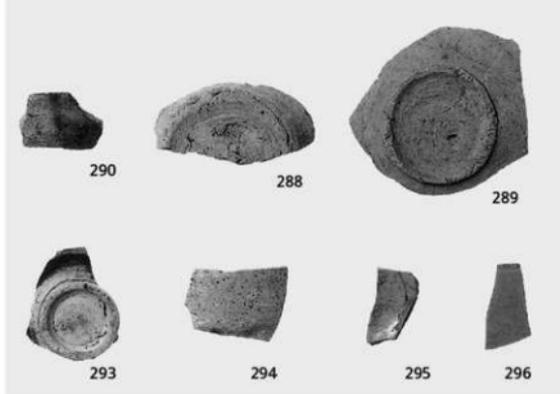
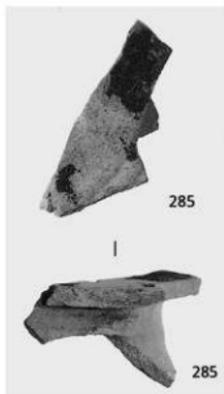
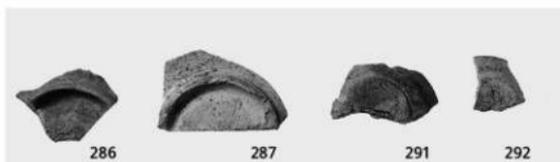
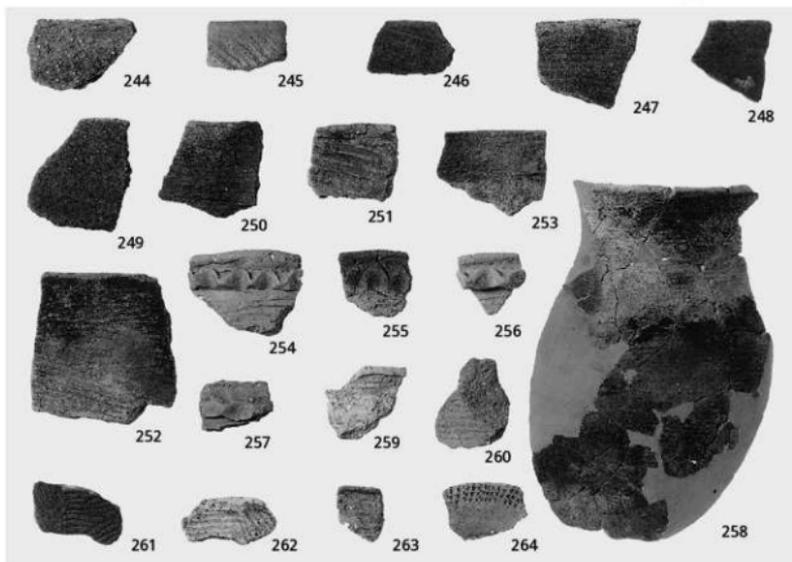
写真図版16 遺構出土土器(10)



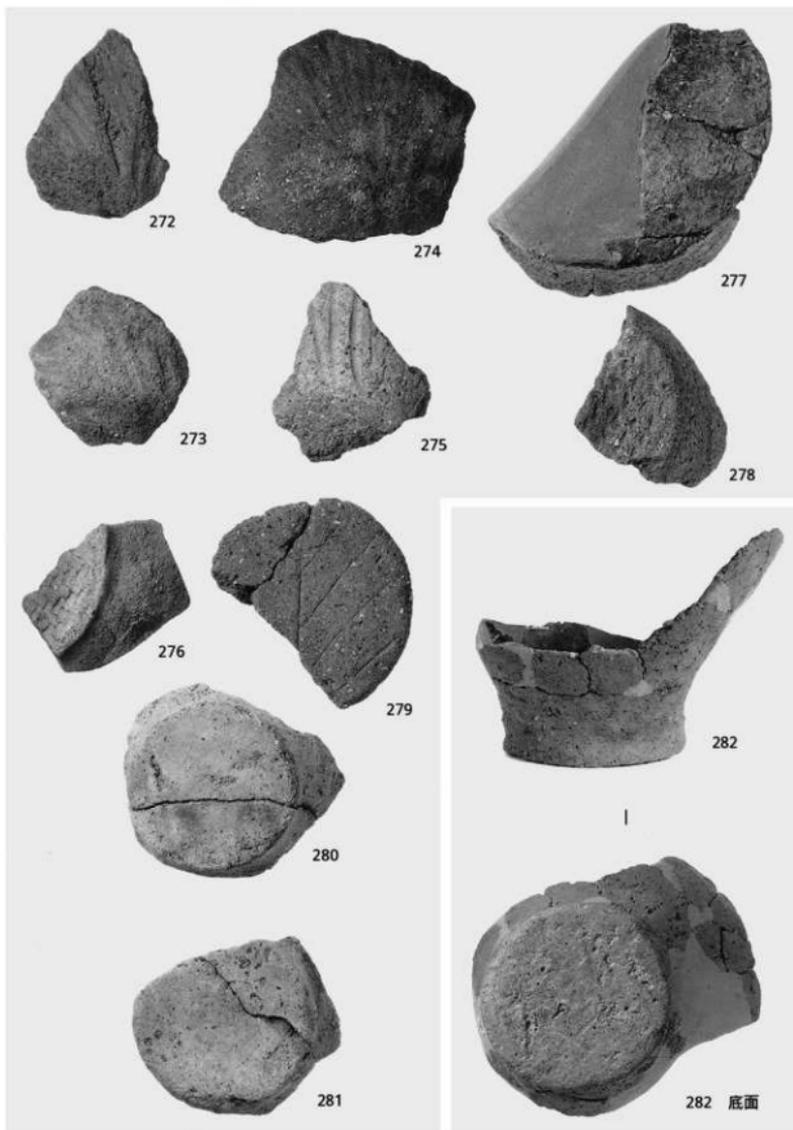


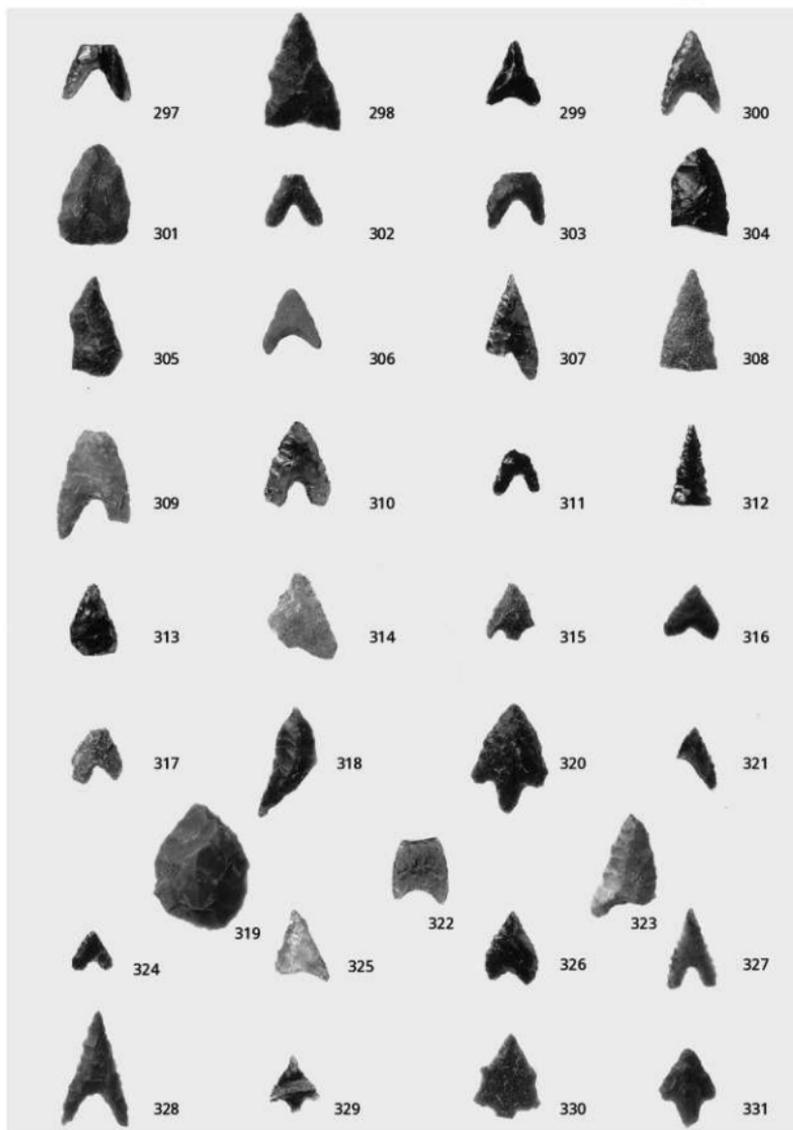
写真图版18 包含层出土土器(2)

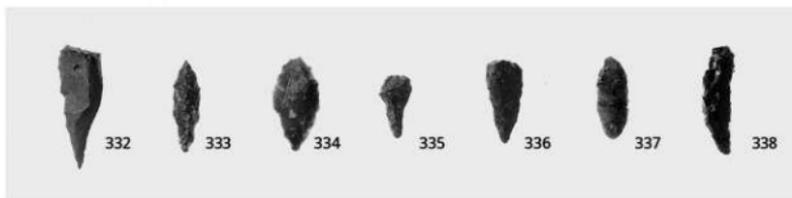




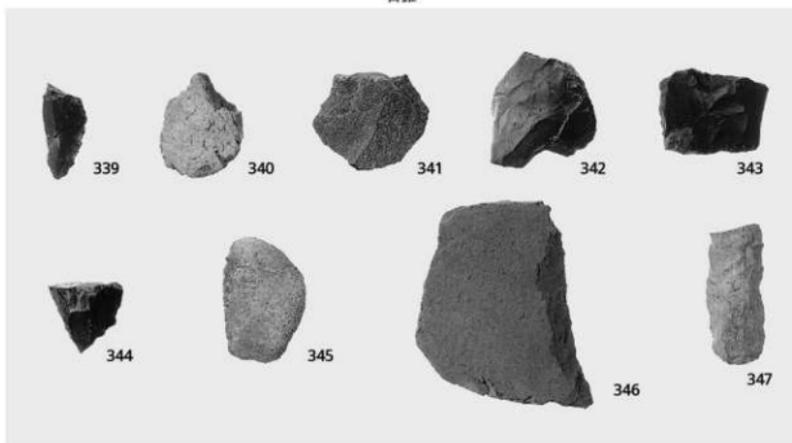
写真图版20 包含层出土器(4)



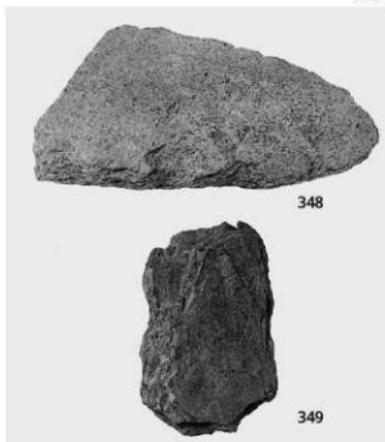




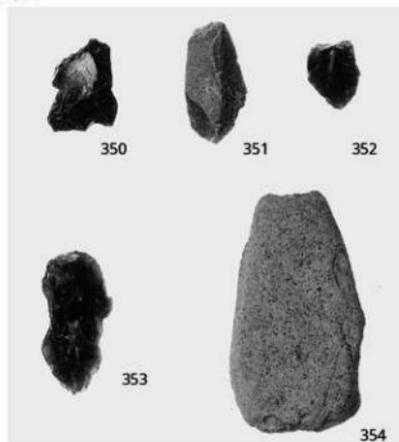
石錐



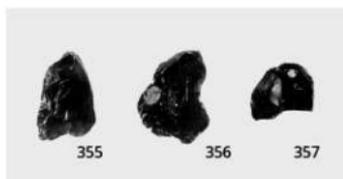
スクレイパー



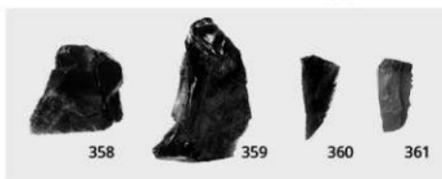
粗製刃器



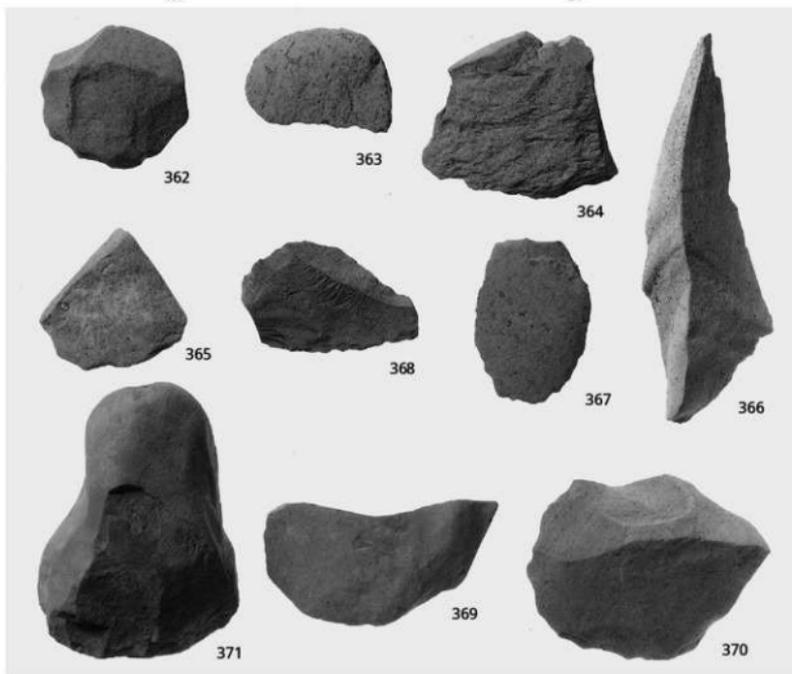
楔形石器



RF



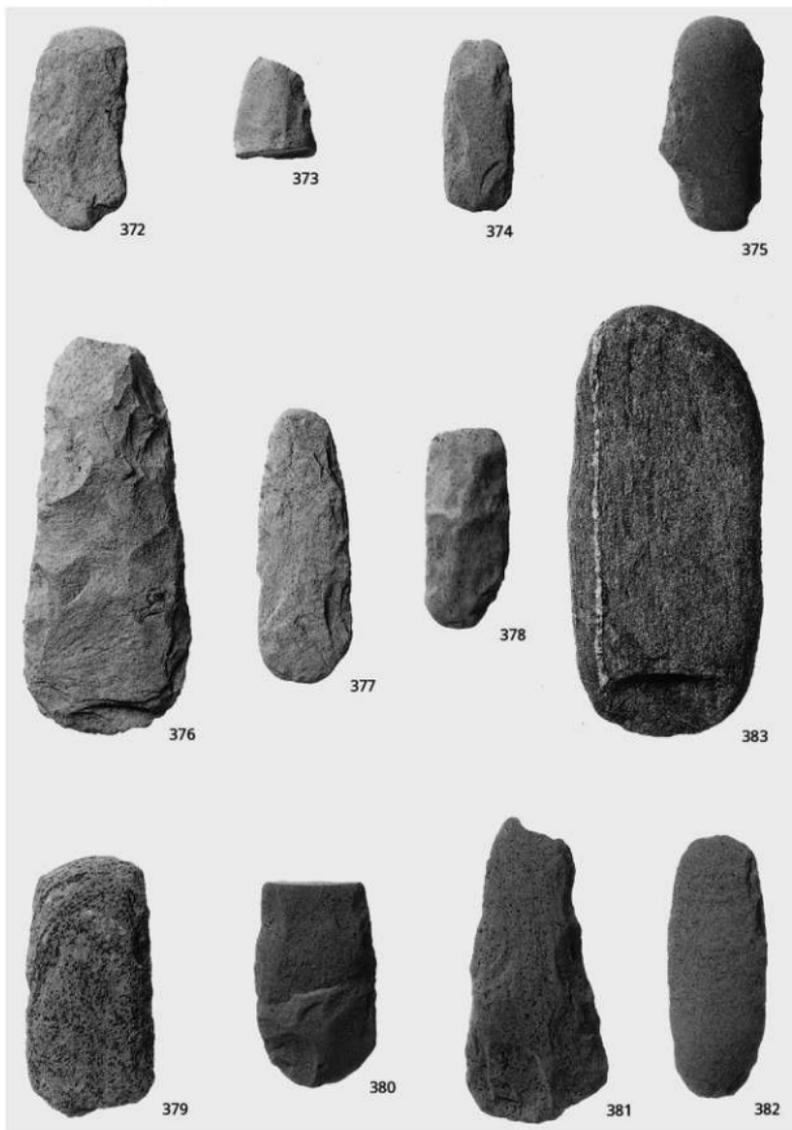
UF



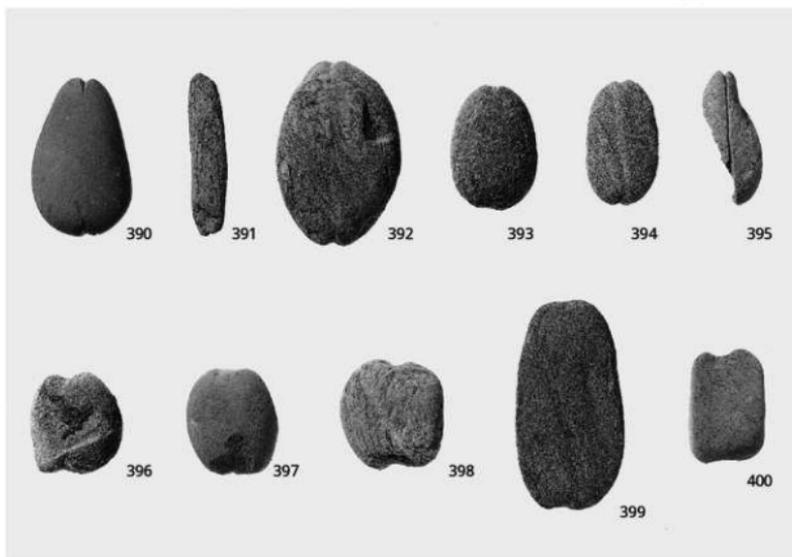
安山岩製礮器



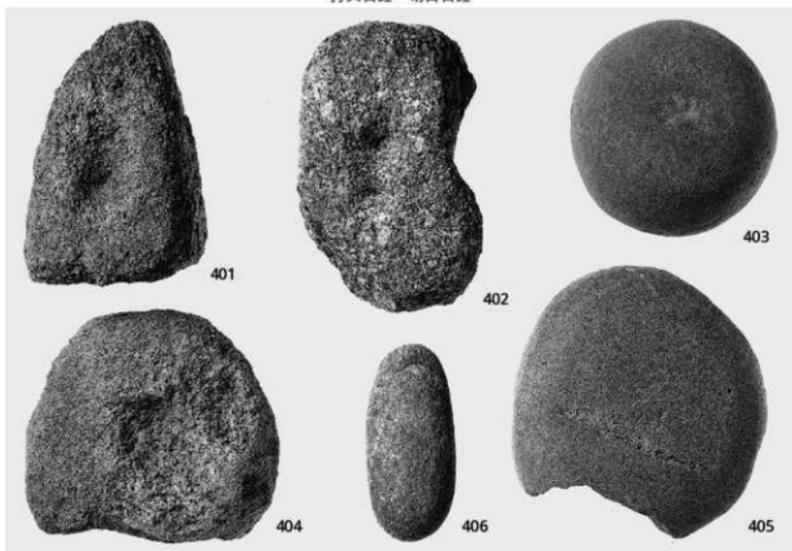
磨製石斧



打製石斧



打欠石錘・切目石錘



磨石類

写真図版26 石器(6)



407

砥石



408

石製品

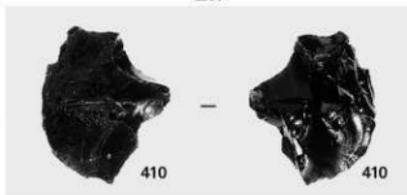


411

411

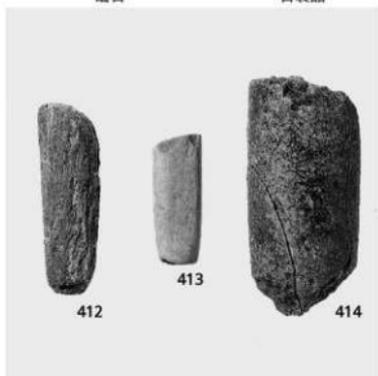
411

垂飾



410

410

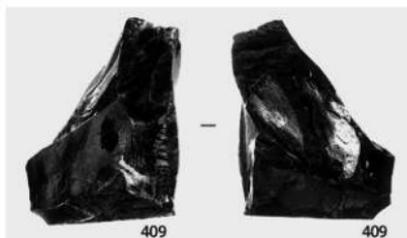


412

413

414

石棒・石刺



409

409

石核



415

416

石皿

報告書抄録

ふりがな	おおだいらいせき							
書名	大平遺跡							
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第97集							
編著者名	古屋寿彦 藤岡比呂志							
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058-237-8550							
発行年月日	西暦2006年3月1日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大平遺跡	岐阜県恵那市串原 字下大平	21210	08355	35° 15' 45"	137° 24' 38"	20030506~ 20031211	1,500㎡	県道下明智線道路 改良に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大平遺跡	集落跡・ 墓跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代	墓坑 石組遺構 土器埋設遺構 土器棺墓 竪穴住居跡	縄文土器 石器 弥生土器 石器 土師器			縄文時代中期末から後期 初頭にかけての墓坑 縄 文時代早期～晩期の遺物 弥生時代初頭の土器棺墓 古墳時代前期の遺構・遺物	
要約	<p>縄文時代の遺構は、墓と考えられる土坑を23基確認した。出土した土器の時期は縄文時代中期末～後期初頭のものが中心である。中期末の土器は無文若しくは条線のみで粗製土器がほとんどで、後期初頭のものの中津式に該当若しくは併行するものが多数である。また、中には水銀朱等で赤彩された土器も出土している。いずれの土坑も切り合いがほとんどなく、同時期若しくは短い期間に墓域として利用されていたことが推測される。その他、縄文時代早期末の土坑を確認した。石器では当地域で採取できない石材（黒曜石・下呂石）を用いた剥片石器が大多数を占めている。石材分析の結果、黒曜石については長野県和田峠及び諏訪産であることが確認できた。また、ヒスイ製の垂飾が土坑内から1点出土している。</p> <p>弥生時代初頭の土器棺墓は4基確認した。土器は日常使用された深鉢を棺に転用したもので、設置の方法は斜位と立位の大きく2種類に分かれる。立位のものについては他の土器と調整の方向や道具が違っていることから、産地若しくは時期の違いが考えられる。</p> <p>古墳時代前期の竪穴住居跡を1軒、擬立柱建物跡を1棟確認した。竪穴住居跡の埋土及び住居内土坑から土師器甕やミニチュア土器が出土した。</p>							

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第97集

大平遺跡

2006年3月1日

編集・発行 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 株式会社コムラ